加賀市

加茂キツネ塚遺跡
加茂新高遺跡
加茂ボケ生水ウラ遺跡

２０１６

石川県教育委員会

(公財)石川県埋蔵文化財センター

加茂キツネ塚遺跡
加茂新高遺跡
加茂ボケ生水ウラ遺跡

2016

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は加茂キツネ塚遺跡、加茂新高遺跡、加茂ボケ生水ウラ遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は石川県加賀市加茂町地内である。

3　調査原因は地方道改築事業一般県道片山津山代線であり、同事業を所管する石川県土木部道路建設課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

4　調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成25(2013)年度から、平成27(2015)年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。

5　調査に係る費用は石川県土木部道路建設課が負担した。

6　現地調査の期間・面積・担当グループ(以下G)・担当者(当時)は下記のとおりである。

《加茂キツネ塚遺跡　第1次》
期　間　平成25年9月20日～同年12月10日
面　積　1,750㎡
担　当　調査部特定事業調査G
担当者　端　猛(主幹)、荒川真希子(嘱託調査員)

《加茂キツネ塚遺跡　第2次》
期　間　平成26年5月12日～同年6月11日
面　積　450㎡
担　当　調査部県関係調査G
担当者　澤辺利明(主幹)、萩山教俊(嘱託調査員)

《加茂新高遺跡》
期　間　平成25年10月15日～同年12月5日
面　積　1,140㎡
担　当　調査部県関係調査G
担当者　澤辺利明(主幹)、清水晃大郎(嘱託調査員)

《加茂ボケ生水ウラ遺跡　第1次》
期　間　平成26年5月13日～同年10月27日
面　積　3,190㎡
担　当　調査部県関係調査G
担当者　立原秀明(主幹)、武部修一(専門員)

《加茂ボケ生水ウラ遺跡　第2次》
期　間　平成27年5月7日～同年6月10日
面　積　670㎡
担　当　調査部県関係調査G
担当者　澤辺利明(主幹)、瀧野勝利(専門員)

7　出土品整理は、平成26・27年度に実施し、調査部県関係調査Gが担当した。

8　報告書の作成は平成27年度に実施し、調査部県関係調査Gが担当した。執筆分担は、下記のとおりである。編集は立原が行った。刊行は平成27年度に実施し、調査部県関係調査Gが担当した。

第1章の一部、第3章、第4章、第5章の一部：澤辺
第2章：矢部史朗(嘱託調査員)
上記以外：立原

9　調査には下記の機関、個人の協力を得た(五十音順、敬称略)。

石川県土木部道路建設課、石川県南加賀土木総合事務所、加賀市教育委員会、戸根比呂子、湯尻修平

10　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

11　本書についての凡例は下記のとおりである。

⑴方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。

⑵水平基準は海抜高であり、T.P.(東京湾平均海面標高)による。

⑶出土遺物番号は挿図、観察表、写真とで対応する。なお、実測番号との対応については、出土遺物観察表に記載している。

⑷遺構の名称は、下記の略記号に番号(算用数字)を付し表記した。

SB：掘立桂建物、SE：井戸、SK：土坑、SD：溝、P：柱穴・小穴、SX：その他（風倒木痕、不明遺構等)

⑸参考文献は第2章末に一括して記載した。

目　　次

第1章　調査の経緯と経過 …… 1

第1節　調 査 の 経 緯 …… 1
第2節　現地調査の経過 …… 1
第3節　整理等作業の経過 …… 4

第2章　遺跡の位置と環境 …… 5

第1節　地 理 的 環 境 …… 5
第2節　歴 史 的 環 境 …… 6

第3章　加茂キツネ塚遺跡 …… 11

第1節　概　　要 …… 11
第2節　検出遺構・遺物 …… 13
第3節　小　　結 …… 21

第4章　加茂新高遺跡 …… 29

第1節　概　　要 …… 29
第2節　検出遺構・遺物 …… 31
第3節　小　　結 …… 35

第5章　加茂ボケ生水ウラ遺跡 …… 36

第1節　概　　要 …… 36
第2節　検出遺構・遺物 …… 39
第3節　小　　結 …… 59

第6章　総　　括 …… 66

写 真 図 版
報 告 書 抄 録

挿図目次

第１図　調査地位置図…… 2
第２図　所収遺跡の位置…… 5
第３図　周辺の遺跡(S=1/25,000)…… 8
第４図　調査区・グリッド配置図……11
第５図　加茂キツネ塚遺跡調査区全体図……12
第６図　調査区壁断面図、
　　土層断面採図箇所案内図……13
第７図　加茂キツネ塚遺跡全体図1/3……14
第８図　加茂キツネ塚遺跡全体図2/3……15
第９図　加茂キツネ塚遺跡全体図3/3……16
第10図　SK101遺構図……17
第11図　1号河道周辺平面図…… 18
第12図　1号河道断面図、SD201細分区割り …… 19
第13図　溝断面図 …… 20
第14図　ピット遺構図 …… 20
第15図　SX101遺構図…… 21
第16図　1号河道出土遺物1 …… 22
第17図　1号河道出土遺物2 …… 23
第18図　1号河道出土遺物3 …… 24
第19図　1号河道出土遺物4 …… 25
第20図　SD202ほか出土遺物…… 26
第21図　調査区割り、グリッド配置図 …… 29
第22図　加茂新高遺跡調査区全体図、
　　調査区西壁断面図 …… 30
第23図　1・2号井戸遺構図 …… 32
第24図　1号井戸出土遺物……32
第25図　1～3号溝平面図……33
第26図　1～3号溝断面図……34
第27図　1～3号溝出土遺物……34
第28図　調査区割り、グリッド配置図 ……37
第29図　調査区壁土層断面図 ……38
第30図　加茂ボケ生水ウラ遺跡全体図 ……40
第31図　遺跡全体図1……41
第32図　遺跡全体図2……42
第33図　遺跡全体図3……43
第34図　遺跡全体図4……44
第35図　遺跡全体図5……45
第36図　遺構図1(SB1) ……47
第37図　遺構図2(SB2・3・4)……48
第38図　遺構図3(SB5・6)……49
第39図　遺構図4(SB7) ……50
第40図　遺構図5(SB7) ……51
第41図　遺構図6(SB8・9)……52
第42図　遺構図7(SE・SK)……53
第43図　遺構図8(SK・P・SD) ……54
第44図　遺構図9(SD301・302)……57
第45図　遺構図10(SD) ……58
第46図　遺構図11(SD) ……59
第47図　遺構図12(SX) ……60
第48図　出土遺物実測図1……61
第49図　出土遺物実測図2……62
第50図　出土遺物実測図3……63
第51図　空中写真トレース図(約1/5,000)……66

表　目　次

第1表　調査体制 …… 4
第2表　整理等体制 …… 4
第3表　周辺の遺跡一覧1 …… 9
第4表　周辺の遺跡一覧2 ……10
第5表　加茂キツネ塚遺跡出土遺物観察表1 ……27
第6表　加茂キツネ塚遺跡出土遺物観察表2 ……28
第7表　加茂新高遺跡出土遺物観察表……35
第8表　加茂ボケ生水ウラ遺跡出土遺物観察表1 …64
第9表　加茂ボケ生水ウラ遺跡出土遺物観察表2 …65

図版目次

加茂キツネ塚遺跡
図版1　遺構1　調査地から北方を望む
（第1次調査区南半部調査終了時）
調査地から南東方を望む
（第2次調査終了時）
図版2　遺構2　調査区全景(俯瞰、合成写真)
調査地遠景(第1次調査区北半部
完掘時　北西から)
調査地遠景(第1次調査区南半部
完掘時　北東から)
調査地遠景(第2次調査時　東から)
調査地遠景(第2次調査時　北東から)
図版3　遺構3　第2次調査区完掘状況(南西から)
SK101完掘状況(南東から)
SK101土層断面オ(南東から)
SD101完掘状況(北西から)
SD101土層断面カ(南東から)
図版4　遺構4　SD201完掘状況(南東から)
SD201完掘状況(北西から)
SD201土層断面エ(南から)
SD104完掘状況(南から)
SD104土層断面ケ(南から)
図版5　遺構5　SD205完掘状況(北から)
SD205土層断面ウ(西から)
SD202～204完掘状況(南東から)
SD202～204完掘状況(南から)
SD202土層断面ア(南西から)
図版6　遺構6　SD203土層断面ア(南西から)
SD204土層断面イ(南から)
SX101土層断面コ(南西から)
調査区壁土層断面A(南東から)
調査区壁土層断面C(南東から)
調査区壁土層断面D(北西から)
発掘作業風景(第1次調査　南西から)
発掘作業風景(第2次調査　西から)
図版7　遺物1
図版8　遺物2
加茂新高遺跡
図版9　遺構1　調査地上空から東方(加茂集落)を望む
調査地上空から西方を望む
図版10　遺構2　完掘状況(俯瞰、合成写真)
調査地上空から南方を望む
調査地上空から北方を望む
発掘調査着手前の状況
A区完掘状況(南から)
図版11　遺構3　B区完掘状況(北から)
C区完掘状況(北東から)
1・2号井戸周辺完掘状況(南から)
1号井戸土層断面ア(南西から)
1号井戸完掘状況(西から)
図版12　遺構4　2号井戸完掘状況(南西から)
調査区西壁土層断面A(東から)
1号溝完掘状況(南西から)
1号溝土層断面エ(西から)
2号溝完掘状況(南西から)
2号溝土層断面オ(南西から)
3号溝完掘状況(北東から)
3号溝土層断面キ(南西から)
図版13　遺構5　加茂新高遺跡上空から北方に加茂キツネ塚遺跡を望む
遺物
加茂ボケ生水ウラ遺跡
図版14　遺構1　H26調査区俯瞰(北から)
H27調査区俯瞰(南から)
図版15　遺構2　全体合成写真
図版16　遺構3　北部建物群
南部溝群
図版17　遺構4　掘削終了ト区(南から)
掘削終了イ区(北から)
図版18　遺構5　掘削終了ル区(北から)
掘削終了ヲ区(西から)
図版19　遺構6　掘削終了チ区(南から)
掘削終了ロ区(北から)
図版20　遺構7　掘削終了ワ区(北から)
掘削終了カ区(西から)
図版21　遺構8　掘削終了ホ区(南から)
掘削終了リ区(北から)
図版22　遺構9　掘削終了ハ区(南から)
掘削終了ヨ区(南から)
掘削終了レ区(南から)
掘削終了ソ区(西から)
掘削終了ニ区(南から)
図版23　遺構10　掘削終了ヌ区(北から)
掘削終了ネ区(東から)

図版24　遺構11　掘削終了ツ区(北から)
掘削終了ヘ区(北から)
掘削終了タ区(北から)
ヲ区SK1完掘状況(東から)
ル区SK4土層断面(東から)
図版25　遺構12　ル区SK4完掘状況(北から)
ヲ区SK501土層断面(南東から)
ヲ区SK501完掘状況(北東から)
ル区SK5土層断面(西から)
ル区SK5完掘状況(南西から)
ツ区SK301土層断面(西から)
ツ区SK301完掘状況(西から)
ト区SE1土層断面(東から)
図版26　遺構13　ト区SE1完掘状況(北から)
イ区SX1完掘状況(西から)
イ区SX2遺物出土状況
イ区SX2土層断面(南から)
イ区SX2完掘状況(南西から)
ト区SX4土層断面(南東から)
ト区SX4完掘状況(東から)
ホ区SX201土層断面(東から)
図版27　遺構14　ト区SB1-P15土層断面(北から)
ト区SB1-P12土層断面(北から)
ト区SB1(東から)
ル区SB2・3(北から)
ル区SB4-P26土層断面(東から)
図版28　遺構15　ル区SB4-P25土層断面(東から)
ロ区SB7(北から)
ロ区SB7-7土層断面(西から)
ロ区SB7-2土層断面(西から)
カ区SB7の南辺(西から)
カ区SB7-P601遺物出土状況(東から)
カ区SB7-P604土層断面(北西から)
ロ区SB8(北西から)
図版29　遺構16　チ区SB10(北から)
チ区P124遺物出土状況(東から)
ヨ区P208完掘状況(北から)
イ区SD1土層断面(北から)
イ区SD1完掘状況(北から)
ト区SD5・6完掘状況(南東から)
チ区SD102土層断面(北東から)
ヲ区SD102土層断面(西から)
図版30　遺構17　チ区SD102完掘状況(北東から)
ホ区SD201・202土層断面(東から)
ホ区SD201・202 完掘状況(東から)
ツ区SD301①土層断面(西から)
ヌ区SD301②土層断面(西から)
ヌ区SD301③土層断面(東から)
ツ・ヌ区SD301(東から)
ヌ区SD302②土層断面(東から)
図版31　遺構18　ヌ区SD302(北東から)
ツ区SD302①土層断面(西から)
ツ区SD302(北東から)
ヘ区SD401土層断面(北から)
ヘ区SD401(北東から)
ヘ区SD402土層断面(東から)
ヘ区SD402完掘状況(東から)
タ区SD702土層断面(南から)
図版32　遺構19　タ区SD702完掘状況(南西から)
ネ区SD703土層断面(北から)
ネ区SD703完掘状況(南から)
タ区SD704土層断面(西から)
タ区SD704完掘状況(南東から)
ネ区溝群(南から)
ソ区東壁土層断面(西から)
ヨ区東壁②土層断面(西から)
図版33　遺構20　ワ区東壁土層断面(西から)
ル区東壁土層断面(西から)
ヌ区西壁土層断面(東から)
チ区西壁土層断面(東から)
ト区西壁土層断面(東から)
イ区遺構検出作業
空中写真測量委託2回目
調査区と殿様生水(南西から)
図版34　遺構21　SK701・702完掘状況(南から)
SK701・702土層断面(南から)
SD701完掘状況(西から)
SD701土層断面イ(東から)
SD701・702完掘状況(南西から)
図版35　遺構22　SD702・703完掘状況(北東から)
SD702土層断面ク(南から)
SD703完掘状況(南西から)
SD703土層断面コ(南西から)
SD704完掘状況(東から)
図版36　遺物1
図版37　遺物2
図版38　遺物3

第1章　調査の経緯と経過

第1節　調査の経緯（第1図）

本遺跡の発掘調査は、石川県土木部道路建設課（以下道路建設課）が所管する地方道改築事業一般県道片山津山代線に伴い、石川県教育委員会（以下県教委）及び公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下埋文センター）により実施されたものである。

都市計画道路片山津インター山代線（一般県道片山津山代線、主要地方道山中伊切線）は、加賀市伊切町を起点とし、加賀市山代温泉を終点とする延長11,390mの道路で、北陸自動車道片山津IC、JR北陸本線加賀温泉駅と片山津温泉、山代温泉、山中温泉を直結するアクセスルートである。

このうち、一般県道片山津山代線（加賀市加茂町～山代温泉14区地内）については、加茂地内が未整備で、狭隘な集落内現道に人・車が共存しているほか、一般国道8号と交差する加茂交差点は交通上のボトルネックとなって渋滞が発生している。

本事業は、一般国道8号の4車線事業の進展にともなって、一般県道片山津山代線の整備を行うことで広域的な南北地域連携軸を構築し、地域の振興と発展ならびに当該道路の走行性・利便性・安全性の向上を図ることが目的とされている。

平成23年度に事業計画が道路建設課から、石川県教育委員会文化財課（以下文化財課）に提示され、同年度及び24年度に事業地内の分布調査が実施された。その結果、3箇所で新規に埋蔵文化財包蔵地が確認され、所在地の小字名からそれぞれ、加茂キツネ塚遺跡、加茂新高遺跡、加茂ボケ生水ウラ遺跡と名付けられた。

道路建設課及び工事担当の石川県南加賀土木総合事務所（以下南加賀土木）と文化財課による協議・調整の結果、工事による埋蔵文化財への影響が避けられないことや、3遺跡分の調査対象面積が7,200㎡になることが確認され、現地調査は複数年に分けて国道8号以北を優先的に完了させることが決定された。

第2節　現地調査の経過

・加茂キツネ塚遺跡　調査の経過

発掘調査は平成25・26年度に実施した。発掘面積は2,200㎡であり、初年度に1,750㎡を、次年度に450㎡の調査を実施した。それぞれの調査範囲について、道路両側の水路敷設工事を農閑の冬期間に竣工する必要があり、初年度に水路全域を含む調査が要望されたことから、変則的な調査区形状となった。

平成25年度　9月13日に南加賀土木、文化財課、埋文センターの三者による現地協議を行い、事業計画や調査範囲、ユニットハウス設置場所、駐車場所等を確認した。調査区は二分し、まず北半部から調査着手。10月1日に重機による表土除去に着手。10月7日より作業員投入。10月31日には空中写真測量実施。北半部埋め戻しののち11月7日より南半部の調査に着手した。天候不順な日が多く湧水に難儀したが12月5日には第2回空中写真測量を実施した。その後補足調査を行い、12月10日には発掘機材撤収。南加賀土木に現場を引き渡し現地調査を終了した。

平成26年度　4月25日に南加賀土木、文化財課、埋文センターの三者による現地協議を行った。

※（　）は周辺の字名。「加賀江沼の字名」より　**第１図　調査地位置図**

現地調査は5月12日に重機による表土除去に着手。翌5月13日より作業員投入。三方が昨年度調査済み区に接し遺構の状況がうかがわれたもので、遺跡端に接する調査区南半部は遺構が希薄。主な遺構は北半部の自然河道でありその掘削に時間を要した。6月2日に空中写真測量実施。6月4日に発掘機材撤収。6月10日に南加賀土木に現場を引き渡し現地調査を終了した。

・加茂新高遺跡　調査の経過

発掘調査は平成25年度に実施した。加茂キツネ塚遺跡と同日の9月13日に南加賀土木、文化財課、埋文センターの三者による現地協議を行い、事業計画や調査範囲、ユニットハウス設置場所、駐車場所等を確認した。また、調査地に接して農業用倉庫が位置するが、ここへの進入路確保のため調査区を分割して調査を実施することとなった。調査区は三分し、まず中央のB区から調査着手。10月22日に重機による表土除去を行い、翌23日より作業員投入。遺構・遺物の密度は薄く11月7日にはB区空中写真測量実施。その後南側のA区に調査着手した。B区の埋め戻し、倉庫からの進入路造成を待って、11月19日にはC区にも調査着手、11月21日にA･C区空中写真測量を実施した。その後補足調査を行い、12月5日には発掘機材撤収。南加賀土木に現場を引き渡し、現地調査を終了した。

・加茂ボケ生水ウラ遺跡　調査の経過

発掘調査は平成26・27年度に実施した。発掘面積は3,860㎡であり、初年度に3,190㎡を、次年度に670㎡の調査を実施した。それぞれの調査範囲について、道路両側の水路敷設工事を農閑の冬期間に竣工する必要があり、初年度に水路全域を含む調査が要望されたことから、変則的な調査区形状となった。

平成26年度　4月25日に南加賀土木、文化財課、埋文センターの三者による現地協議を行い、事業計画や調査範囲、ユニットハウス設置場所、駐車場所等を確認した。

調査地は、数区画分の水田と大豆畠の中央を東西幅16ｍ、南北長237ｍで縦断するため、田畠を東西に分断する形となっていた。田畠は調査期間中も耕作されるとのことであり、東側田畠への農作業車通路及び水路の確保が必要であった。このため、調査地内に仮設農道と4箇所の横断水路が設けられていた。これらは作物の収穫終了まで撤去できないことから、先行部分として仮設農道と水路以外を調査し、収穫後に残り部分の調査を行う予定としていた。しかし、表土置き場の不足や水田からの漏水等により、先行部分について切り替えしが必要となり、さらに田畠の作物収穫に時期差があることから仮設農道と水路部分も2分割することとなり、大きく4回の各作業工程が必要となった。

5月13日に重機による事務所・駐車場用地の造成、26日から表土除去に着手した。6月4日から作業員を入れて調査開始。遺跡は過去の耕地整理によって削平されていること、遺構は調査地の北側と南側に集中することを確認した。7月10日に1回目の空中写真測量を実施。7月14日から仮設農道と水路以外の部分について切り替えしの表土除去を実施。8月27日に2回目の空中写真測量を実施。8月29日から北側の仮設農道と水路部分の表土除去。9月23日に3回目の空中写真測量を実施。9月29日から南側の仮設農道と水路部分の表土除去。10月16日に4回目の空中写真測量を実施。10月20日に一部遺構の埋戻しを行って、10月21日に発掘機材撤収、南加賀土木に現場を引き渡し現地調査を終了した。

平成27年度　4月25日に南加賀土木、文化財課、埋文センターの三者による現地協議を行った。現地調査は5月12日に重機による表土除去に着手。5月14日より作業員投入。三方が昨年度調査済み区に接し遺構の状況がうかがわれたものであるが、別遺構と予想したSD701とSD702が南東部で直

角に折れ接続したことには驚かされた。また、検出した各溝はいずれも深く掘削に時間を要した。6月2日に空中写真測量実施。6月4日に発掘機材撤収。6月10日に南加賀土木に現場を引き渡し現地調査を終了した。

年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
調査主体	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（理事長　木下公司）		
総括	橋本定則（専務理事）	小﨑隆司（専務理事）	柴田政秋（専務理事）
事務	栗山正文（事務局長） 山口　登（総務GL）	栗山正文（事務局長） 山口　登（総務GL）	釜親利雄（事務局長） 長嶋　誠（総務GL）
調査	福島正実（所長） 藤田邦雄（調査部長） 松山和彦（県関係調査GL）	福島正実（所長） 藤田邦雄（調査部長） 松山和彦（県関係調査GL）	福島正実（所長） 藤田邦雄（調査部長） 松山和彦（県関係調査GL）
担当	・加茂キツネ塚遺跡（第1次） 端　猛（特定事業調査G主幹） 荒川真希子（特定事業調査G嘱託調査員） ・加茂新高遺跡 澤辺利明（県関係調査G主幹） 清水晃大郎（県関係調査G嘱託調査員）	・加茂キツネ塚遺跡（第2次） 澤辺利明（県関係調査G主幹） 萩山教俊（国関係調査G嘱託調査員） ・加茂ボケ生水ウラ遺跡（第1次） 立原秀明（県関係調査G主幹） 武部修一（県関係調査G専門員）	・加茂ボケ生水ウラ遺跡（第2次） 澤辺利明（県関係調査G主幹） 瀧野勝利（県関係調査G専門員）

第1表　調査体制

第3節　整理等作業の経過

道路建設課から依頼を受けた県教委の委託事業として、平成26年度に加茂キツネ塚遺跡(第1・2次)、加茂新高遺跡、加茂ボケ生水ウラ遺跡(第1次)の出土品整理。平成27年度に加茂ボケ生水ウラ遺跡(第2次)の出土品整理及び3遺跡の報告書の作成・刊行を実施した。出土品整理の内容は、記名・分類・接合、復元、実測・トレース、遺構実測図トレースなどである。なお、遺物の洗浄は平成25年度に加茂キツネ塚遺跡(第1次)、加茂新高遺跡。平成26年度に加茂キツネ塚遺跡(第2次)、加茂ボケ生水ウラ遺跡(第1次)。平成27年度に加茂ボケ生水ウラ遺跡(第2次)を実施した。

年度	平成26年度	平成27年度
調査主体	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（理事長　木下公司）	
総括	小﨑隆司（専務理事）	柴田政秋（専務理事）
事務	栗山正文（事務局長） 山口　登（総務GL）	釜親利雄（事務局長） 長嶋　誠（総務GL）
調査	福島正実（所長） 藤田邦雄（調査部長） 松山和彦（県関係調査GL）	福島正実（所長） 藤田邦雄（調査部長） 松山和彦（県関係調査GL）
担当	県関係調査G	県関係調査G

第2表　整理等体制

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

加茂キツネ塚遺跡、加茂新高遺跡、加茂ボケ生水ウラ遺跡はいずれも石川県加賀市加茂町地内に所在する。

加賀市は石川県の南西端に位置しており、北側は日本海に面し、東は小松市、西は福井県あわら市、坂井市、勝山市と接している。平成17年旧加賀市と旧山中町が合併し、市域は面積306.0km²、周囲98.5kmを有する。人口は平成28年2月1日現在69,288人であり、平成2年の80,720人(合併前の両市町の合計)をピークに減少傾向にある。交通はJR北陸本線と国道8号が市域の平野部を東西方向に並走し、海岸沿線を走る北陸自動車道は南側で内陸に入り、福井県境を越えた付近でJR北陸本線と国道8号に交差する。伝統産業として、加賀市が発祥地とされる九谷焼は独特の絵付様式が全国的に知られ、山中漆器は高い木地挽物技術が現代に継承されている。また、山中温泉、山代温泉、片山津温泉の北陸を代表する3つの温泉街は小松市の粟津温泉とともに加賀温泉郷として広く知られる。

第2図　所収遺跡の位置

市域の地形は、東西帯状に広がる江沼平野を中心に北側は海岸線に沿って江沼砂丘、橋立丘陵、橋立台地、小松砂丘、柴山台地、東側は小松市より続く月津台地、南側は加賀山地、能美山地、江沼丘陵が分布し、江沼平野には小松市と福井県の境界に位置する大日山(標高1,368m)を源とする大聖寺川と動橋川が流れ込む。同平野は沿岸州により閉塞した潟湖に、砂と泥を主体とした河川運搬物が堆積して形成されており、両河川に挟まれた同平野の中央部では、江沼丘陵より河岸段丘が双頭状に張り出し、北側の橋立丘陵、橋立台地との間に、いくつかの微高地をもつ三角州を形成している。大聖寺川は市域北西部の福井県境で日本海へ、動橋川は北東部で柴山台地の南に位置する柴山潟に至る。

本書に所収した3遺跡の所在する加茂町は、山代温泉が位置する江沼丘陵より張り出す河岸段丘下の三角州中央部に位置する。町域東部には、双頭状の河岸段丘間から尾俣川が流れ込み、町域の大半を水田地と畑地が占め、穀倉地帯である江沼平野の典型を呈する。また、国道8号が町域を南北に二分し、集落は北側に所在する。加茂キツネ塚遺跡は集落の北側、加茂新高遺跡は同集落南縁部の国道8号北側、加茂ボケ生水ウラ遺跡は国道8号南側にそれぞれ位置する。加茂ボケ生水ウラ遺跡の隣接地には殿様生水と呼ばれる湧水があり、幕末における旧江沼郡の地誌『加賀江沼志稿』などの文献には、慶安元年(1648)頃より加賀藩主前田利常(微妙公)や大聖寺藩主が山代温泉に入湯の際、お茶の水にこの湧水を愛用したと記述される。また、近郷の人々や旅人には銭一貫文の価値がある名水、一貫生水の名で親しまれ、集落に所在する加茂神社の酒かけ岩は、生水に感謝の意を表したものと伝えられる。他にも湧水を示す字名が残る当地域では、古くから生活用水や農業用水として、良質で安定した水源に恵まれたことが窺い知れる。

現在の殿様生水

第2節　歴史的環境

加賀市ではこれまで850箇所もの遺跡が確認されており、県内屈指の遺跡数を誇る。市域で最古の遺跡は、橋立台地に位置する宮地向山遺跡であり、旧石器時代の石刀や掻器の出土が確認されている。縄文時代に入り、橋立丘陵、橋立台地、柴山台地の縁辺部、大聖寺川・動橋川両流域の河岸段丘、谷底低地に遺跡が分布するようになる。津波倉遺跡(36)は動橋川中流域左岸の河岸段丘上に位置する前期の遺跡であり、土器や石器が出土している。中期では、江沼平野の西部、橋立丘陵と大聖寺川右岸の間に位置する藤ノ木遺跡があり、多種多量に出土した土器は上山田式・古府式など、北陸特有の土器に加え、東海・近畿・関東系土器を含むことから、周辺地域では東西交流が盛んであったと考えられる。後期では、動橋川中流域左岸の扇状地に位置する横北遺跡(40)より注口土器や異形土製品の出土が確認されている。

弥生時代に入り、前期末の標識遺跡である柴山出村遺跡や、隣接する柴山水底遺跡において、柴山潟沿岸の湿地を利用した原始的な水稲栽培の開始が確認され、江沼平野における集落の展開がいよいよ顕著となる。中期では、動橋川中流域左岸の河岸段丘上に位置する二子塚東田遺跡(39)から竪穴住居が確認されており、後期では八日市川流域の自然堤防・後背湿地に展開する猫橋遺跡(49)、弓波遺跡(51)が知られる。標識遺跡である猫橋遺跡では、稲作が行われていたことを示す炭化米や多量の木製品の出土とともに、集落から方形周溝墓も確認されており、灌漑技術・土木技術発展に伴う組織形成の様相を呈する。

古墳時代に入り、稲作農耕の定着による階級社会が誕生し、江沼平野を見下ろす丘陵や台地の縁辺部に多くの古墳が築造されてゆく。古墳造営の集中区域は、河川の水利権の掌握と関係すると考えられ、大聖寺川左岸の低丘陵縁辺部(黒瀬・吸坂・南郷古墳群)、動橋川右岸の低丘陵縁辺部(分校・松山古墳群)、同左岸の段丘部(二子塚古墳群)、八日市川左岸の橋立丘陵(敷地・小菅波古墳群)と橋立台地の縁辺部(片山津・冨塚古墳群)などの地域に大別される。加賀市最古の古墳は、橋立台地南縁部に位置する前方後円墳の小菅波神社裏B1号墳(61)であり、同台地上に位置する該期の片山津玉造遺跡(54)は、管玉などの玉造り工房を内部に備えた竪穴住居からなる、専業的な工人の集落遺跡として広く知られる。中期に入り、吸坂A3号古墳(14)や吸坂イカリ山13号墳(17)など、全長約60mを超える大型の前方後円墳が相次いで築造されるようになる。また、全長55mを測る前方後円墳で、畿内王陵墓の形態を有し、江沼地方を統治した江沼臣の墓と推定される狐山古墳(38)、円墳からなる松山古墳群(42)も該期に築造される。後期に入り、狐山古墳に続く豪族の墳墓で、全長100m以上の前方後円墳と推定される富塚丸山古墳(55)が築造される一方、黒瀬御坊山C古墳群(22)、二子塚東田古墳群(37)に代表される、小規模の古墳からなる群集墳も多く築造される。

6世紀に朝鮮半島より伝来した仏教が江沼地方においても浸透し、有力豪族たちは古墳に代わり氏寺を建立するようになったと考えられる。江沼平野周辺では、白鳳時代に津波倉廃寺(32)、弓波廃寺(52)、保賀廃寺、宮地廃寺、平安時代末葉に高尾廃寺が建立されており、一地方での建立数としてはかなり多いことから、支配階級層の間で仏教が強く浸透していたと推定される。古代寺院に関係する遺跡として、動橋川中流域左岸の低丘陵上に位置する黒瀬瓦窯跡(20)から保賀廃寺と同様の瓦が出土しており、供給関係にあることが判明している。江沼地方は大宝律令の制定(701年)により「越前国江沼郡」となり、弘仁14年(823)に加賀国が越前国から独立する。これに伴い江沼郡の北半が能美郡として分立し、加賀江沼郡には、長江・八田・忌波・山背・竹原・額田・菅浪・三枝の八郷、あ

るいは郡家郷を加えた九郷が置かれ、古代より首長であった江沼臣氏は、律令体制の中で郡司として地方行政官に位置付けられる。当該遺跡の東方に至近する西島A遺跡(30)では、5棟の南北軸をもつ掘立柱建物が確認され、墨書土器の出土も伴うことから、官衙遺跡もしくは有力豪族の居宅であると推定される。また、動橋川右岸の平野に位置する松山C遺跡(47)においても、用水路や板塀を検出し、江沼を表すと考えられる「ヨネ」と読むことが可能な「米」墨書土器が多量に出土しており、江沼郡関係の官衙遺跡か江沼臣氏の居宅であると推定される。尚、当該地が属する郷については、あくまでも推測の域を出ないが、地理的な条件や遺跡の分布状況から、庄町・西島町・二子塚町付近を郡家郷と推定し、南郷町・黒瀬町・保賀町付近に一郷の存在を認め、八郷のなかでも位置が不明である三枝郷として推定した場合、これら二郷と現在の山代温泉にあたる山背郷との中間地域、あるいは、いずれかの縁辺部に位置を求めることになろうか。

これまでの律令体制下の支配単位であった群―郷に代わり、特定の貴族や寺社による私領化に伴い、住民と土地をまとめ、一定の領域として管理する中世的な郷や庄が江沼郡にも現れ始める。当該地は位置関係から、山代温泉と南郷町・弓波町を結ぶ江沼平野の西半部一帯から橋立丘陵までを庄域とする山代庄に属していたと推定される。山代庄は12世紀末、持明院(藤原)基家の加賀国知行を契機に、江沼平野の最も主要な部分を占める諸郷を束ねて立庄され、中世前期に、園(藤原)家が庄務を伝領した。また、14世紀の内乱を迎え、その半ばが半済手段により守護領化され、守護富樫氏や奉行衆の知行を経て、一部は幕府料所となる。14世紀末から15世紀前半に、そのうちの山代本郷半済方は北野宮寺領、忌浪郷領家方は雲門庵領となり、本領主である園家と、守護富樫氏、幕府料所を預かる奉公衆、それに、北野天満宮・雲門庵などによって細分化され、複雑な分割領有の状態をとって、一向一揆の段階を迎えることとなる。江沼郡一揆の有力者の遺跡として、『江沼郡誌』には黒瀬覚道邸跡(25)、『加賀江沼志稿』には南郷の古城跡を、黒部掃部の居城〔黒瀬掃部邸遺跡(24)〕とする記述がみられる。

近世には、天正8年(1580)に織田勢による加賀国の一揆は平定され、慶長5年(1600)に江沼郡は前田氏の支配下に置かれた。寛永16年(1639)には前田家の支藩として大聖寺藩が成立し、以後230年を経て明治4年(1871)の廃藩置県まで大聖寺藩は継続する。

参考文献

石川考古学研究会　1978 「江沼古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第21号　石川考古学研究会

本田秀生　2002『猫橋遺跡』 石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

字名調査委員会　2004『加賀江沼の字名』 江沼地方史研究会

中村準一ほか　1996『保賀Ｃ遺跡』 加賀市教育委員会

加賀市教育委員会事務局文化課　2011『加賀市歴史文化基本構想』 加賀市

加賀市史編纂委員会　1978『加賀市史　通史　上巻』 加賀市市役所

加賀市文化財総合活用事業実行・加賀ふるさと検定・おもてなし講座実行委員会　2014『加賀市歴史文化学習帳Ⅰ 歴史編』 加賀市文化財総合活用事業実行委員会・おもてなし講座実行委員会

西　英晃　2002『保賀遺跡』 加賀市教育委員会

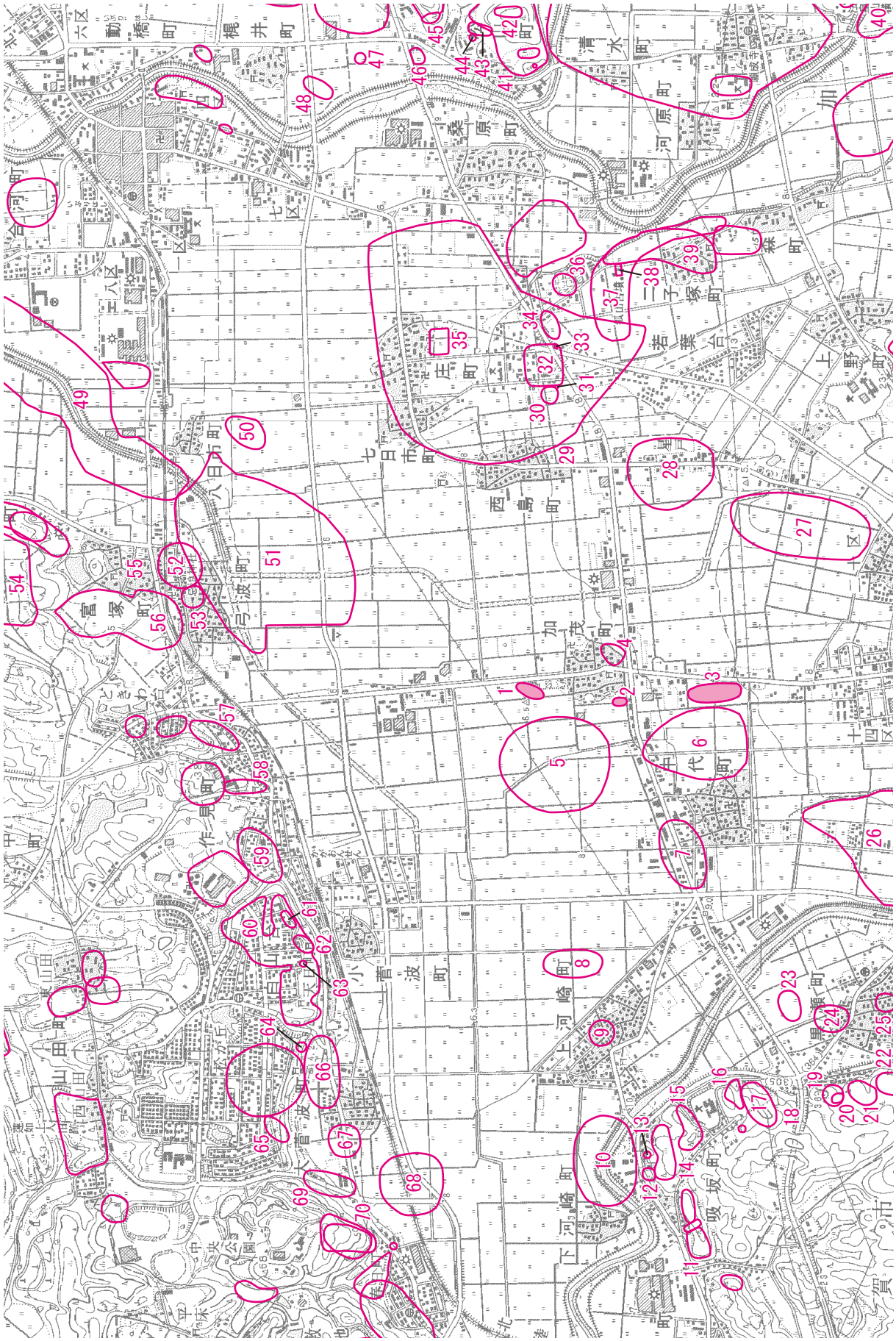
加賀市史編纂委員会　1978『加賀市の歴史』 加賀市

中西洋司ほか　2001『松山Ｃ遺跡』 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

谷内明央ほか　2013『松山Ｄ遺跡』 石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター

田嶋正和　1997「第2章第6節　遺構からみた加賀国」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』 北陸中世土器研究会

田嶋明人・湯尻修平　1974『加賀市二子塚遺跡群調査概報』石川県教育委員会



第３図　周辺の遺跡（S=1/25,000）

番号	県番号	遺跡名	種別	時代	備考
1	642700	加茂キツネ塚遺跡	集落	弥生、中世	
2	642500	加茂新高遺跡	集落	古代	
3	642600	加茂ボケ生水ウラ遺跡	集落	弥生、中世	
4	-	加茂フルドウ遺跡	集落	古代、中世	
5	607100	加茂かがり場遺跡	散布地	古墳、その他(不詳)	石器、須恵器、土師器、砥石、銅環、石鏃、サイドスクレーパー出土。
6	607200	中代Ｂ遺跡	散布地	縄文、古代	縄文土器、須恵器、土師器出土。
7	607300	中代Ａ遺跡	散布地	古代	須恵器、土師器出土。
8	641400	上河崎遺跡	散布地	弥生	
9	610100	川崎専稱寺跡	社寺	その他(不詳)	
10	610000	下河崎遺跡	散布地	古代	須恵器、土師器出土。
11	610401	南郷Ｂ1号墳	古墳	古墳	円墳(径11ｍ)。
	610402	南郷Ｂ2号墳	古墳	古墳	円墳(径10ｍ)。
	610403	南郷Ｂ3号墳	古墳	古墳	円墳(径21ｍ)。
	610404	南郷Ｂ4号墳	古墳	古墳	方墳(辺9ｍ)。
	610405	南郷Ｂ5号墳	古墳	古墳	方墳(辺11ｍ)。
	610406	南郷Ｂ6号墳	古墳	古墳	方墳(辺10ｍ)。
	610407	南郷Ｂ7号墳	古墳	古墳	円墳(径15ｍ)。
	610408	南郷Ｂ8号墳	古墳	古墳	前方後円墳。
	610409	南郷Ｂ9号墳	古墳	古墳	方墳(辺10ｍ)。
	610410	南郷Ｂ10号墳	古墳	古墳	方墳(辺11ｍ)。
	610411	南郷Ｂ11号墳	古墳	古墳	方墳。
	610412	南郷Ｂ12号墳	古墳	古墳	方墳。
12	609901	吸坂Ｂ1号墳	古墳	古墳	円墳(径10ｍ)。
	609902	吸坂Ｂ2号墳	古墳	古墳	円墳(径9ｍ)。
	609903	吸坂Ｂ3号墳	古墳	古墳	円墳(径13ｍ)。
	609904	吸坂Ｂ4号墳	古墳	古墳	円墳(径13ｍ)。
	609905	吸坂Ｂ5号墳	古墳	古墳	円墳(径11ｍ)。
13	609800	片山古墳	古墳	古墳	須恵器出土。円墳、詳細位置不詳。
14	609701	吸坂Ａ1号墳	古墳	古墳	円墳(径11ｍ)。
	609702	吸坂Ａ2号墳	古墳	古墳	円墳(径22.5ｍ)。
	609703	吸坂Ａ3号墳	古墳	古墳	前方後円墳(全長61ｍ)。
15	609601	吸坂神明神社1号墳	古墳	古墳	円墳(径21ｍ)。
	609602	吸坂神明神社2号墳	古墳	古墳	円墳(径11ｍ)。
16	609501	吸坂丸山1号墳	古墳	古墳	土師器出土。方墳(辺12ｍ)。
	609502	吸坂丸山2号墳	古墳	古墳	鉄斧、鎗鉋、鉄鏃、鶏形土製品、土師器出土。方墳(辺15ｍ)。割竹形木棺。
	609503	吸坂丸山3号墳	古墳	古墳	鉄剣、鉄鏃、土師器出土。円墳(径15.4ｍ)。箱形木棺。
	609504	吸坂丸山4号墳	古墳	古墳	円墳(径21.4ｍ)。
	609505	吸坂丸山5号墳	古墳	古墳	金環、直刀、刀子、鈴具、鉄鏃、衝角付冑、鉄製矛、須恵器、円筒埴輪、形象埴輪出土。円墳(径15ｍ)。丸木舟形木棺。
	609506	吸坂丸山6号墳	古墳	古墳	須恵器、釘状鉄製品(周溝より)出土。円墳(径11.6ｍ)。
	609507	吸坂丸山8号墳	古墳	古墳	
	609508	吸坂丸山9号墳	古墳	古墳	円墳(径15.5ｍ)。
	609509	吸坂丸山10号墳	古墳	古墳	素環頭太刀、土師器出土。方墳(11.4×6ｍ以上)。

番号	県番号	遺跡名	種別	時代	備考
17	609301	吸坂イカリ山1号墳	古墳	古墳	円墳(径12ｍ)。
	609302	吸坂イカリ山2号墳	古墳	古墳	方墳(辺11ｍ)。
	609303	吸坂イカリ山3号墳	古墳	古墳	方墳(辺15ｍ)。
	609304	吸坂イカリ山4号墳	古墳	古墳	円墳(径11ｍ)。一部損壊。
	609305	吸坂イカリ山5号墳	古墳	古墳	円墳か(径12.5ｍ)。
	609306	吸坂イカリ山6号墳	古墳	古墳	長方墳(長辺16.5ｍ、短辺11ｍ)。
	609307	吸坂イカリ山7号墳	古墳	古墳	方墳(辺15.6ｍ)。墳頂部の大半が山道により削平。
	609308	吸坂イカリ山8号墳	古墳	古墳	方墳(辺13ｍ)。墳頂部は大幅に削平。東辺のみ原形を保つ。
	609309	吸坂イカリ山13号墳	古墳	古墳	前方後円墳(全長67ｍ)。
18	609200	吸坂Ｅ1号墳	古墳	古墳	円墳(径12ｍ)。
19	609000	黒瀬御坊山Ａ古墳群	古墳	古墳	須恵器、土師器出土。円墳2基。
20	609101	黒瀬1号瓦窯跡	生産遺跡[窯跡]	古代	軒丸瓦、丸瓦、平瓦出土。
	609102	黒瀬2号瓦窯跡	生産遺跡[窯跡]	古代	丸瓦、平瓦、須恵器出土。
	609103	黒瀬3号瓦窯跡	生産遺跡[窯跡]	古代	丸瓦、平瓦、塼出土。
21	608900	黒瀬御坊山Ｂ古墳群	古墳	古墳	円墳6基よりなる。うち1基は自然地形か。
22	608801	黒瀬御坊山Ｃ1号墳	古墳	古墳	須恵器、土師器出土。円墳(径8ｍ、高1ｍ)。
	608802	黒瀬御坊山Ｃ2号墳	古墳	古墳	直刀、鉄鏃、刀子、枕石出土。円墳(径9.5ｍ、高1ｍ)。
	608803	黒瀬御坊山Ｃ3号墳	古墳	古墳	円墳(径13.5ｍ、高2ｍ)。
	608804	黒瀬御坊山Ｃ4号墳	古墳	古墳	円墳(径11ｍ、高1.5ｍ)。
	608805	黒瀬御坊山Ｃ5号墳	古墳	古墳	円墳(径10ｍ、高1.5ｍ)。
	608706	黒瀬御坊山Ｃ6号墳	古墳	古墳	円墳(径10ｍ、高1.5ｍ)。
	608807	黒瀬御坊山Ｃ7号墳	古墳	古墳	円墳(径8.5ｍ、高1ｍ)。
	608708	黒瀬御坊山Ｃ8号墳	古墳	古墳	円墳(径7.5ｍ、高1ｍ)。
	608809	黒瀬御坊山Ｃ9号墳	古墳	古墳	前方後円墳(全長18.5ｍ)。
	608710	黒瀬御坊山Ｃ10号墳	古墳	古墳	円墳(径8ｍ以上、高1.5ｍ)。
	608811	黒瀬御坊山Ｃ11号墳	古墳	古墳	円墳(径12ｍ、高2ｍ)。
	608712	黒瀬御坊山Ｃ12号墳	古墳	古墳	円墳(径8.7ｍ、高1ｍ)。自然地形の可能性あり。
	608813	黒瀬御坊山Ｃ13号墳	古墳	古墳	円墳(径15ｍ、高2ｍ)。自然地形の可能性あり。
	608714	黒瀬御坊山Ｃ14号墳	古墳	古墳	円墳(径12.5ｍ、高3.5ｍ)。
	608815	黒瀬御坊山Ｃ15号墳	古墳	古墳	円墳(径12.5ｍ、高3.5ｍ)。
23	608700	黒瀬遺跡	散布地	その他(不詳)	土師器出土。
24	608600	黒瀬掃部邸跡	城館[屋敷跡]	中世	
25	608500	黒瀬覚道館跡	城館[館跡]	中世	
26	607400	保賀Ｃ遺跡	集落	古代	須恵器、土師器出土。
27	606900	山代新遺跡	散布地	古代	須恵器、土師器出土。
28	607000	上野遺跡	散布地	古代、中世	須恵器、土師器、中世陶器出土。
29	621200	庄・西島遺跡	散布地	古代	須恵器、土師器出土。
30	623500	西島Ａ遺跡	集落	古代	須恵器、瓦出土。
31	623400	西島Ｂ遺跡	散布地	古代	和同開珎、土師器出土。
32	623700	津波倉廃寺	社寺	古代	須恵器、土師器、軒丸瓦、丸瓦、平瓦出土。奈良時代。
33	623600	西島Ｃ遺跡	散布地	古代	須恵器、鉱滓、羽口出土。
34	623800	桑原遺跡	散布地	古墳	土師器出土。
35	628700	手塚屋敷跡	城館[屋敷跡]	その他(不詳)	勧帰寺裏通称「シンペイ」に五輪塔、宝篋印塔あり。

第3表　周辺の遺跡一覧1

番号	県番号	遺跡名	種別	時代	備考
36	623900	津波倉遺跡	集落	縄文	縄文土器、石斧、石鏃、石錘出土。
37	623301	二子塚1号墳	古墳	古墳	円筒埴輪出土。円墳（径15ｍ）。封土消滅。
	623302	二子塚2号墳	古墳	古墳	円筒埴輪出土。墳形不明。
	623303	二子塚3号墳	古墳	古墳	円筒埴輪出土。墳形不明。
	623304	二子塚4号墳	古墳	古墳	円筒埴輪出土。墳形不明。
	623305	二子塚5号墳	古墳	古墳	円筒埴輪出土。前方後円墳。
	623306	二子塚6号墳	古墳	古墳	円筒埴輪、形象埴輪（人物）出土。墳形不明。
	623307	二子塚東田1号墳	古墳	古墳［後期］	円筒、朝顔形埴輪、土師器、須恵器出土。前方後円墳（全長22ｍ）。旧10号墳。
	623308	二子塚東田2号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧11号墳。
	623309	二子塚東田3号墳	古墳	古墳［後期］	土師器出土。円墳。旧12号墳。
	623310	二子塚東田4号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧13号墳。
	623311	二子塚東田5号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧14号墳。
	623312	二子塚東田6号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧15号墳。
	623313	二子塚東田7号墳	古墳	古墳［後期］	土師器出土。円墳。旧16号墳。
	623314	二子塚東田8号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧17号墳。
	623315	二子塚東田9号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧18号墳。
	623316	二子塚東田10号墳	古墳	古墳［後期］	須恵器出土。円墳。旧19号墳。
	623317	二子塚東田11号墳	古墳	古墳［後期］	土師器、須恵器出土。円墳。旧20号墳。
	623318	二子塚東田12号墳	古墳	古墳［後期］	土師器出土。円墳。旧21号墳。
	623319	二子塚東田13号墳	古墳	古墳［後期］	土師器、須恵器出土。円墳。旧22号墳。
	623320	二子塚東田14号墳	古墳	古墳［後期］	須恵器出土。円墳。旧23号墳。
	623321	二子塚東田15号墳	古墳	古墳［後期］	須恵器出土。円墳。旧24号墳。
	623322	二子塚東田16号墳	古墳	古墳［後期］	須恵器出土。円墳。旧25号墳。
	623323	二子塚東田17号墳	古墳	古墳［後期］	土師器、須恵器出土。円墳。旧26号墳。
	623324	二子塚東田18号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧27号墳。
	623325	二子塚東田19号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧28号墳。
	623326	二子塚東田20号墳	古墳	古墳［後期］	須恵器出土。円墳。旧29号墳。
	623327	二子塚東田21号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧30号墳。
	623328	二子塚東田22号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧31号墳。
	623329	二子塚東田23号墳	古墳	古墳［後期］	土師器出土。円墳。旧32号墳。
	623330	二子塚東田24号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧33号墳。
	623331	二子塚東田25号墳	古墳	古墳［後期］	土師器出土。円墳。旧34号墳。
	623332	二子塚東田26号墳	古墳	古墳［後期］	円墳。旧35号墳。
	623333	二子塚東田27号墳	古墳	古墳［後期］	須恵器出土。円墳。旧36号墳。
	623334	二子塚森1号墳	古墳	古墳	須恵器出土。円墳。
38	623200	狐山古墳	古墳	古墳	神獣鏡、衝角付冑、小玉、短甲、刀、剣、鉾、刀子、鏃、銀製帯金具出土。国指定史跡。前方後円墳（全長55ｍ）、組合式箱式石棺。
39	623100	二子塚東田遺跡	集落	弥生、古墳、古代	弥生土器、土師器、管玉、同原石、ガラス玉、鉄器、須恵器出土。
40	622600	横北遺跡	散布地	縄文［後期］	土器、石斧、石棒、凹石、石鏃、石錘出土。
41	626300	松山城跡	城館［城跡］	中世	南北朝時代。
42	626201	松山1号墳	古墳	古墳	円墳（径10ｍ、高4ｍ）。
	626202	松山2号墳	古墳	古墳	円墳（径25ｍ、高4ｍ）。
	626203	松山3号墳	古墳	古墳	円墳。
	626204	松山4号墳	古墳	古墳	円墳。
	626205	松山5号墳	古墳	古墳	円墳。
43	626600	松山Ａ遺跡	散布地	古墳	土師器、碧玉片出土。
44	626700	松山焼窯跡	生産遺跡［窯跡］	近世	陶磁器出土。

番号	県番号	遺跡名	種別	時代	備考
45	626901	分校チャカ山西麓1号墳	古墳	古墳	円墳（径10ｍ、高2ｍ）。
	626902	分校チャカ山西麓2号墳	古墳	古墳	円墳（径7ｍ、高1.5ｍ）。
	626903	分校チャカ山西麓3号墳	古墳	古墳	円墳（径10ｍ、高2ｍ）。
46	640000	松山Ｄ遺跡	集落	古墳	
47	641600	松山Ｃ遺跡	集落	古墳、古代［平安］	
48	627500	梶井遺跡	散布地	古墳、古代	須恵器、土師器出土。
49	621000	猫橋遺跡	集落	縄文、弥生、古墳	縄文土器、弥生土器、木器、骨角器、石器、土錘、自然遺物、土師器、須恵器出土。
50	621100	八日市遺跡	散布地	古代	須恵器、土師器出土。
51	620900	弓波遺跡	散布地、集落	縄文、弥生、古墳古代、中世	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、石塔頂部、瓦塔、玉原石剥片出土。
52	620700	弓波廃寺	社寺	古代	軒丸瓦、丸瓦、平瓦、須恵器、土師器出土。塔心礎石は忌浪神社にあり。
53	620800	忌浪神社遺跡	散布地	古墳	土師器出土。
54	620000	片山津玉造遺跡	集落	縄文、古墳、古代	縄文土器、石器、土師器、管玉、同未成品、同原石、勾玉未成品、砥石、鉄器、須恵器出土。市指定史跡。
55	620500	富塚丸山古墳	古墳	古墳	剣、勾玉、鏡、甲、管玉、金環、埴輪出土。前方後円墳の可能性もあり。現状は円墳（径50ｍ、高8.5ｍ）。
56	620600	冨塚遺跡	散布地	古代	須恵器、土師器、鍬形石未成品出土。
57	619500	作見Ａ遺跡	散布地	古墳	土師器出土。
58	619300	作見Ｂ遺跡	散布地	古墳	須恵器出土。消滅か。
59	619200	作見陣跡	その他（陣跡）	中世	宅地造成で消滅か。
60	619000	小菅波遺跡	集落	弥生、古墳	土師器、碧玉原石出土。
61	618901	小菅波神社裏Ｂ1号墳	古墳	古墳	前方後方墳（全長17ｍ）。
	618902	小菅波神社裏Ｂ2号墳	古墳	古墳	円墳か。
	618903	小菅波神社裏Ｂ3号墳	古墳	古墳	円墳か。
62	618801	小菅波神社裏Ａ1号墳	古墳	古墳	方墳（辺22×25ｍ、高5～6ｍ）。墳頂部に盗掘孔。
	618802	小菅波神社裏Ａ2号墳	古墳	古墳	円墳か（径15ｍ、高2.5ｍ）、半壊。
63	618700	小菅波神社裏Ｃ1号墳	古墳	古墳	円墳（径22ｍ、高6ｍ）、周溝あり。
64	618500	小菅波Ｄ1号墳	古墳	古墳	円墳。
65	628800	大菅波古墳群	古墳	古墳	円墳5～10基よりなる。
66	618400	大菅波Ｃ遺跡	散布地	古代	須恵器、土師器出土。
67	618300	大菅波Ｂ遺跡	散布地	古墳	須恵器出土。
68	618100	大菅波Ｄ遺跡	散布地	弥生、古墳、古代	弥生土器、土師器、須恵器、木製品出土。
69	618200	大菅波Ａ遺跡	散布地	古代	須恵器、土師器出土。
70	617901	敷地平野山1号墳	古墳	古墳	土師器出土。円墳（径14.5ｍ）。放牧場造成時削平。
	617902	敷地平野山2号墳	古墳	古墳	土師器出土。方墳（辺16.5×10.5ｍ）。
	617903	敷地平野山3号墳	古墳	古墳	土師器出土。円墳（径20ｍ）。
	617904	敷地平野山4号墳	古墳	古墳	土師器出土。円墳（径18ｍ）。
	617905	敷地平野山5号墳	古墳	古墳	土師器出土。円墳（径13ｍ）。
	617906	敷地平野山6号墳	古墳	古墳	矛状鉄製品、土師器出土。方墳（辺12.5×11.5m）。
	617907	敷地平野山7号墳	古墳	古墳	土師器出土。円墳（径11ｍ）。
	617908	敷地平野山9号墳	古墳	古墳	方墳（辺13ｍ）。
	617909	敷地平野山10号墳	古墳	古墳	土師器出土。円墳（径20ｍ）。

第4表　周辺の遺跡一覧2

第3章　加茂キツネ塚遺跡

第1節　概　　要

1. 調査区の設定(第4図)

調査区域は加茂町集落北側約100～200ｍの水田域に位置する。

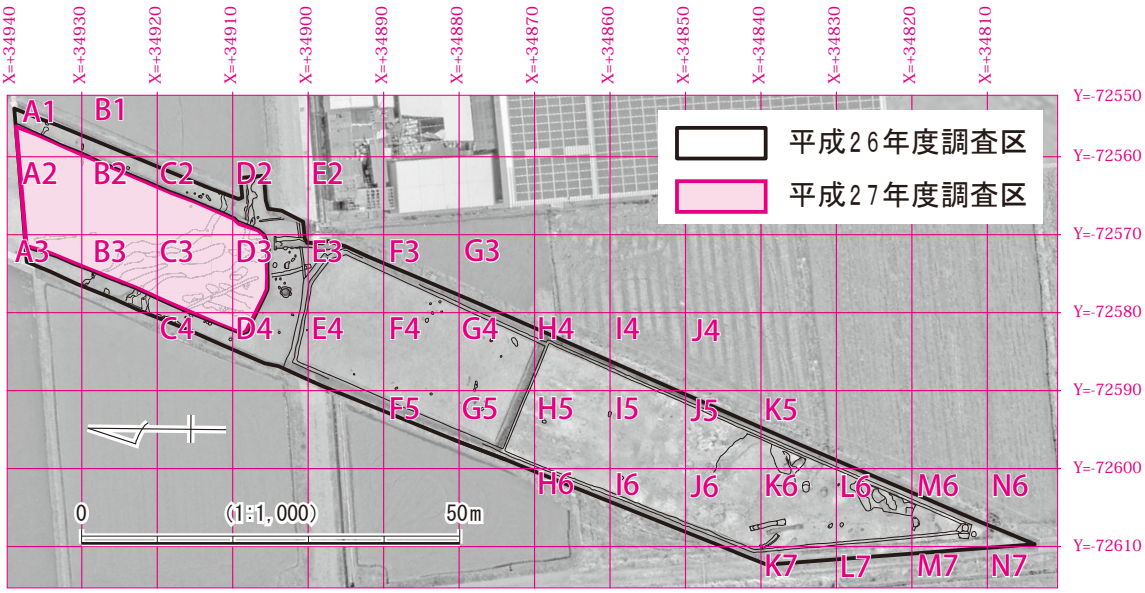
調査区全体には平面直角座標第Ⅶ系(世界測地系)に合わせた一辺10ｍの格子をかけ、北東隅のＸ＝＋34940とＹ＝－72550の交点を基点に、南北帯にはアルファベットを、東西帯にはアラビア数字を振り、これを組み合わせ細分区画名とした。また、調査は平成26・27年の2カ年にわたったが、平成26年度には調査区域の南西部約2／3および北東部約1／3区域のうち外周(水路敷設箇所)の調査を、平成27年度には残る北東部1／3区域の内部(車道箇所)の調査を行った。

2. 基　本　層　序(第5・6図)

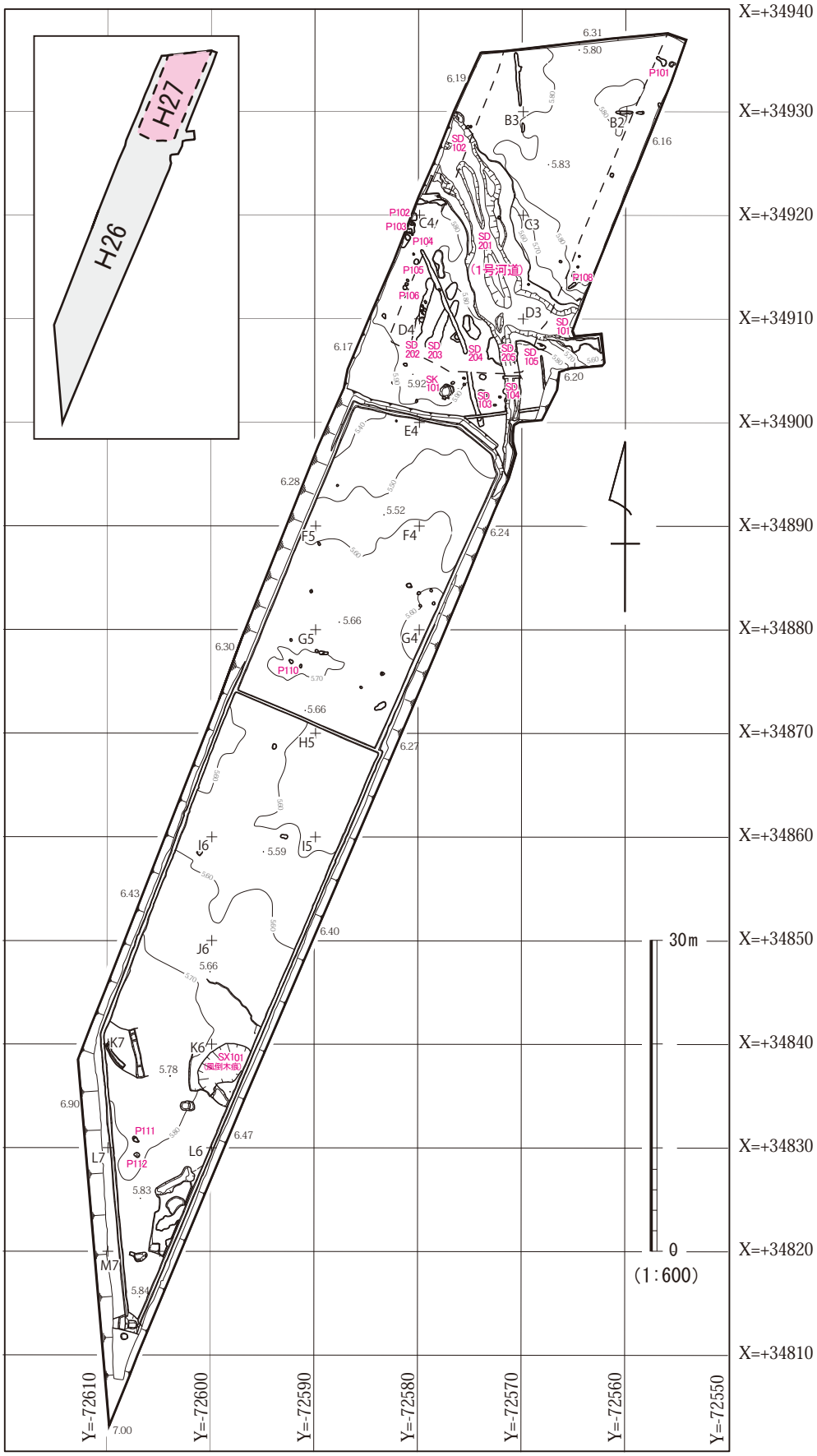
調査地周辺の現況地形は南東から北西に緩く下り、地表標高は約7.0～6.2ｍを測る。遺構検出面では南および北側が標高約5.8ｍと高みをなし、中央部のE4区あたりに向け緩く下り標高約5.4ｍを測る。調査地の堆積土壌を調査区外周壁で採図した断面A～D(第6図)でみると、1層(耕作土)の下に約20㎝厚で2層(暗灰～暗褐色粘土)が、その下に約20㎝厚で3層(暗褐～黒褐色粘質土)が、その下に4層が約20㎝厚で堆積する。地山土は青～黄褐色粘質土であり、中からの湧水が激しい。遺物は3層に少量含まれる。

3. 遺 構 ・ 遺 物(第5図)

遺構は主に調査区北部に分布しており、土坑1基、自然河道1条、溝5条、風倒木痕1基、小穴などがある。遺構名は遺構略号に続き平成26年度は1○○と、平成27年度は2○○と振った。そのうち、幅2ｍの水路敷設箇所で検出されたSD101・102はSD201を介し連結したことから、報告に際して1号河道と呼称した。また、SD104はSD205北側で1号河道に接続する溝となり、これはSD104・205と呼称して報告する。SD103・SD204も一連の溝である。LⅡ型パンケースにして3箱の出土遺物は1号河

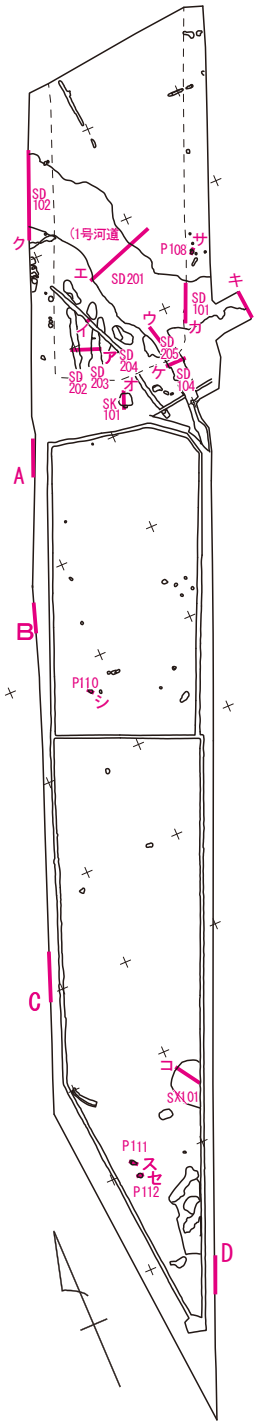


第4図　調査区・グリッド配置図

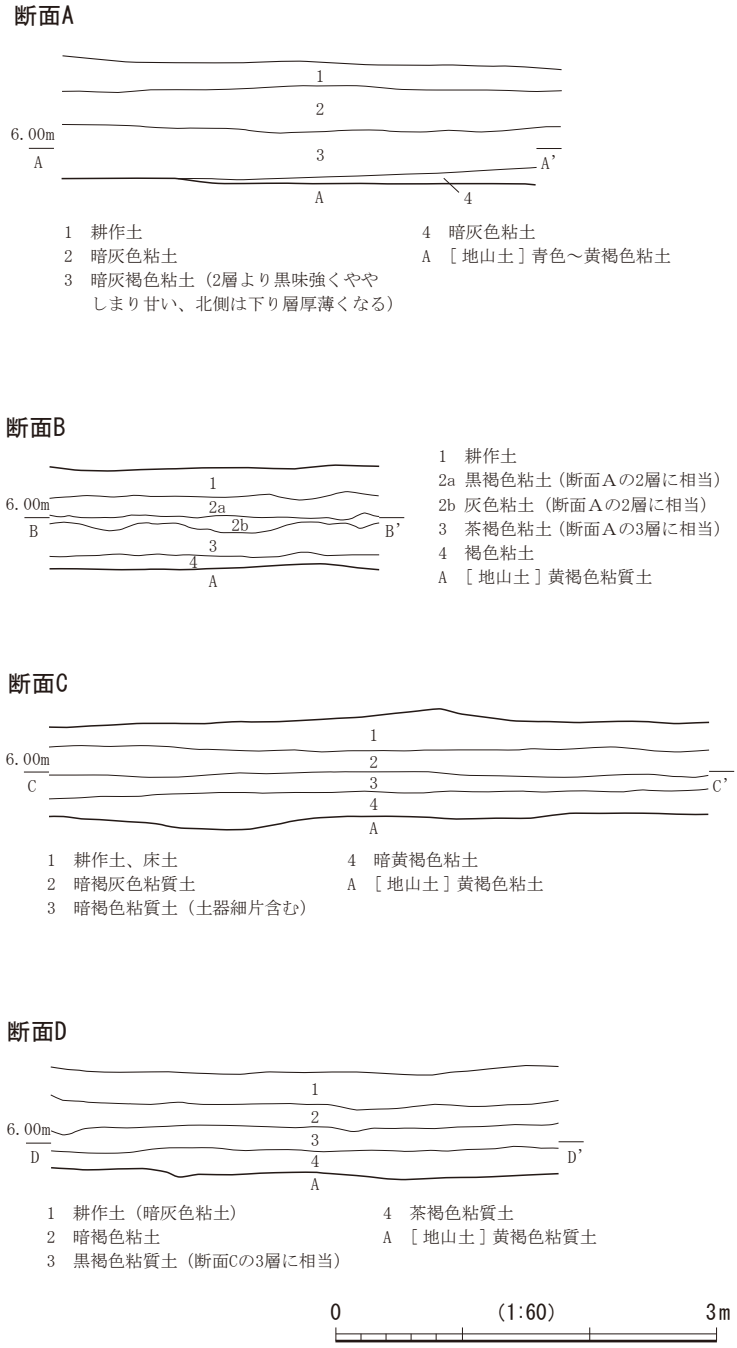


第５図　加茂キツネ塚遺跡調査区全体図

【断面採図箇所案内図】



【調査区壁土層断面図】

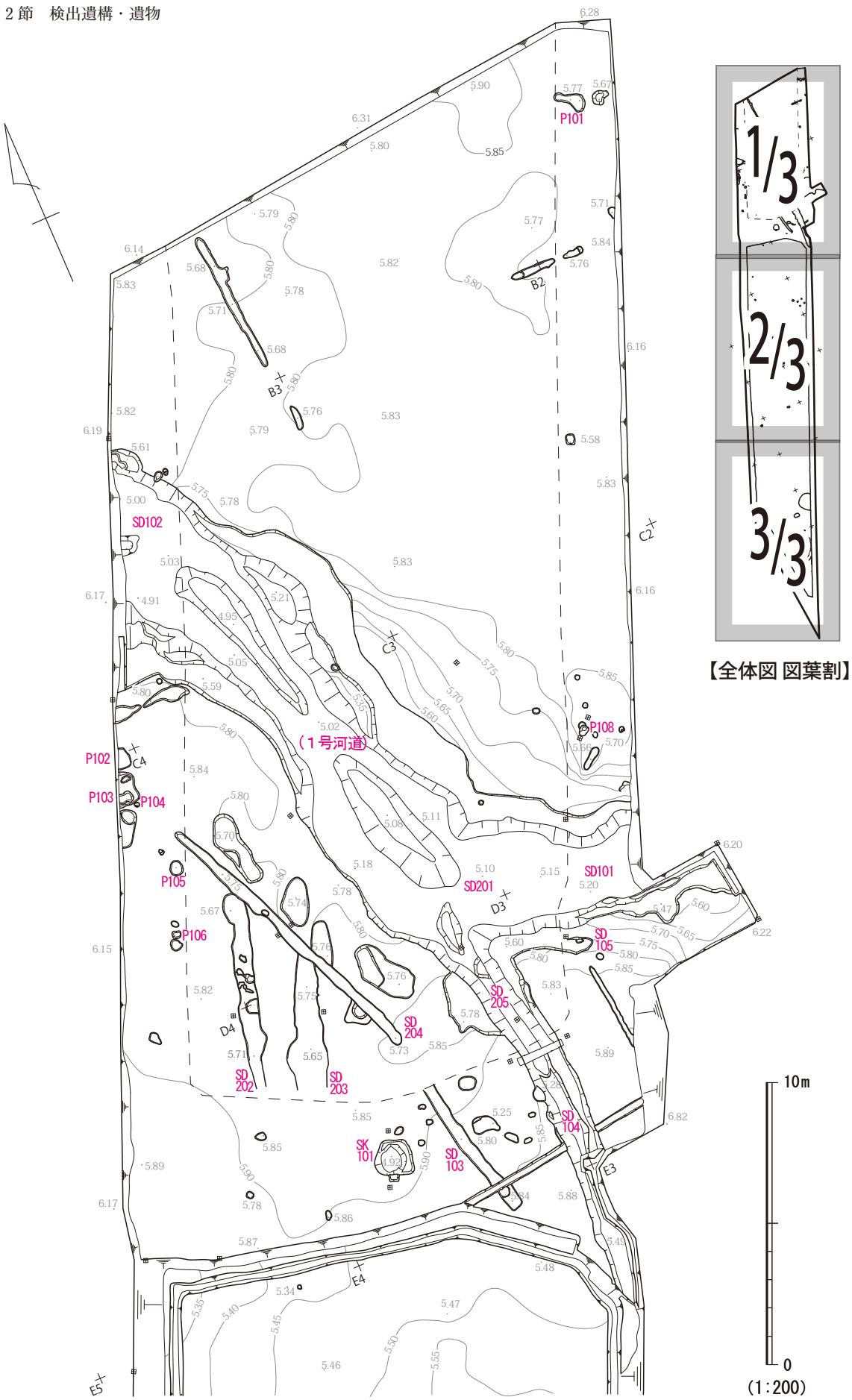


第６図　調査区壁断面図、土層断面採図箇所案内図

道出土が大方で、弥生時代後期後葉の土器を主とし、ほかに石器、加工木がある。他の遺構からは須恵器、土師器、珠洲焼が計十数点出土している。

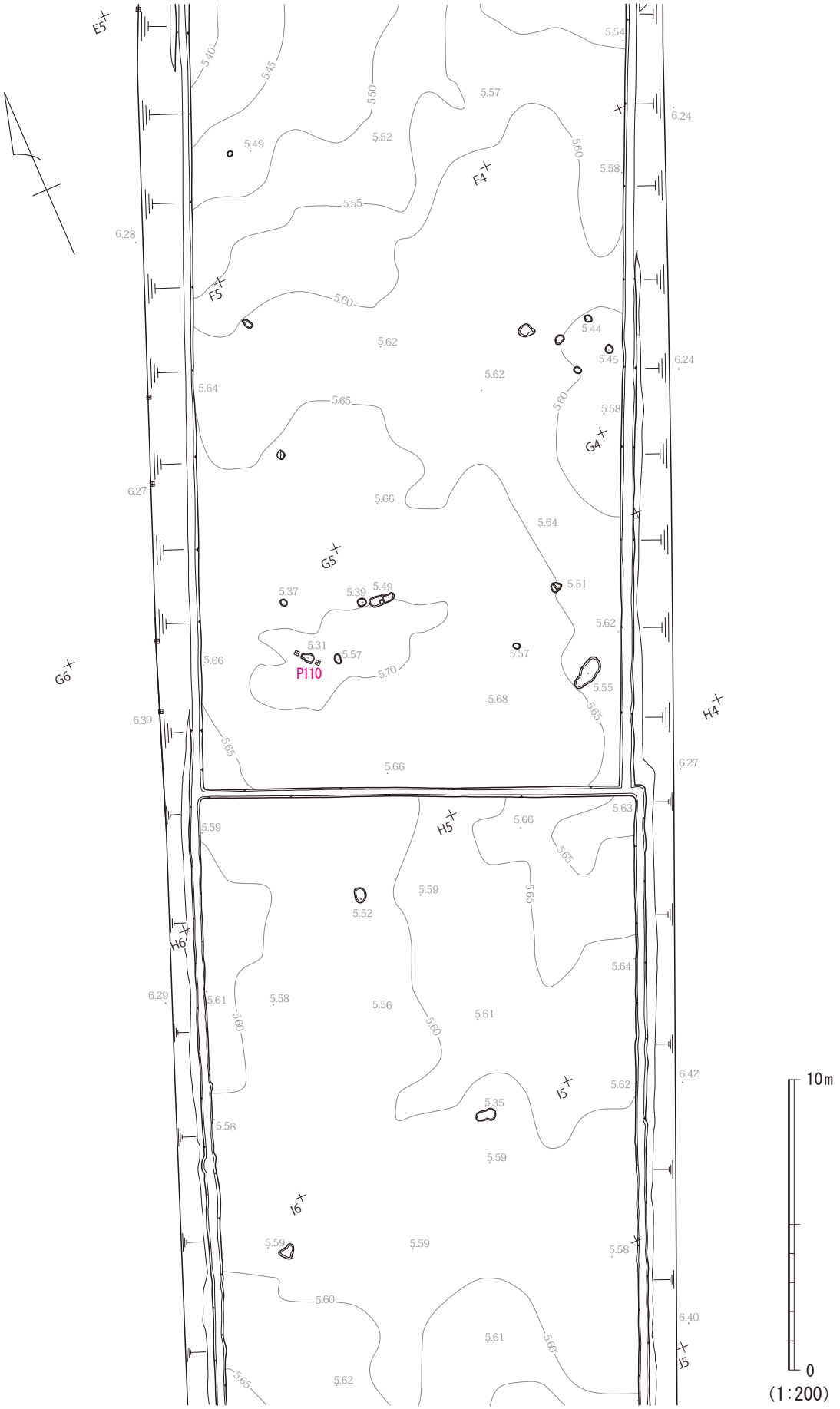
第２節　検出遺構･遺物

SK101（第５・７・10図）　調査区北部、D3区に位置する。長辺1.3ｍ、短辺1.2ｍ、深さ95㎝、平面不整隅丸方形、断面逆台形を呈する土坑。覆土は濁暗青灰色粘土である。内部からは弥生土器とみられる細片１点が出土している。形状からみて貯蔵穴の可能性がある。

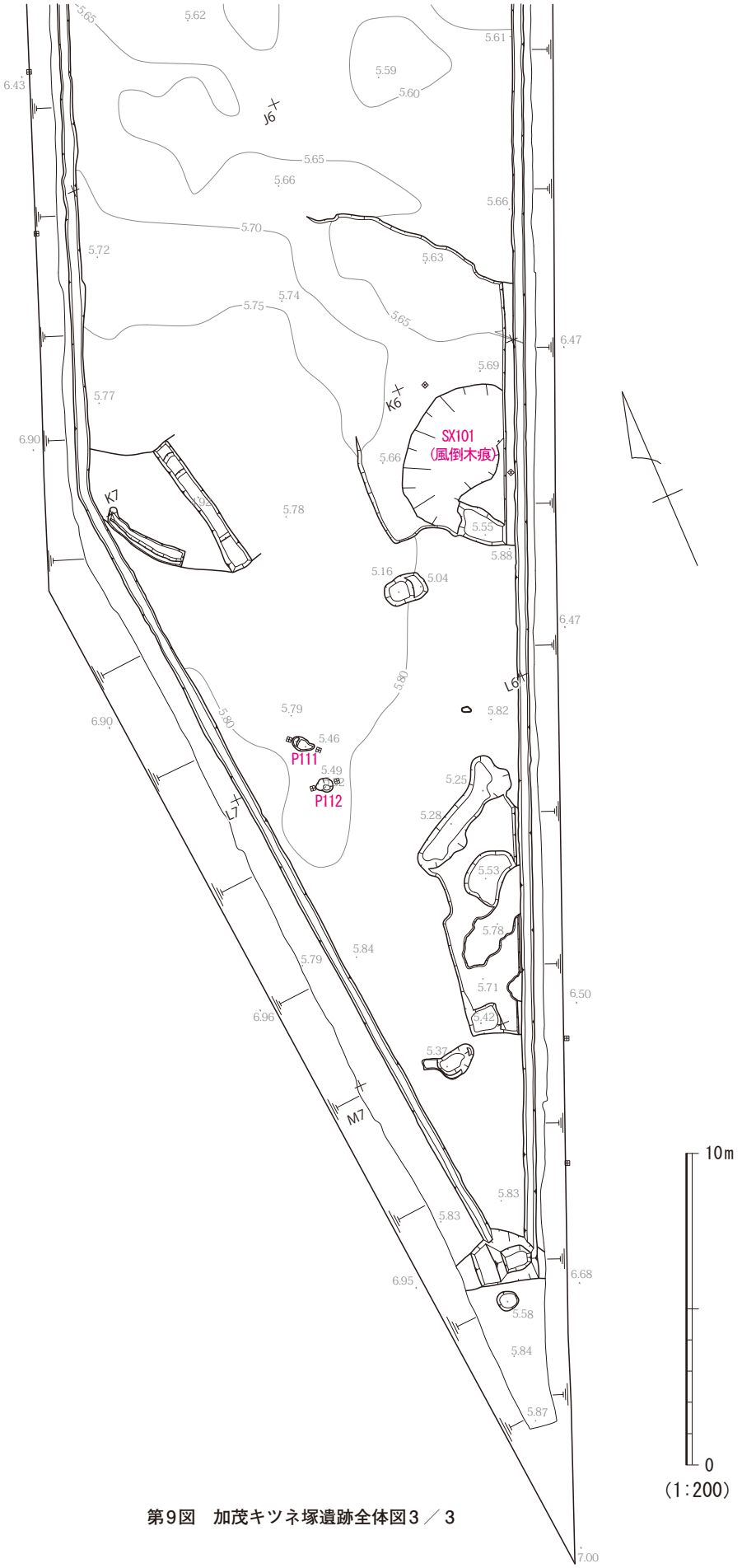


【全体図 図葉割】

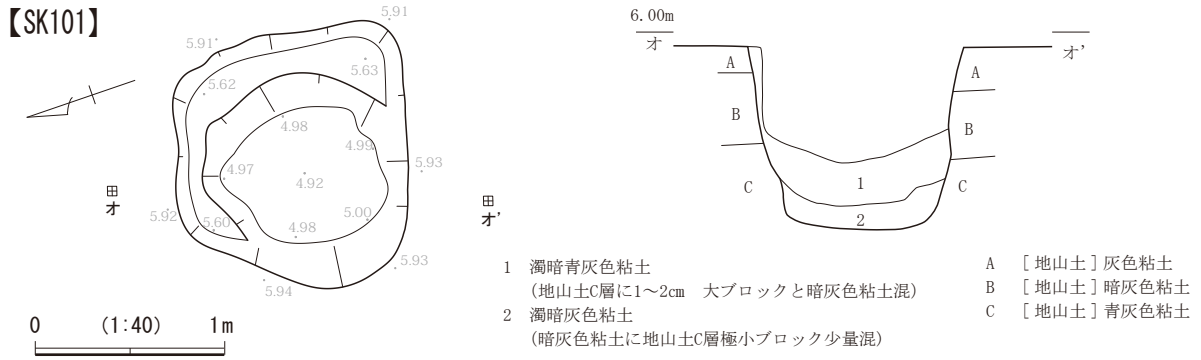
第７図　加茂キツネ塚遺跡全体図１／３



第８図　加茂キツネ塚遺跡全体図２／３



第９図　加茂キツネ塚遺跡全体図３／３



第10図　SK101遺構図

1号河道(第5・7・11・12・16～19図)　調査区北部に位置し現地調査時にSD101・102・201とした自然河道であり、報告に際し1号河道と呼称した。東側で西進するSD101から、SD201にSD205が接続する箇所で北に屈曲、北側のSD102に向け蛇行気味に下る。上面全幅で5～6m、底面幅2.5～4m、深さ60～80cm、底面標高5m前後を測る。河道断面(第12図)をSD101(断面カ)・SD201(断面エ)・SD102(断面ク)の3箇所で採図したが、断面カ南岸、エ西岸、ク北岸では川岸がオーバーハング気味に立ち上がっており、縁を削る一定の水位と流量をもった河川であったことがうかがわれる。その堆積土には粘土、細砂、粗砂があり、砂層が埋没過程での時々の川底堆積土とみられる。また、各断面の土層堆積状況をおおまかにみると、SD102箇所では南から北に、SD201では東から西に、SD101では南から北に河道が変遷し、次第に流路の屈曲度合いを強めていったことが推定される。SD201では河道を第12図上のように分割し遺物を取り上げた。第16～19図に示した出土土器は弥生時代後期後葉が主であり、装飾器台があることから終末期の土器も若干含まれるとみられる。51の磨製石斧が河道南肩上部(第11図断面採図ポイント-カ西)から出土したほかは、SD201細分区画中のN区とSD102が接する箇所、S1区中程、SD101箇所からの出土であり、しかも多くは河道底面に堆積した粗砂層中からと、遺物分布に偏りが認められる。46・47は検出面出土の室町時代の土師器皿である。

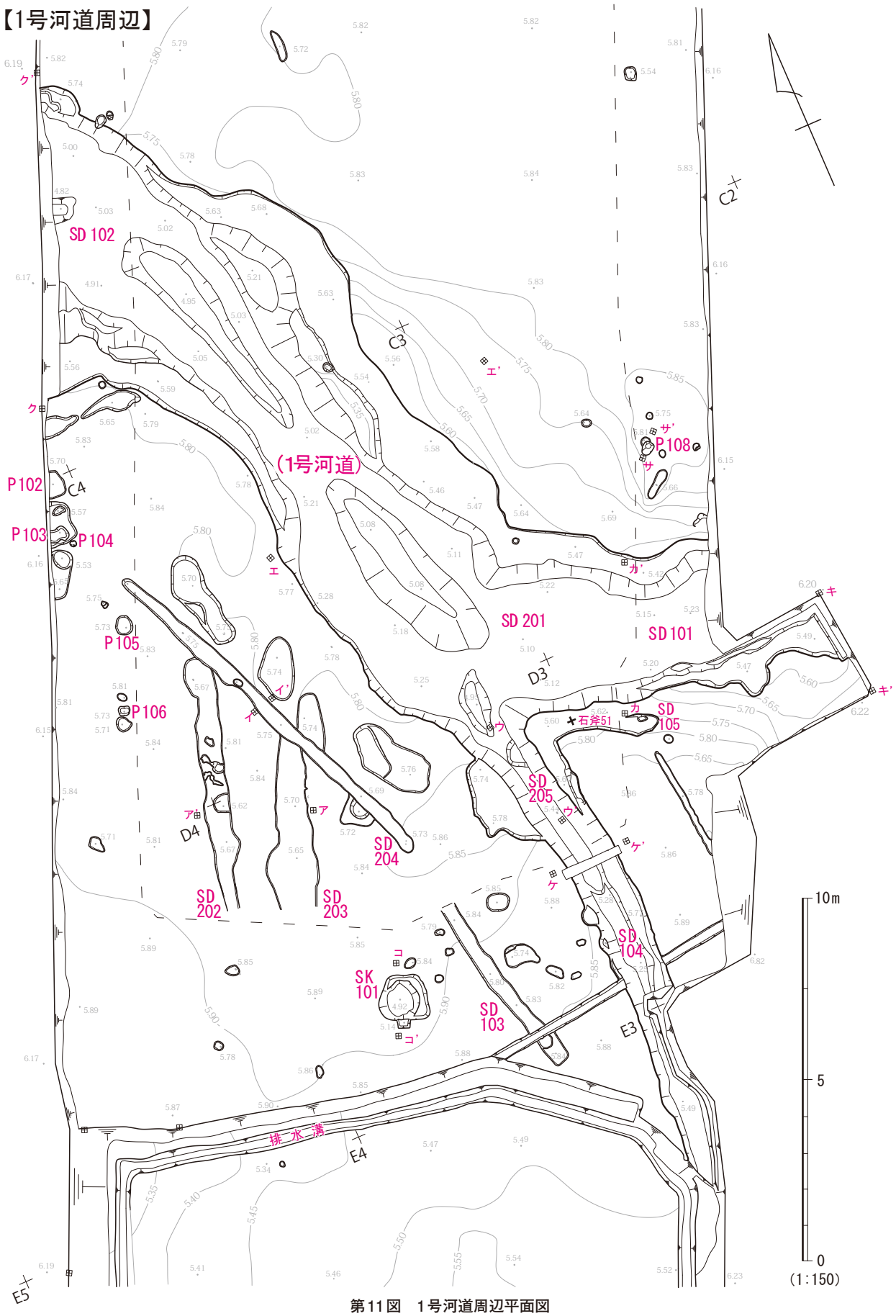
SD103・204(第5・7・11・13図)　1号河道西側に位置し、SD202・203より新しい。幅20cm弱、深さ5cm、長さ17m以上を測る。出土遺物はない。畑等耕作にともなう溝であろう。

SD104・205(第5・7・11・13・20図)　D3区で1号河道に流入する。幅1.5m、深さ60cm、南から北に緩く下り底面標高5.5m前後を測る。やや膨らむSD104箇所では断面椀形を、SD205箇所では断面逆台形を呈する。比較的平坦をなす底面は、所々に長さ30～50cm、深さ15cmのくぼみ(第13図断面ケ7層、断面ウ中央部下箇所)が存在し、ここに地山土を多く含む土壌が堆積する。水流によりえぐられたものであろうか。本溝については、SD205箇所の整った壁面形状(図版5・5)からみて1号河道に連結させた水路跡の可能性がある。覆土をSD201との接続箇所の溝縦断面第13図ウでみると、9・10層はSD201覆土、5～8層がSD205覆土であり、最終的に1～4層によりSD201・205は一体的に埋没したものとみる。出土遺物は第20図58～61に示した。弥生時代後期後葉のものである。61の口縁部内面には沈線による渦巻きが2箇所、胴部外面中位にはジグザク状に1箇所加えられる。

SD105(第5・7・11図)　SD101南西縁に位置する。幅20cm、深さ5cm、長さ30cm。弥生土器細片1点出土。性格不明。

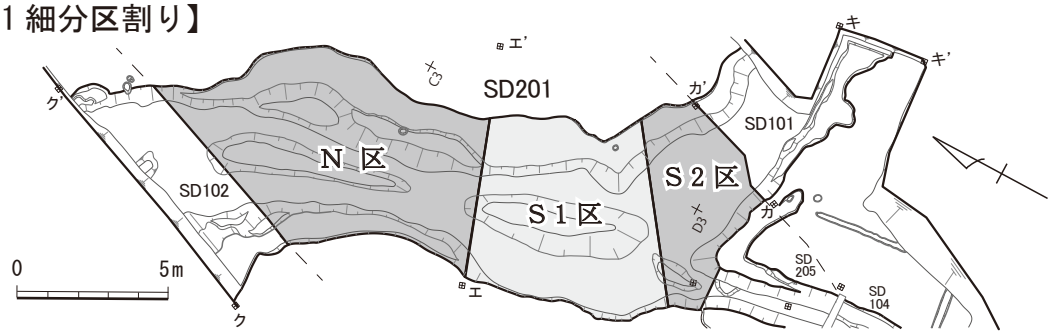
SD202(第5・7・11・13・20図)　1号河道西側に位置し、南西－北東を向く。SD204より古い。幅70cm、深さ10cm、長さ7m。第20図57の平安時代の須恵器無台杯片が出土している。畑等耕作にともなう溝であろう。

SD203(第5・7・11・13図)　SD202の東50cmで、SD202よりわずかに東を向き並走する。SD204より古い。幅90cm、深さ10cm、長さ5m。出土遺物なし。畑等耕作にともなう溝であろう。

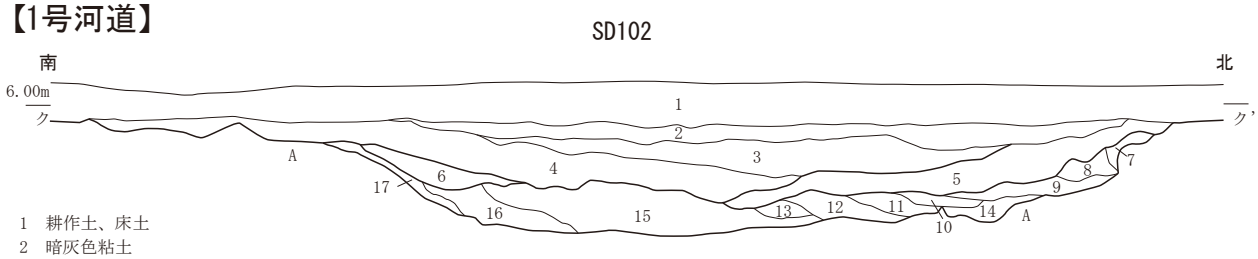


第11図　1号河道周辺平面図

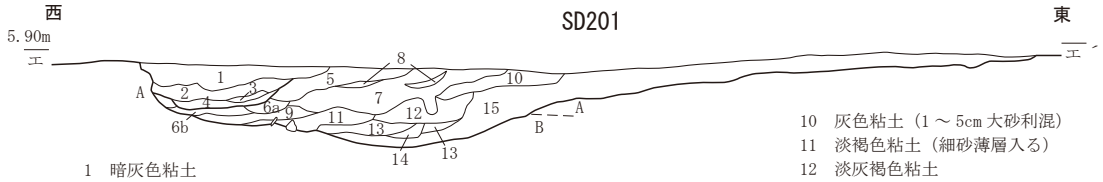
【SD201 細分区割り】



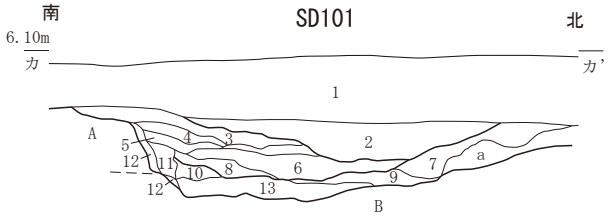
【1号河道】



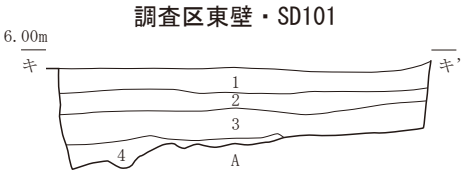
1　耕作土、床土
2　暗灰色粘土
3　灰色粘土
4　暗灰色粘土（断面クでは最も黒い）
5　濁暗灰色粘土（砂、腐植物の薄層入る）
6　濁暗灰色粘土（砂、腐植物の薄層入る）
7　濁青灰色粘土（河川肩の崩落土か）
8　濁暗灰色粘土（腐植物混）
9　濁灰色粗砂（小砂利、粗砂、砂の互層、腐植物を含み中央では主となる）
10　暗灰色粘土
11　濁暗灰色粘土（砂の薄層入る）
12　濁青灰色粗砂（小砂利、粗砂の互層、腐植物層入る）
13　濁青灰色粘土（砂の薄層入る）
14　濁黒褐色粘土（腐植物、砂の互層）
15　濁灰色粘土
（暗灰色粘土の 5mm 大ブロック混）
16　濁暗灰色粘土
17　濁青灰色粘土（河川肩の崩落土）
A　［地山土］青灰色粘土



1　暗灰色粘土
2　淡灰褐色粘土
3　灰黄色粗砂
4　黄白色細砂（淡灰褐色粘土薄層入る）
5　濁灰白色粘土
6a 濁黄白色細砂（腐植物混）
6b 濁黄白色細砂（1 ～ 5cm 大砂利、腐植物混）
7　灰褐色粘土
8　灰褐色粘土（1 ～ 5cm 大砂利混）
9　濁黄白色細砂（腐植物少量混）
10　灰色粘土（1 ～ 5cm 大砂利混）
11　淡褐色粘土（細砂薄層入る）
12　淡灰褐色粘土
13　灰褐色粘土（腐植物少量混）
14　黄白色細砂
15　暗灰色粘土
A　［地山土］灰緑色シルト
B　［地山土］濁黄褐色粗砂



1　耕作土、床土
2　暗灰色粘土（やや明るい、灰色に近い）
3　黒褐色粘土
4　濁暗褐色粘土（灰色粘土と暗褐色粘土がブロック状に混）
5　暗灰色粘土（中央付近は明るい、灰色に近い）
6　濁青灰色粗砂（腐植物、砂の互層）
7　濁灰色粘土（青灰色粘土小ブロック極少量混）
8　濁暗灰色粘土（腐植物、暗灰色粘土、灰色砂の互層）
9　濁暗灰色砂（腐植物、暗灰色粘土、灰色砂の互層）
10　濁灰色粘土（青灰色粘土ブロック混）
11　濁青灰色粘土（灰色粘土に青灰色粘土ブロック混）
12　濁青灰色粘土（青灰色粘土主体だが灰色粘土少量混）
13　濁青灰色粗砂（腐植物、粗砂の互層）
A　［地山土］青灰色粘土
B　［地山土］青灰色砂～粗砂

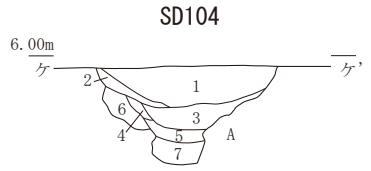


1　耕作土
2　床土（灰色粘土）
3　暗灰色粘土（大きくは SD101 上部層覆土か、拡張部の東半に堆積）
4　［SD101 覆土］濁暗灰色粘土
A　［地山土］青灰色粘土

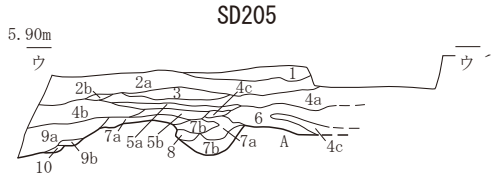
0　(1:60)　3m

第12図　1号河道断面図、SD201 細分区割り

【SD104・205】



1　濁暗灰色粘土（暗灰色粘土と灰色粘土が混ざる、断面ウ１・２層に同じ）
2　濁暗灰色粘土（暗灰色粘土と灰色粘土の層、１層より灰色粘土主体）
3　青灰色粗砂（粗砂、腐植物薄層の互層、断面ウ 4a 層に同じ）
4　灰色粘土
5　暗灰色粘土（腐植物入る、断面ウ６層に同じ）
6　濁暗灰色粘土（暗灰色粘土に地山土A層 が２～ 3cm 大ブロック混）
7　濁暗灰色粘土（暗灰色粘土に地山土A層ブロック混、一部に青灰色粗砂混）
A ［地山土］青灰色粘土



※1 ～ 4 層 :SI201・205覆土
5 ～ 8 層 :SI205 覆土
9・10 層 :SI201 覆土

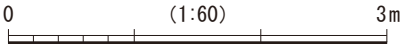
1　灰褐色粘土
2a 灰色粘土
2b 灰色粘土（褐色粘土ブロック混）
3　灰色粘土（4層ブロック少量混）
4a 濁黄白色粗砂（腐植物混）
4b 濁黄白色粗砂（腐植物多量混）
4c 濁黄白色粗砂（腐植物多量混、6層ブロック混）
5a 茶褐色粘土（粗砂・炭粒・腐植物混）
5b 茶褐色粘土（黄白色粗砂多量混）
6　暗褐色粘土（粗砂少量混）
7a 灰緑色シルト地山土（褐色粘土ブロック少量混）
7b 灰緑色シルト地山土（黄白色粗砂ブロック多量混）
8　灰褐色粘質土
9a 褐色粘質土（腐植物多量混、黄白色粗砂ブロック少量混）
9b 褐色粘質土（腐植物多量混）
10 黄白色粗砂
A ［地山土］灰緑色シルト

【SD202・SD203】

1a 灰褐色粘土
1b 灰褐色粘土（2層ブロック混）
2　灰緑色粘質シルト（1層ブロック混）
A ［地山土］灰緑色粘質シルト

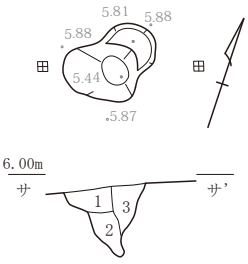
【SD204】

1　褐色粘質土
A ［地山土］灰緑色粘質シルト



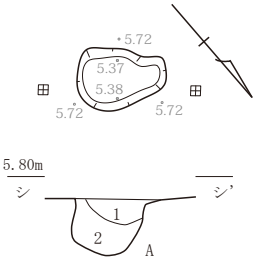
第13図　溝断面図

【P108】



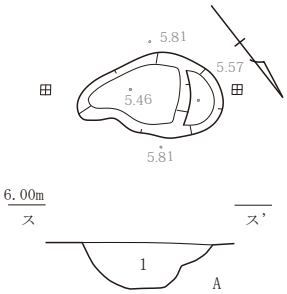
1　濁暗灰色粘土
2　濁灰色粘土
3　濁青灰色粘土

【P110】



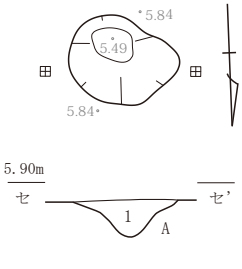
1　暗灰褐色粘土
2　暗灰色粘土（しまり甘い）
A ［地山土］黄灰褐色粘土

【P111】

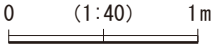


1　暗灰色粘土
（暗褐色粘土極少ブロック混）
A ［地山土］黄灰色粘土
（しまり甘い）

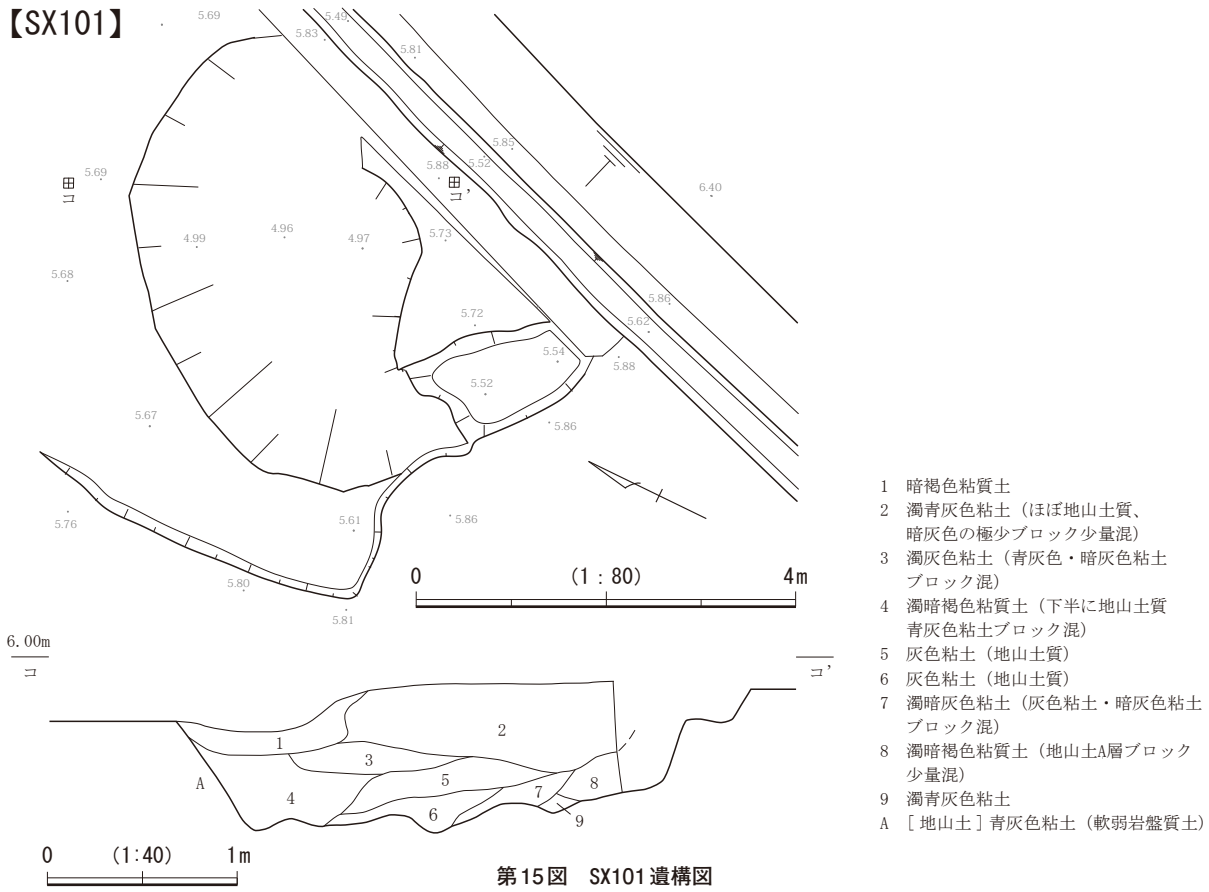
【P112】



1　暗灰色粘土
A ［地山土］黄灰色粘土



第14図　ピット遺構図



第15図　SX101遺構図

SX101(第5・9・15図)　調査区南部、K5区に位置し、調査区東壁に接する。直径3ｍ、深さ80㎝、不整円形を呈する。検出面周縁および土坑底面に沿って暗色土が堆積する状況からみて風倒木痕であろう。出土遺物なし。なお、加茂ボケ生水ウラ遺跡や、調査地の南東750ｍに位置する加茂フルドウ遺跡でも風倒木痕が多数検出されている。

小穴(第5・7～9・11・14・20図)　調査区北東側の1号河道周辺や南西端で小穴が散発的に分布しており、遺物をともなったものをP102～108とした。遺構とみなせるものはない。P102出土の第20図62の弥生時代後期後葉の壺を図化したほかはいずれも小片である。

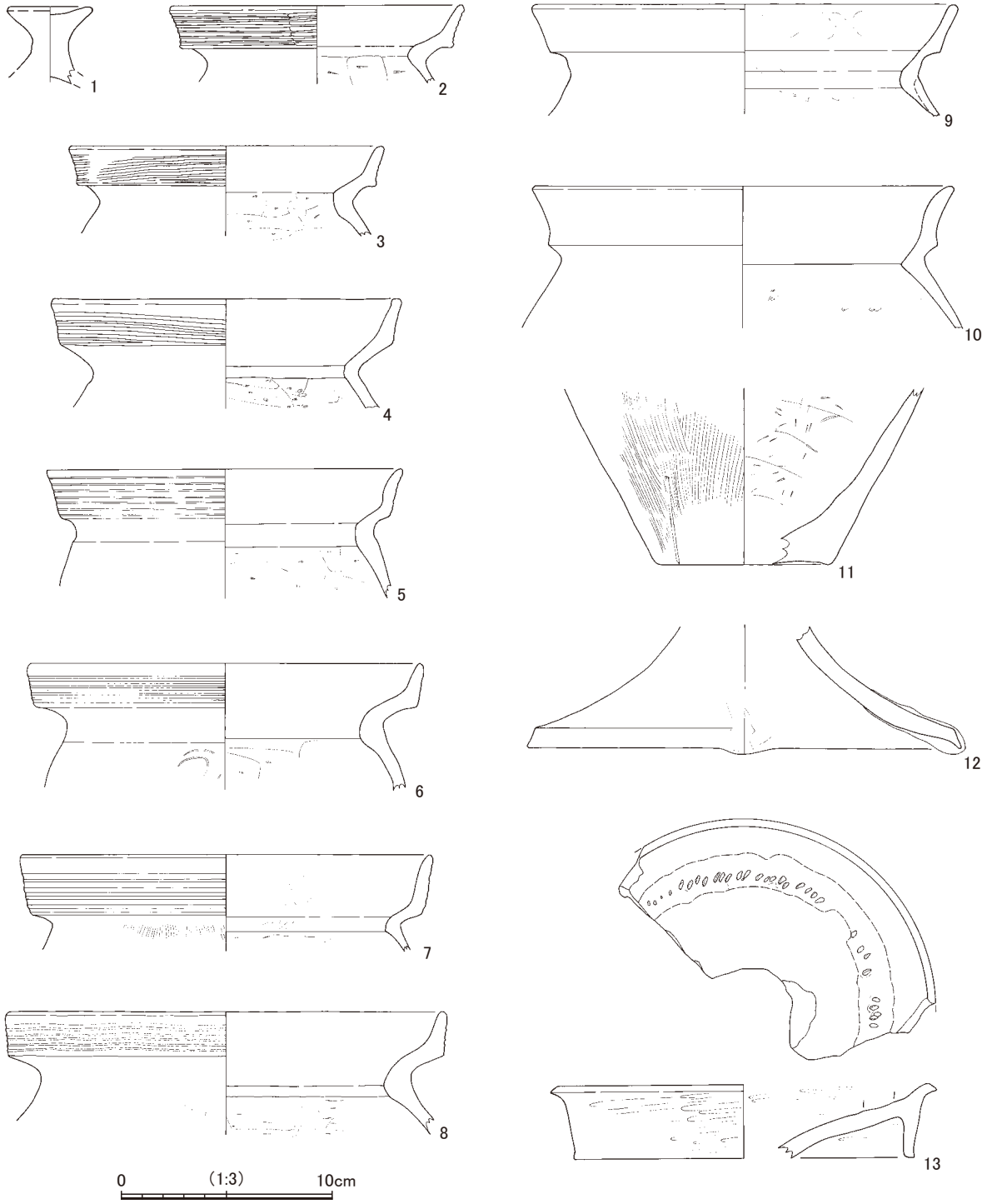
第3節　小　　結

遺構は主に調査区北部に分布しており、弥生時代後期後葉の自然河道1条、同期の水路とみられる溝1条、同期頃の土坑1基、耕作溝4条、風倒木痕1基、小穴10数個を確認した。調査地周辺はほ場整備等によりいくらかの削平を受けているとみられるが、堆積土をみると遺物はあまり含まれておらず、希薄な遺構分布状況は旧状を反映したものと推定される。

検出遺構の主体は弥生時代後期後葉の1号河道と水路とみられるSD104・205である。遺物の多くは河道底面に堆積した粗砂層中からの出土であり、その分布は河道北西部と中程そして東端部と出土地点に偏りが認められた。この遺物分布の偏りからは、増水時等に上流部からもたらされたものが多いと推定される。調査区内での流路は東から下り、SD201で流れを北に向ける。SD102ではその北岸がえぐられていることから、調査区より下流では西へ向きを変える可能性がある。水路SD104・205は地形の傾斜に沿って南方から下り1号河道に流入する。調査区域は弥生集落のはずれにあたるとみ

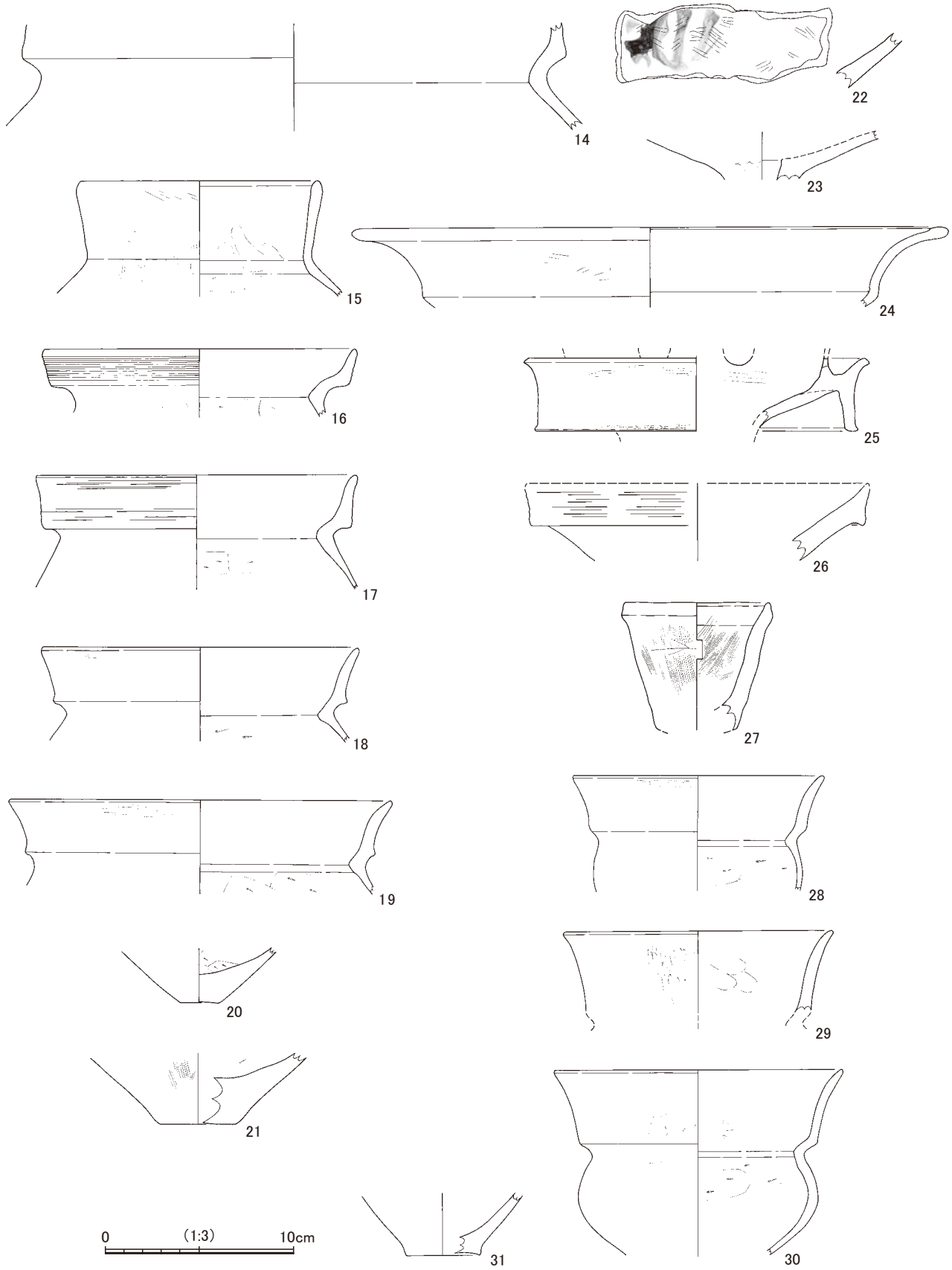
られるが、これら遺構・遺物を作出した弥生集落については、調査地南東方向の河道、水路上流部、現加茂集落の北の外れ辺り(第1図参照、現状で標高約7.2 m)に位置することを想定しておきたい。

【SD101】



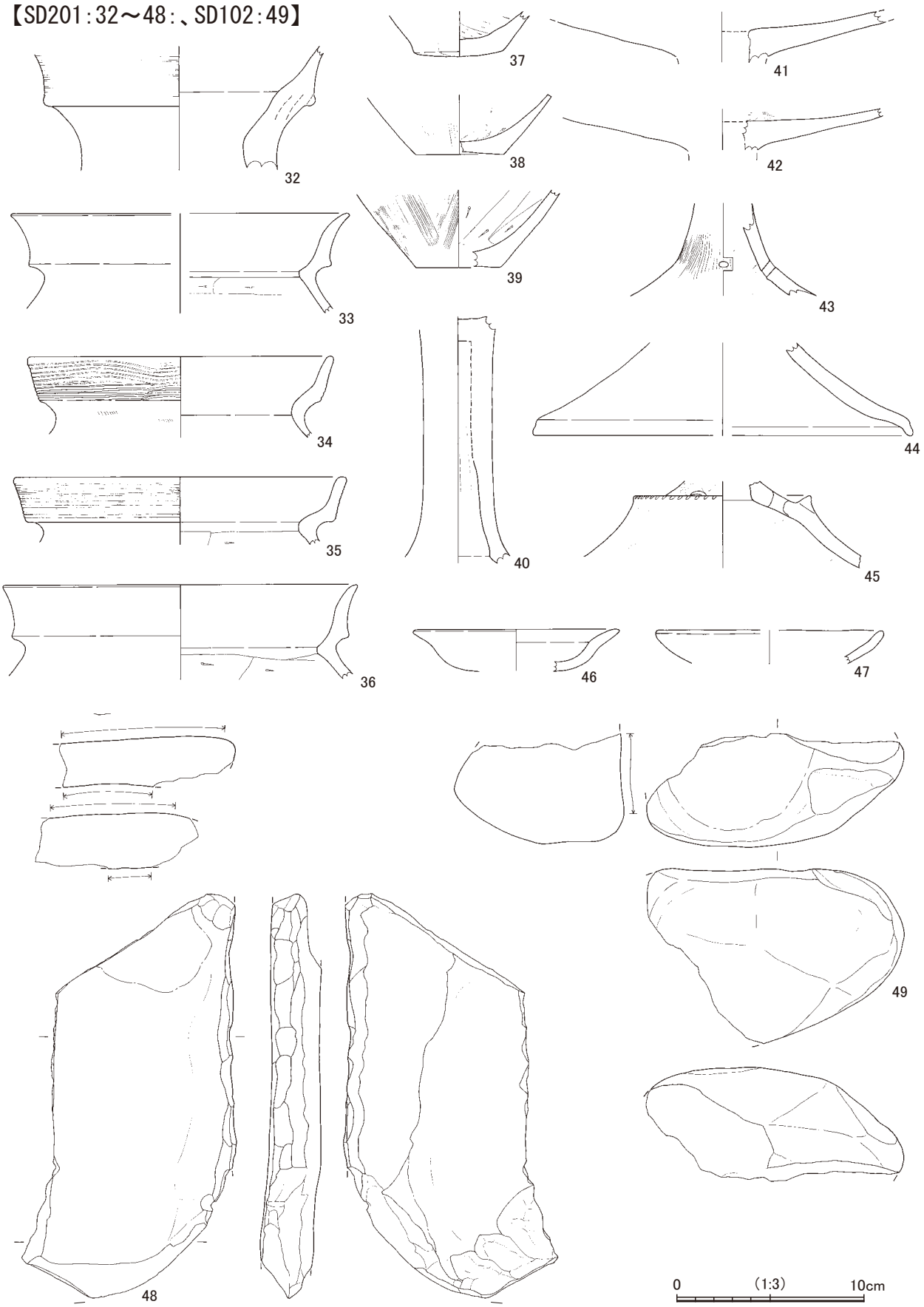
第16図　1号河道出土遺物1

【SD102】

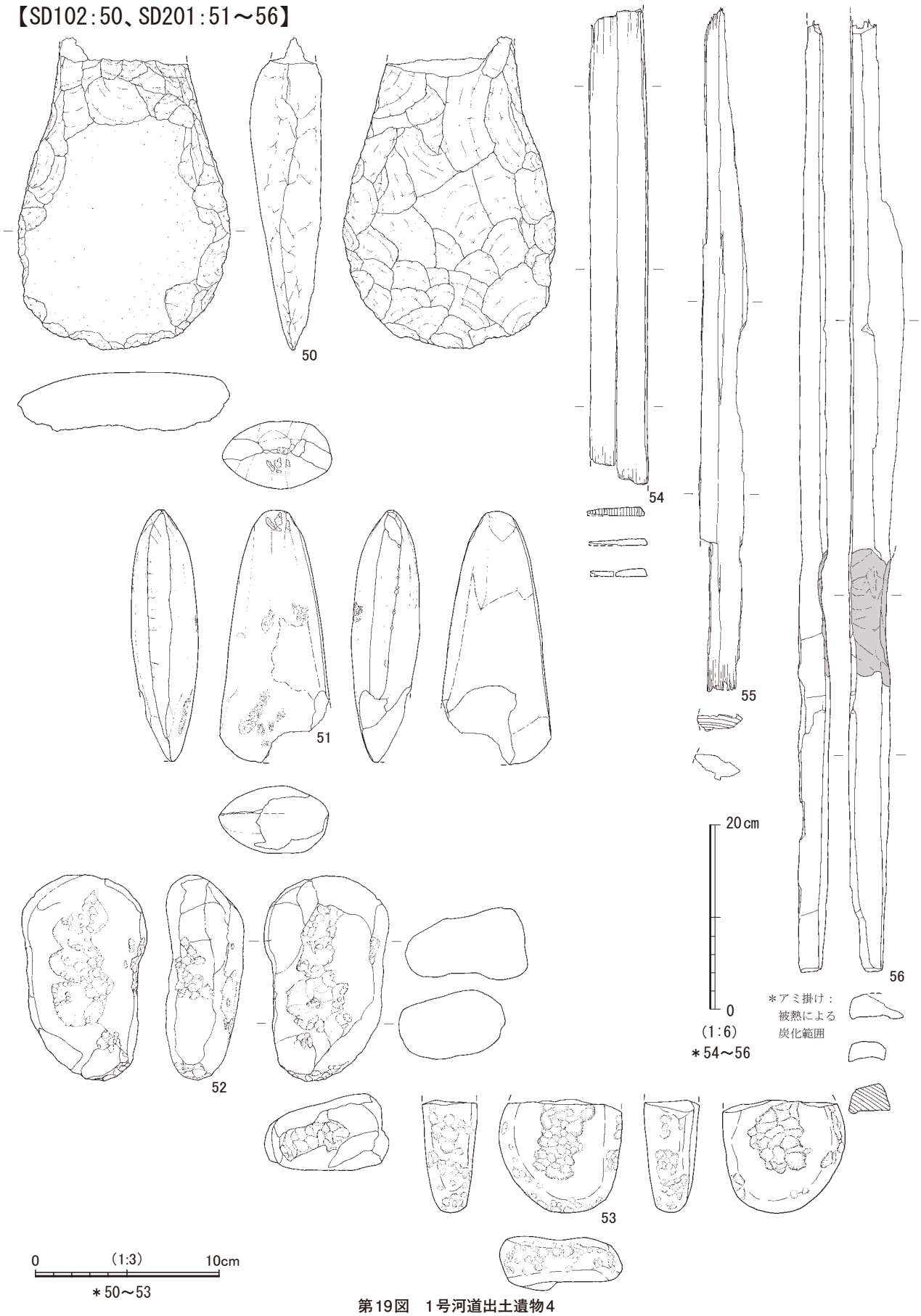


第17図　１号河道出土遺物２

【SD201:32～48:、SD102:49】



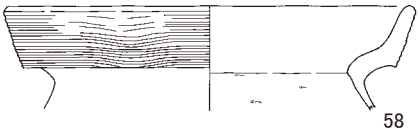
第18図　1号河道出土遺物3

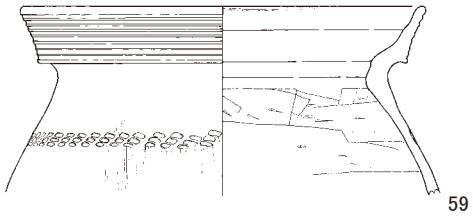


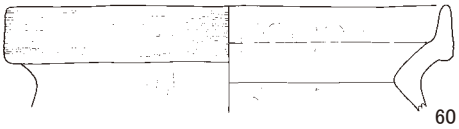
第19図　1号河道出土遺物4

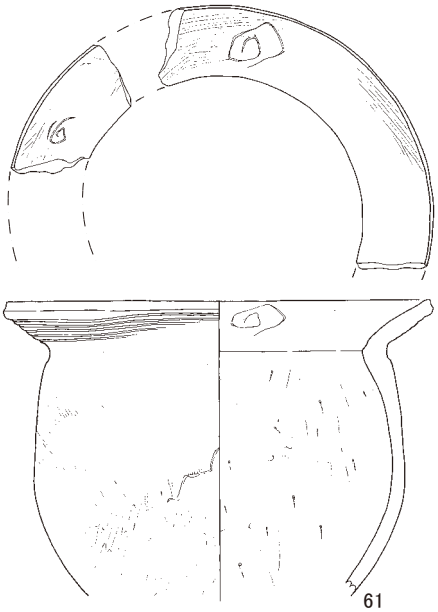
【SD202】

【SD205】

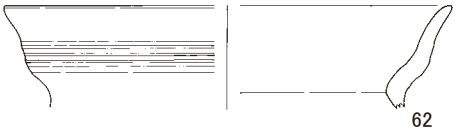




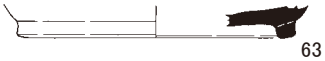




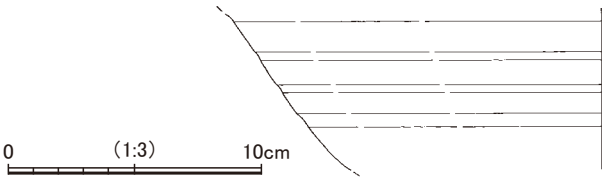
【P102】

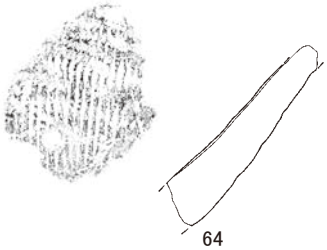


【排水溝】



【水田畦表採】





第20図　SD202ほか出土遺物

報告番号	調査年次	遺構 区　層位	種類 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm) 重量(g)	口縁残 底部残	色調（内） 色調（外）	焼成	調整（内） 調整（外）	備考	図化番号
1	1次	SD101	弥生土器				灰白	良	ナデ		C2
			蓋or高坏 (ﾐﾆﾁｭｱ)				灰		ナデ		
2	1次	SD101	弥生土器	13.8		2/12	鈍黄橙	良	ヨコナデ ケズリ		C49
			甕				灰黄褐		擬凹線7条 ヨコナデ		
3	1次	SD101	弥生土器	14.7		1/12	鈍黄橙	良	ヨコナデ ケズリ	口縁外面煤付着	C11
			甕				鈍黄橙		擬凹線6条 ヨコナデ		
4	1次	SD101	弥生土器	16.5		1/12	浅黄橙	良	ヨコナデ ケズリ		C13
			甕				灰白		擬凹線5条 ヨコナデ		
5	1次	SD101	弥生土器	16.7		2/12	鈍黄橙	良	ヨコナデ ケズリ		C6
			甕				鈍黄橙		擬凹線7条 ヨコナデ ナデ？ 摩耗のため調整不明		
6	1次	SD101	弥生土器	18.7		1/12	鈍黄橙	良	ヨコナデ ケズリ	外面煤付着 弧状の沈線文様あり	C8
			甕				鈍黄橙		擬凹線6条 ヨコナデ		
7	1次	SD101	弥生土器	20.1		小片	鈍黄	良	ヨコナデ ナデ ケズリ	外面煤付着 内外面摩耗著しい	C14
			甕				灰白		擬凹線5条 ヨコナデ ハケ		
8	1次	SD101	弥生土器	20.6		1/12	褐灰	良	ヨコナデ ナデ ケズリ	外面煤付着	C15
			甕				鈍黄橙		擬凹線6条 ヨコナデ ハケ 後ナデ		
9	1次	SD101	弥生土器	18.5		1/12	鈍黄橙	良	ナデ ケズリ		C10
			甕				鈍橙		不明		
10	1次	SD101	弥生土器	19.6		1/12	橙	並	ケズリ		C5
			甕				橙		ヨコナデ		
11	1次	SD101	弥生土器				黒褐	良	ナデ		C12
			甕	7.9			灰黄		ハケ ナデ		
12	1次	SD101	弥生土器				淡橙	並	磨耗のため調整不明	不明の付着物あり	C4
			高坏	20.4		1/12	浅黄橙		摩耗のため調整不明		
13	1次	SD101	弥生土器				浅黄橙	良	ミガキ		C3
			装飾器台				浅黄橙		ミガキ		
14	1次	SD102 遺構検出面	弥生土器				鈍黄橙	良	摩耗のため調整不明		C30
			壺				鈍黄橙		ヨコナデ(摩耗)		
15	1次	SD102	弥生土器	12.5		1/12	灰黄褐	良	ヨコナデ ナデ ケズリ		C24
			壺				灰黄褐		ナデ ハケ		
16	1次	SD102	弥生土器	16.5		2/12	鈍黄橙	良	ヨコナデ ケズリ		C23
			甕				鈍黄橙		擬凹線6条 ヨコナデ ハケ		
17	1次	SD102	弥生土器	16.6		2/12	灰黄	良	ヨコナデ ケズリ		C26
			甕				浅黄		ハケ後ナデ		
18	1次	SD102	弥生土器	17.0		5/12	鈍黄橙	良	ヨコナデ(摩耗) ケズリ	外面所々焦げ跡 あり	C27
			甕				鈍黄橙		擬凹線5条～（ほとんど摩耗） ヨコナデ		
19	1次	SD102	弥生土器	20.2		2/12	鈍黄橙	良	ヨコナデ ケズリ		C21
			甕				鈍黄橙		ヨコナデ ハケ後ナデ		
20	1次	SD102	弥生土器				褐灰	良	ケズリ		C25
			甕？	2.0		12/12	鈍黄橙		摩耗のため調整不明 ナデ		
21	1次	SD102	弥生土器				浅黄	良	ケズリ後ナデ		C36
			甕？	4.0		2/12	黄灰		ハケ後ナデ		
22	1次	SD102	弥生土器				鈍赤褐	良	ミガキ	内面赤彩による 文様あり	C16
			高坏				鈍黄橙		ミガキ？摩耗のため調整不明		
23	1次	SD102	弥生土器				灰黄	良	剥離		C19
			高坏				灰黄		ミガキ ナデ		
24	1次	SD102	弥生土器	30.8		2/12	鈍黄	良	摩耗のため調整不明		C22
			高坏				鈍黄橙		ミガキ		
25	1次	SD102	弥生土器				鈍黄	良	ヨコナデ 摩耗のため調整不明		C20
			装飾器台				鈍黄		ミガキ ヨコナデ ナデ		
26	1次	SD102	弥生土器	(18.2)			鈍黄橙	良	摩耗のため調整不明		C18
			器台				鈍橙		擬凹線4条 摩耗のため調整不明		
27	1次	SD102	弥生土器	7.6		9/12	黄灰	良	ナデ ハケ後ミガキ	外面沈線文様あり 一部黒斑？	C17
			鉢(小型土器)				黄灰		ヨコナデ ハケ後ミガキ		
28	1次	SD102	弥生土器	13.2		2/12	鈍黄橙	良	ヨコナデ ケズリ	外面煤付着	C28
			鉢				鈍黄橙		ヨコナデ ハケ後ケズリ		
29	1次	SD102	弥生土器	14.2		5/12	灰黄	良	ナデ		C29
			鉢				灰黄		ヨコナデ ミガキ		
30	1次	SD102	弥生土器	15.2		5/12	浅黄	良	ヨコナデ ミガキ ケズリ ナデ		C31
			鉢				浅黄		ヨコナデ		
31	1次	SD102	弥生土器				黒	良	ナデ		C34
			鉢？	3.8		2/12	浅黄橙		摩耗のため調整不明		
32	2次	SD201	弥生土器				鈍黄橙	良	摩耗のため調整不明		C45
		N　粗砂層	壺				鈍黄橙		擬凹線かすかに残す 摩耗のため調整不明		

第5表　加茂キツネ塚遺跡出土遺物観察表1

報告番号	調査年次	遺構 区　層位	種類 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm) 重量(g)	口縁残 底部残	色調(内) 色調(外)	焼成	調整(内) 調整(外)	備考	図化番号
33	2次	SD201 S1 粗砂層	弥生土器 壺	(17.8)		小片	鈍黄橙 鈍黄橙	良	ヨコナデ ケズリ ヨコナデ		C46
34	2次	SD201 粗砂層	弥生土器 甕	16.2		1/12	褐灰 褐灰	良	ヨコナデ ナデか？ 擬凹線6条 ヨコナデ ハケ	外面一部煤付着	C44
35	2次	SD201 S1 粗砂層	弥生土器 甕	17.6		2/12	鈍黄橙 鈍黄橙	良	ヨコナデ ケズリ 擬凹線12条 ヨコナデ		C7
36	2次	SD201 N 粗砂層	弥生土器 甕	18.8		2/12	明褐灰 明褐灰	良	ヨコナデ ケズリ ヨコナデ		C47
37	2次	SD201 N 粗砂層	弥生土器 甕？	4.8		12/12	灰黄褐 鈍黄	良	ケズリ ナデ	内面煤付着	C42
38	2次	SD201 N 粗砂層	弥生土器 甕？	4.7		1/12	灰黄 鈍黄橙	並	ケズリ ナデ ハケメ		C9
39	2次	SD201 N 粗砂層	弥生土器 甕？	4.5		3/12	淡黄 灰黄褐	良	ケズリ ハケ ナデ		C43
40	2次	SD201 S1 粗砂層	弥生土器 高坏				褐灰 鈍橙	良	摩耗のため調整不明 摩耗のため調整不明		C39
41	2次	SD201 S1 粗砂層	弥生土器 高坏				灰黄 灰黄	並	摩耗のため調整不明 摩耗のため調整不明		C40
42	2次	SD201 N 粗砂層	弥生土器 高坏				鈍橙 鈍橙	良	ミガキ 摩耗		C50
43	2次	SD201 N 粗砂層	弥生土器 高坏				浅黄 黄灰	良	ケズリ後ナデ ハケメ	孔あり数不明 外面煤付着	C41
44	2次	SD201 N 粗砂層	弥生土器 高坏	(20.0)		1/12	鈍橙 鈍橙	良	摩耗 摩耗		C48
45	2次	SD201 S1 粗砂層	弥生土器 器台				灰白 淡黄	良	ナデ ハケメ ミガキ キザミ	孔3ヶ所	C38
46	2次	SD201 N	中世土師器 皿	10.7			橙 橙	良	摩耗のため調整不明 摩耗のため調整不明		D1
47	2次	SD201 上層	中世土師器 皿	(12.0)		2/12	鈍黄橙 鈍黄橙	良	摩耗のため調整不明 摩耗のため調整不明		D3
48	2次	SD201 N 検出面	石製品 台石	最大長21.6 最大幅11.5	最大厚3.0 813.75						石4
49	1次	SD102 	石製品 台石	最大長(13.8) 最大幅(6.1)	最大厚(9.4) 829.9						石2
50	1次	SD102 	石製品 打製石斧	残存長 (17.0) 最大幅11.6	最大厚3.7 878.93						石1
51	2次	SD201 D3 南岸肩	石製品 磨製石斧	最大長(13.8) 最大幅 (6.0)	最大厚3.7 (373.35)						石3
52	2次	SD201 S1 粗砂層	石製品 叩石	最大長11.3 最大幅6.8	最大厚4.2 371.81						石6
53	2次	SD201 S1 粗砂層	石製品 叩石	残存長 (6.15) 最大幅6.7	最大厚3.0 (163.25)						石5
54	2次	SD201 底	木製品 板状木製品	最大長 (52.0) 最大幅 (6.4)	最大厚(1.0)						木1
55	2次	SD201 底	木製品 板状木製品	最大長 (74.7) 最大幅 (5.1)	最大厚(2.8)						特 木2
56	2次	SD201 底	木製品 棒状木製品	最大長 (104) 最大幅 (6.1)	最大厚3.5						特 木1
57	2次	SD202 	須恵器 無台坏	 10.9			灰 灰	良	ロクロナデ ロクロナデ 回転ヘラ切り後ナデ		D2
58	2次	SD205 	弥生土器 甕	16.0		2/12	灰白 灰白	良	ヨコナデ ケズリ 擬凹線9条 ヨコナデ		C32
59	2次	SD205 S1 粗砂層	弥生土器 甕	15.8		7/12	明褐灰 灰黄	良	消し残しのハケ ヨコナデ ケズリ 擬凹線8条 ヨコナデ ハケ	肩部ハケ状具による連続刺突	C37
60	2次	SD205 S1 粗砂層	弥生土器 甕	17.3		2/12	灰黄 灰黄	良	ナデ ケズリ 擬凹線8条 ハケ ナデ		C35
61	2次	SD205 S1 粗砂層	弥生土器 甕	16.8		3/12	灰黄 灰黄	良	ハケメ ケズリ 擬凹線5条 ヨコナデ ハケメ ミガキ	口縁内面渦巻き状・胴部外面ジグザグ状沈線文様あり、外面煤付着	C33
62	1次	P102 	弥生土器 甕	(17.7)		1/12	灰黄褐 鈍黄橙	良	ヨコナデ 擬凹線4条 摩耗のため調整不明		C1
63	1次	遺構検出面排水溝 	須恵器 有台坏	 10.0		 2/12	灰 灰	良	ロクロナデ ロクロナデ		D4
64	1次	表採田畦 	珠洲焼 すり鉢				灰 灰	良	おろし目9条 ロクロナデ	内外面とも摩耗剥離著しい	D5

第6表　加茂キツネ塚遺跡出土遺物観察表2

第4章　加茂新高遺跡

第1節　概　　要

1. 調査区の設定（第21図）

調査区域は加茂町集落西側に接した水田域に位置する。調査前において調査区東部は農道、西部では、B区が水田、A・C区は水田上に約1.5ｍ盛土され駐車場・納屋として利用されていた。

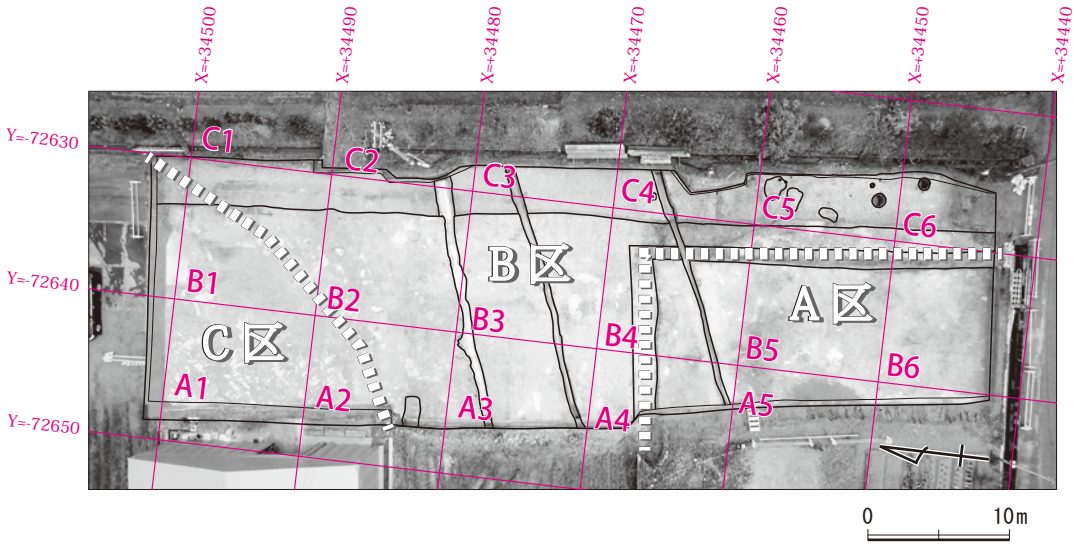
調査区全体には平面直角座標第Ⅶ系（世界測地系）に合わせた一辺10ｍの格子をかけ、北西隅のX＝＋34500とY＝72650の交点を基点に、東西帯にはアルファベットを、南北帯にはアラビア数字を振り、これを組み合わせ細分区画名とした。また、東西延長約60ｍの調査区は排土先および隣接納屋からの出入り口確保の制約から大きく3区に大別、A・B・C区と呼称し、B→A・C区の順に調査を進めた。

2. 基　本　層　序（第22図）

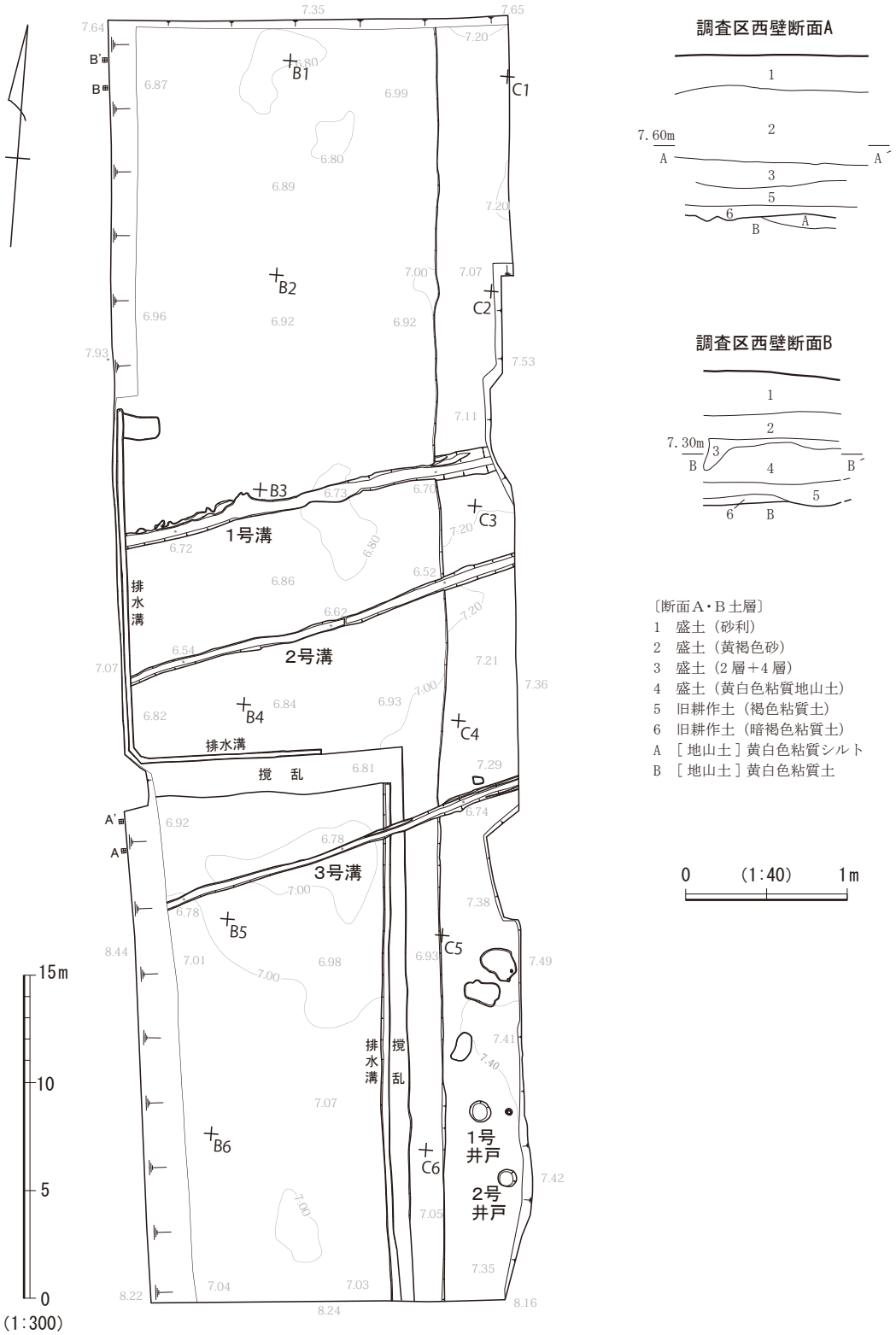
調査地周辺の現況地形は南から西および北に緩く下り、調査地において地表標高は7.4ｍ前後を測る。また、水田域では耕作土直下で黄白色の地山土が露出し、その標高は7.0～6.8ｍ。農道下箇所も同じく削平されるが、水田箇所よりは10～60㎝程高位の7.4～7.1ｍで地山土となり、削平度合いは若干少ない。それでも調査区東に接する畑地では標高7.7ｍ前後に地山土が認められることから、一帯はほ場整備事業等により大幅な削平を受けていることが知られた。第22図にA(A区)・B(C区)の2箇所の調査区西壁土層堆積状況を示したが、1～4層の新しい盛土の下で盛土造成以前の水田耕作土、床土である5・6層が約20㎝厚で堆積し、その下が地山土A層(黄白色粘質シルト)、その下位でやや硬質の地山土B層(黄白色粘質土)となる。また、B区西側では小円礫を含む砂礫層が地山土となっていた。A区では2基の井戸を検出したがその底面では標高6.7～6.8ｍで湧水の激しい砂礫層を確認した。B区の砂礫層と標高が近似しており、調査地一帯に分布する一連の地山土層の可能性が高い。

3. 遺　構　・　遺　物

A区東部で中世期とみられる素掘り井戸2基を、A区北部からB区においては、南西から北東に緩やかに下る溝3条を検出した。遺物は土師器、須恵器、陶磁器、石・木製品等が合計32点出土した。



第21図　調査区割り、グリッド配置図



第22図　加茂新高遺跡調査区全体図、調査区西壁断面図

第2節　検出遺構・遺物

1号井戸(第22・23・24図)　A区東部の農道下箇所で検出した。円筒形の素掘り井戸であり、直径100㎝、深さ85㎝を測る。覆土は褐色粘質土基層の比較的単純層で短期に埋め戻されたとみられる。隣接する畑で認められる地山土レベルからみて30㎝は削平されていると推測する。よくしまる地山土A・B層を堀り抜き、砂礫土C層に10㎝掘り込まれる。C層からの湧水は激しく、排水するも明朝には上面まで水が溜まる状態であった。出土遺物は第24図に示した。1は古墳時代中期頃とみられる円筒埴輪である。土師質で淡燈褐色を呈し焼成は堅緻である。器厚1㎝、内外をハケ調整する。中窪みする凸帯は高さ1㎝、幅は1.7㎝前後で一様でなく雑な作りである。流込品であろう。2は長さ26.5㎝の箸状木製品であり、3も箸状木製品断片である。時期を決定できる遺物はないか、形状からみて中世の所産としておきたい。

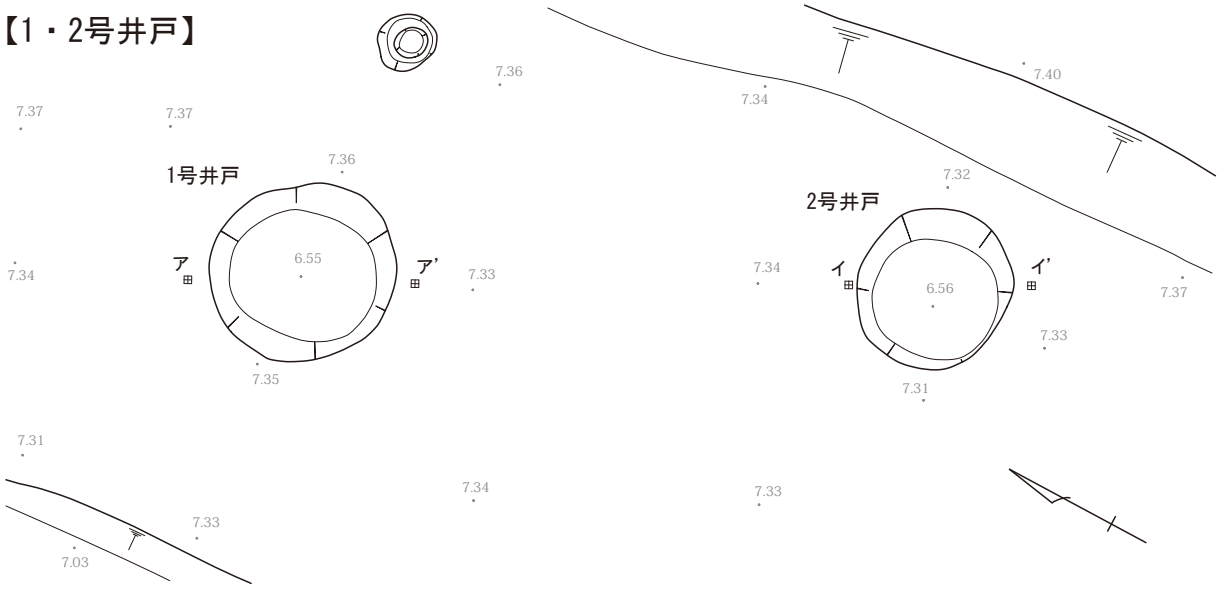
2号井戸(第22・23図)　1号井戸の2.5ｍ南東に位置する。円筒形の素掘り井戸であり、直径75㎝、深さ80㎝、壁面の一部がオーバーハング形状をなす。1号井戸と同じく地山土C層まで掘り込まれ湧水が激しい。覆土は1号井戸と同じく褐色粘質土基層の単純層であり短期に埋め戻されたとみられる。出土遺物はないが1号井戸と形状、覆土が類似し近接時期の所産であろう。

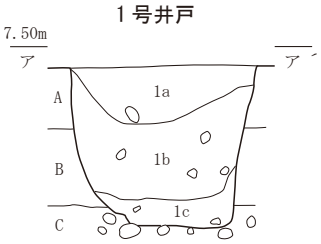
1号溝(第22・25～27図)　B区に位置する。南西から北東にわずかに下りながら調査区を斜行する。水路とみられ、長さ17ｍ以上。断面は椀形を呈し、比較的遺存の良い農道下箇所で幅120㎝、深さ42㎝を測る。第26図断面エの3ａ層より上面が削平されており、井戸と同様30㎝程度は削平されているものとみられる。出土遺物は第27図4～11に示した。4は埴輪であり、底部として図化したが円筒埴輪等の口縁部の可能性もある。断面淡灰色を呈し堅緻な須恵質だが、器表は淡橙色で軟質な印象を受ける。器厚1㎝、内外をハケおよびナデ調整する。古墳時代後期頃のものか。5は土師器無台椀、6は溝下半出土の7世紀前半頃の須恵器高坏、7は須恵器甕体部、8は灰釉陶器皿、9は14世紀後半～15世紀代の青磁碗、10は近世以降の瀬戸美濃鉢、11は砥石である。ほかに土師器、須恵器片、加賀焼甕片が計10点出土している。出土遺物は古墳時代から近世あるいは近代までの幅を持ちいずれも細片であることから、直截に本遺構の帰属年代は決定しがたいが、主体遺物からみて、中世以降の所産としておきたい。

2号溝(第22・25～27図)　B区に位置する。南西から北東にわずかに下りながら調査区を斜行する。水路とみられる。箱堀りをなし、長さ17ｍ以上、比較的遺存の良い農道下箇所で上幅64㎝、底幅30㎝、深さ68㎝を計る。断面形状の類似する3号溝とは約10ｍ間隔をおいて並走する。30㎝程度は削平されているものとみられる。地山土深くまで大幅に削平される西半部では、湧水によりベース土が軟弱化し溝壁面が内傾する(断面カ)。覆土は4層以下はしまりが甘く、そのうち4層は灰白色砂、5層には4層が多く混ざり水流にともなう堆積土と推定される。上位の1～3層はしまりをもち埋め戻し土の可能性がある。第27図12は検出面で出土した中世の加賀焼すり鉢である。体下半部にケズリを加える。ほかに須恵器、加賀焼甕片各1点が出土している。本遺構も年代を決定しがたいが中世以降の所産としておきたい。

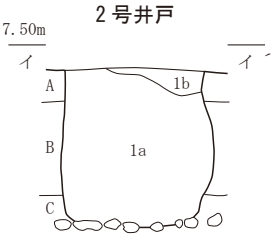
3号溝(第22・25～27図)　A区北部からB区に位置する。南西から北東にわずかに下りながら調査区を斜行する。水路とみられる。長さ17ｍ以上。箱堀りをなすが2号溝より幅が狭く、比較的遺存の良い農道下箇所では北壁が底面より30㎝上で段をなす。上幅58㎝、底面幅18㎝、深さ60㎝を測る。30㎝程度は削平されているとみられる。2号溝と同じく西半部では溝壁面が土圧により内傾する(第

【1・2号井戸】





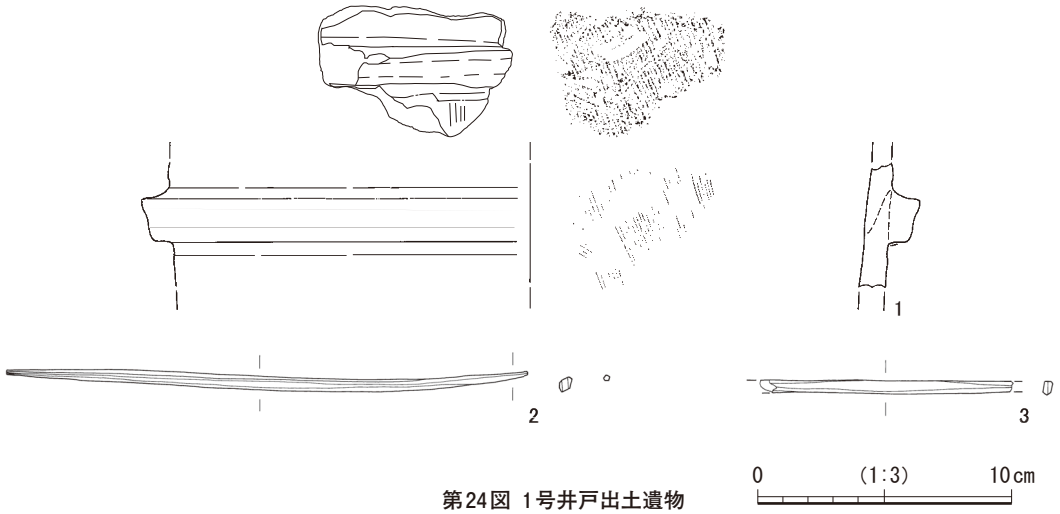
1a　褐色粘質土
　（黄白色粘質2cm大地山土ブロック少量混）
1b　褐色粘質土
　（黄白色粘質3～5cm大地山土ブロック少量混、円礫混）
1c　褐色粘質土
　（黄白色粘質3～5cm大地山土ブロック多量混、円礫混）
A　［地山土］淡褐白色粘質土（砂粒少量混）
B　［地山土］黄白色粘質土
C　［地山土］砂礫土（5～15cm大の円礫多量混）



1a　褐色粘質土
1b　褐色粘質土
　（黄白色粘質地山土ブロック多量混）
A　［地山土］淡褐白色粘質土（砂粒少量混）
B　［地山土］黄白色粘質土
C　［地山土］砂礫土（5～15cm大の円礫多量混）

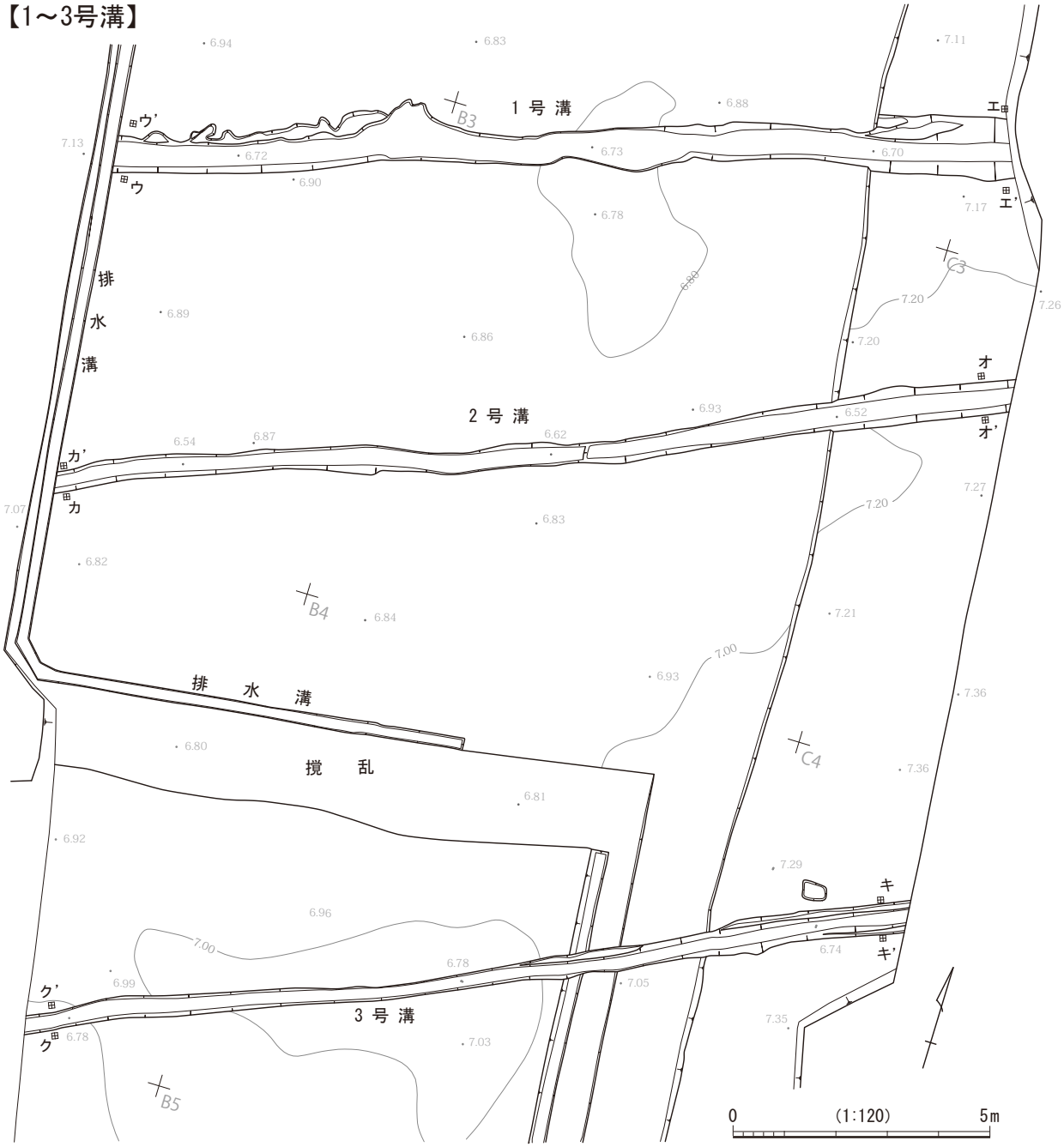
0　(1:40)　2m

第23図　1・2号井戸遺構図



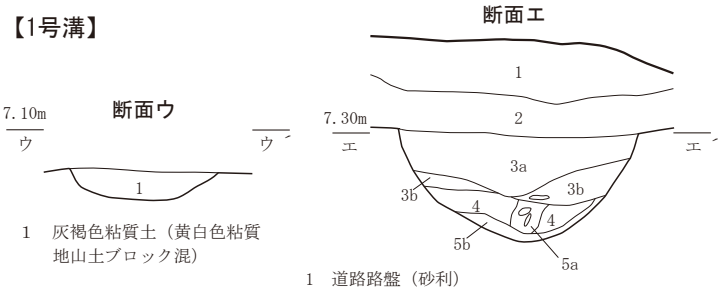
第24図 1号井戸出土遺物

26図断面ク)。覆土はしまりを持ち2号溝3層に類似する。出土遺物は第27図13～15に示した。13は土師器高杯、14は7世紀第1四半期の須恵器坏身、15は古代の須恵器坏身である。ほか土師器片4点が出土している。時期については、遺構の配置や形状、覆土の類似から2号溝と並存あるいは近接した時期の所産であろう。



第25図 1～3号溝平面図

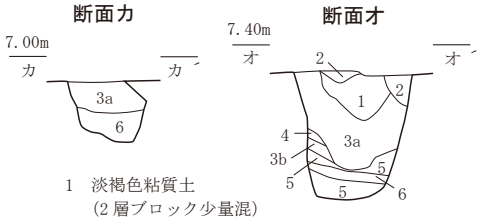
【1号溝】



1　灰褐色粘質土（黄白色粘質地山土ブロック混）

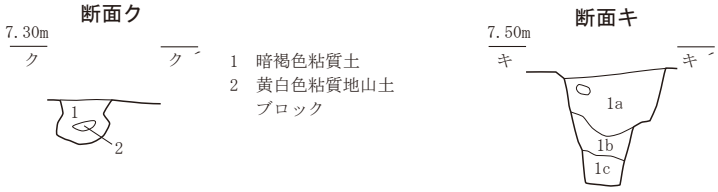
1　道路路盤（砂利）
2　水田耕作土（客土、灰褐色粘質土）
3a 褐色粘質土
3b 褐色粘質土（黄白色粘質地山土ブロック少量混）
4　灰褐色粘質土（黄白色粘質地山土ブロック少量混）
5a 暗褐色粘質土
5b 暗褐色粘質土（黄白色粘質地山土ブロック少量混）

【2号溝】



1　淡褐色粘質土（2層ブロック少量混）
2　暗褐色粘質土
3a 褐色粘質土（2層ブロック少量混）
3b 褐色粘質土（4層ブロック少量混）
4　灰白色砂
5　淡褐色粘質土（しまり甘い、4層ブロック多量混）
6　暗褐色粘質土（しまり甘い）

【3号溝】

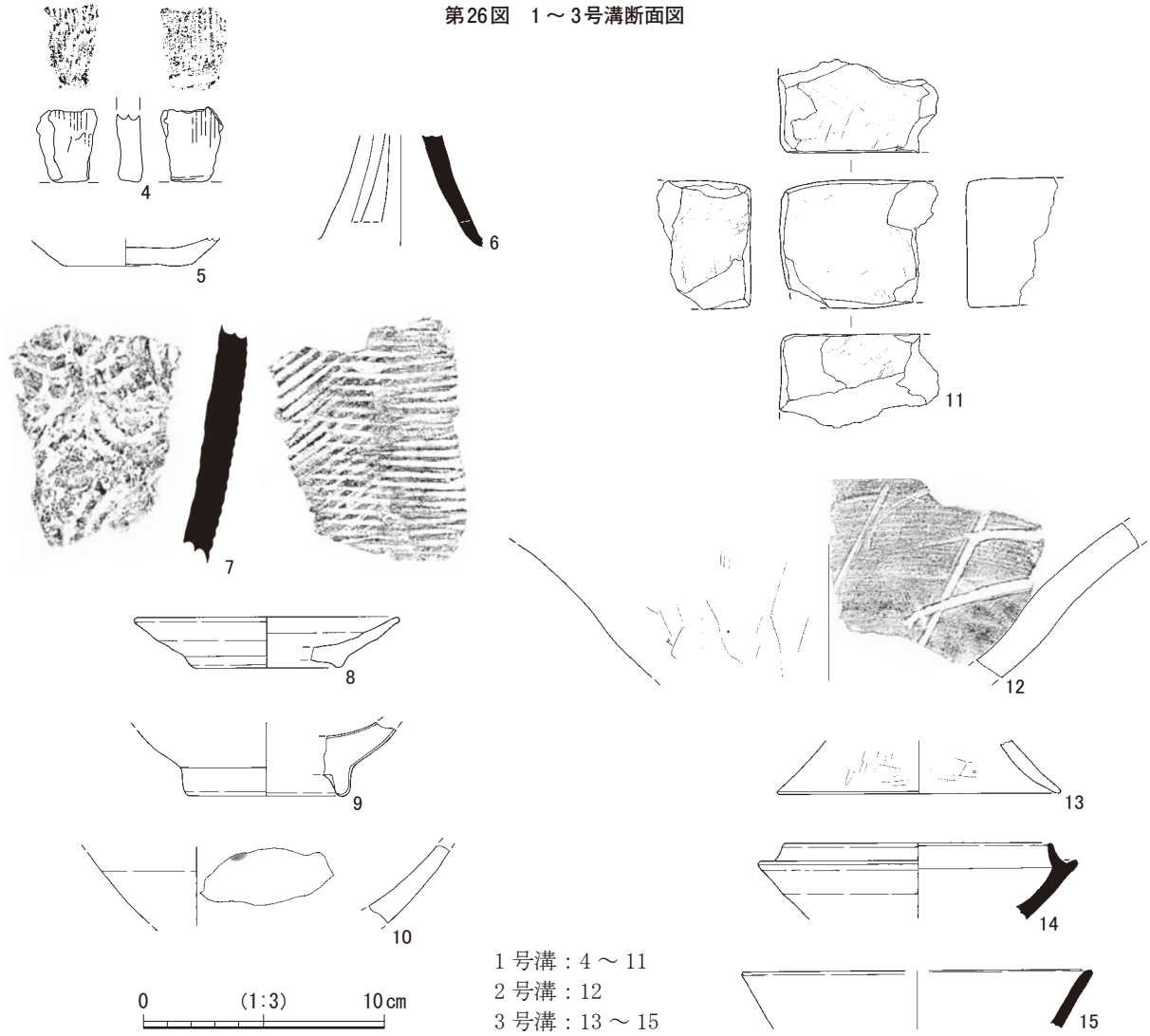


1　暗褐色粘質土
2　黄白色粘質地山土ブロック

1a　褐色粘質土（黄白色粘質地山土粒少量混）
1b　褐色粘質土（黄白色粘質地山土粒多量混）
1c　褐色粘質土（黄白色粘質地山土粒少量混、砂粒混）

0　(1:40)　2m

第26図　1～3号溝断面図



1号溝：4～11
2号溝：12
3号溝：13～15

第27図　1～3号溝出土遺物

第3節　小　　結

調査の結果、中世とみられる素掘り井戸2基、中世以降の溝3条のほか小穴数個を確認した。

調査地周辺は、ほ場整備等により30～70㎝程度の削平を受けており旧状は明らかにしがたいが、周辺地形からみて井戸を伴う中世集落の主体は、より比高の高い調査地東側の加茂集落域にあると推定される。また、溝からは古墳時代終末～古代の土師器、須恵器が出土しており、周辺に該期の集落が存在することも推定される。さらに、細片ばかり32点の出土品の中に古墳時代中期あるいは後期かとみられる埴輪片2点が含まれた。本遺跡の立地する江沼盆地では盆地内を貫流する動橋川、大聖寺川、八日市川水系沿いに約350基の古墳が確認されている(石川考古学研究会　1978)。加茂町周辺では西方約1.5㎞の大聖寺川を見下ろす丘陵上に黒瀬・吸坂・南郷古墳群が、東方約2㎞の動橋川沿いには二子塚古墳群が築かれている。特に二子塚古墳群では単独墳と考えられていた狐山古墳(国指定史跡)周囲の水田下から33基が発見され、100基を越える古墳が分布することが推定されている(田嶋・湯尻　1974)。2点の埴輪片は、本遺跡周辺においても古墳が存在する可能性を示唆する貴重な資料である。

報告番号	地区 遺構	種類 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm) 重量(g)	口縁残 底部残	色調(内) 色調(外)	焼成	調整(内) 調整(外)	備考	図化番号
1	A区 1号井戸	土製品 円筒埴輪	直径(28.4) 厚1.0			浅黄橙 浅黄橙	良	ハケ ハケ、ナデ		D1
2	A区 1号井戸	木製品 箸状木製品	長26.5 幅0.6							木1
3	A区 1号井戸	木製品 箸状木製品	残存長10.0 幅0.5							木2
4	B区 1号溝	土製品 円筒埴輪	厚1.0			淡黄 淡黄	良	ハケ、ナデ ハケ、ナデ		D12
5	B区 1号溝西側	土師器 無台椀	5.4		5/12	淡黄 淡黄	良	ナデ ナデ		D11
6	B区 1号溝東側	須恵器 高坏				灰 灰	良	ロクロナデ ロクロナデ	三方透　外面降灰あり	D7
7	B区 1号溝断面エ3b層	須恵器 甕				灰白 灰	良	当て具(同心円状) タタキ(平行)	内面一部に自然釉かかる	D8
8	B区 1号溝	灰釉陶器 皿	10.7 5.8	2.1	1/12以下 3/12			ロクロナデ ロクロナデ	釉薬：灰釉	D2
9	B区 1号溝	青磁 碗	6.6		1/12				産地:中国、釉：青磁釉 釉薬色調：緑灰 内外面貫入あり　胎土色調：灰白	D6
10	B区 1号溝	陶器 鉢							産地:瀬戸美濃、釉薬：灰釉 釉薬色調：明オリーブ灰 内外面貫入あり　胎土色調：黄灰	D9
11	B区 1号溝東側	石製品 砥石	残存長5.4 幅6.6	厚3.9 (144.9)						石1
12	B区 2号溝東側検出面	加賀焼 すり鉢				青灰 暗青灰	良	ロクロナデ ロクロナデ、ケズリ		D5
13	A区 3号溝	土師器 高坏	11.6		1/12以下	橙 橙	並	ヨコナデ、ケズリ ミガキ		D4
14	A区 3号溝	須恵器 坏	11.0			灰 灰	良	ロクロナデ ロクロナデ		D3
15	A区 3号溝	須恵器 坏	(14.4)		1/12以下	灰 暗青灰	良	ロクロナデ ロクロナデ		D10

第7表　出土遺物観察表

第5章　加茂ボケ生水ウラ遺跡

第1節　概　　要

1. 調査区の設定（第28図）

調査地は、東西幅16ｍ、南北長237ｍの規模である。第1次調査では、第1章で述べたようにいくつかの制約があり、個々の調査区を小さくかつ飛び地状に設定せざるを得ない状況であった。そのため表土除去作業が可能な場所から着手し、その順番に片仮名でイロハ順に振り調査区名とした。なお、平成27年度に実施された第2次の調査区は、特に調査区名をつけていないことから本報告書では便宜的にH27区と呼称する。

グリッド杭は、南北ラインの北から南へ10ｍ毎にアラビア数字を、東西ラインは西から東へ10ｍ毎にアルファベットを付し、基点を10ｍ四方の南西隅に設定した。

遺構は掘立柱建物(SB)、土坑(SK)、溝(SD)、柱穴・小穴(P)、不明遺構、風倒木痕等(SX) などの略号を使用した。略号の番号については、ト・イ・ル区は1～10番台、チ・ワ・ロ区100番台、ホ・ヨ・リ区200番台、ニ・ツ・ヌ区300番台、ヘ区400番台、ヲ区500番台、カ区600番台、ネ・タ・H27区700番台を用いており、調査区をまたぐ遺構は、先に着手した番号を優先している。出土遺物の取り上げは区名と遺構番号を基本とした。

第1次調査の表土除去作業は、大きく4回に分けて実施し、1回目はイ～ヘ区、2回目はト～ヌ区、3回目はル～ヨ区、4回目はタ～ネ区である。基本的にこの分け方により、それぞれ遺構検出・掘削、実測、空中写真測量までの各作業を進めた。

第2次調査では、第1次調査終了時の打ち合せで不要とされていた仮設農道が調査地内に新設されていたが、地元との協議により調査期間中は撤去することになった。表土除去後は、人力による遺構の検出・掘削を実施し、必要に応じて断面図作成や写真撮影を行った。遺構掘削完了後は、ラジコンヘリによる空中写真測量を実施した。

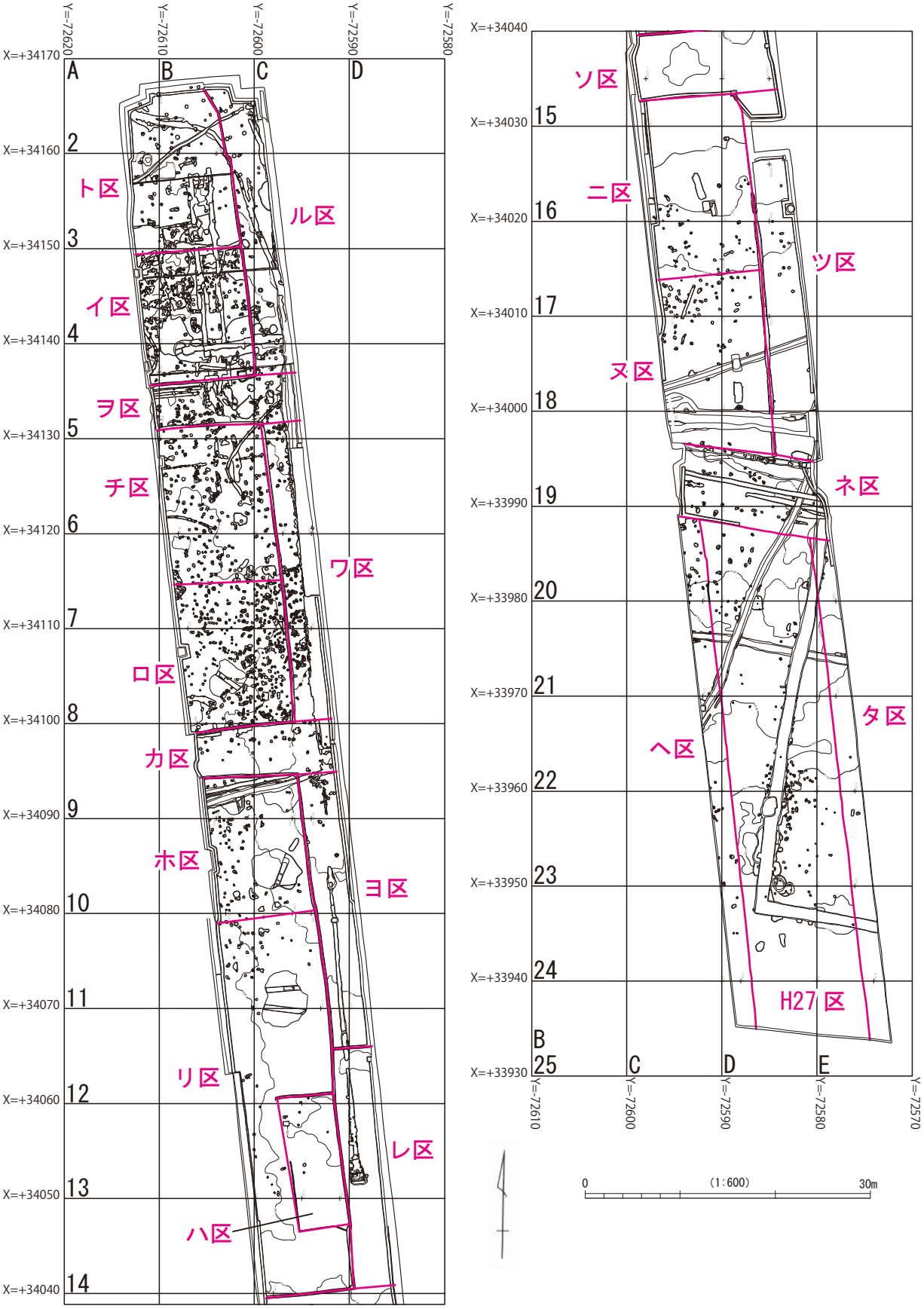
2. 基本層序（第29図）

調査区内の標高は、南からH27区E24グリッド付近11ｍ、ヌ区D18グリッド付近10.5ｍ、ニ区D15グリッド付近10ｍ、ホ区C9グリッド付近9.6ｍ、ル区C3グリッド付近9ｍ、最も低い地点は、ル区北東隅で8.8ｍとなっており、全体的に南から北へ下降している。南端と北端の最大高低差は2.2ｍである。

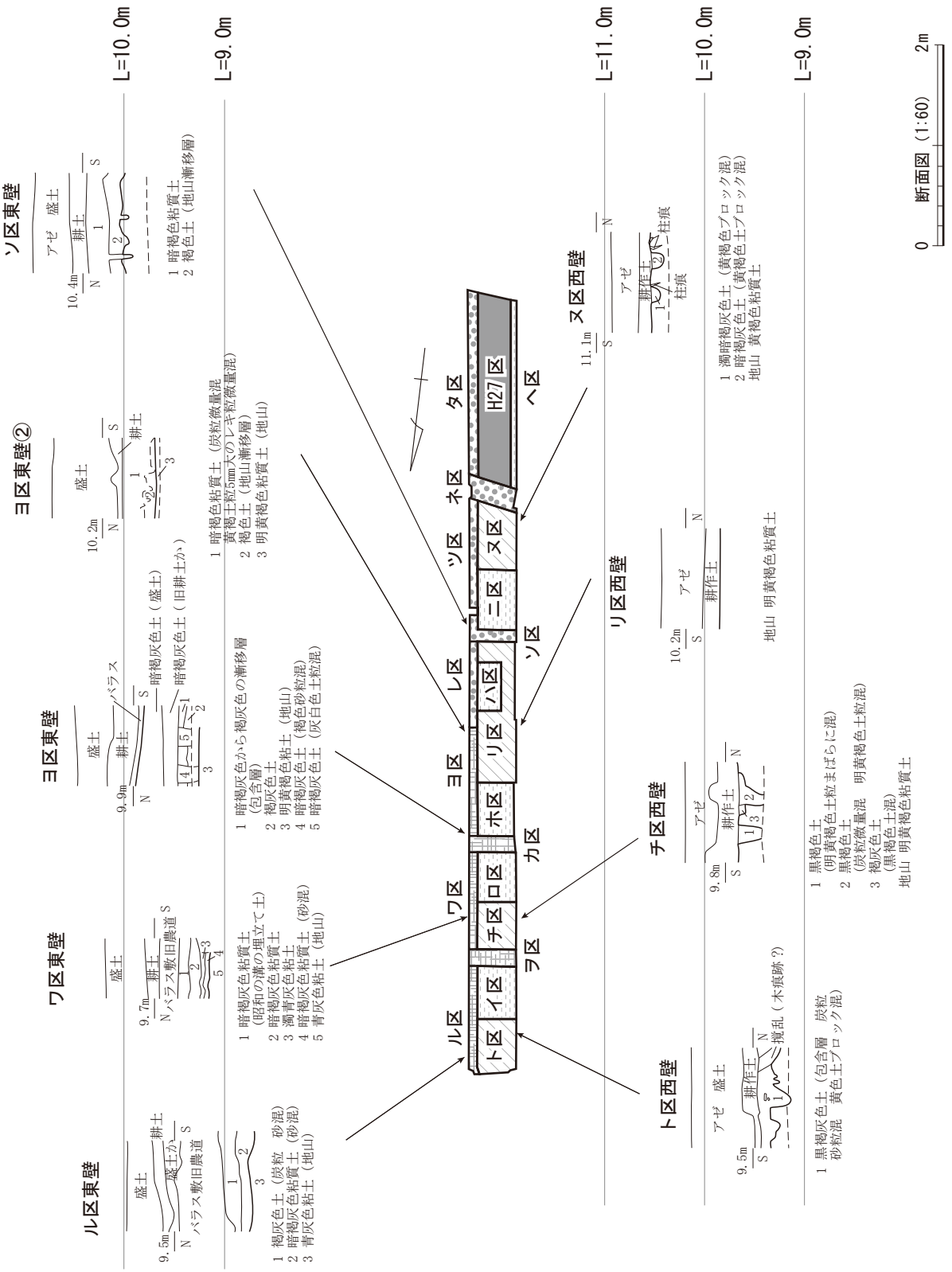
遺跡周辺は過去に耕地整理が行われており、大部分の包含層と地山の一部が削平されている。東西の両壁で包含層を確認できたのは、調査区中ほどのソ・ニ・ツ区と北端のト・ル区のみで、層序は上から盛土・耕作土の下位にソ区周辺では暗褐色粘質土、ト・ル区では黒褐灰色土の包含層が堆積している。遺物はどちらにもほとんど含まれない。

地山は、ト・ル区の北側が青灰色シルトとなっており、地下水位が高く常に水が染み出てくる状況であった。他の地区では、耕作土直下に黄褐～明黄褐色粘質土の地山がみられ、ヘ・タ・H27区のD22－E22グリッドライン付近で現水田区画に伴う削平跡が段差として確認できた。ネ区は東西方向の農道があった場所で、農道と同方向にのびる溝がみられた。溝には土管が埋設されており、昭和期に使用されていたものだろう。この農道を境に北側の水田区画はさらに一段低く削平されている。

ニ区とヌ区の境D16S4グリッド付近から標高が急に下がり始め、旧地形及び包含層を確認すること



第28図 調査区割り、グリット配置図



第29図　調査区壁土層断面図

ができる。ル・ワ・ヨ区の壁断面では昭和期の農道跡が見られる。調査区東辺付近にのびる溝はこれに付属したものと農道下の2条あったようである。これより北のト・ル区までは北に標高を下げつつ、東側も低い地形となっている。文化財課の分布調査では、北側調査区外の宅地から国道8号まではさらに地形が下り湿地状であったとのことから、遺跡範囲は宅地手前の舗装道路辺りまでと推定される。

なお、本遺跡名は字名から取ったものである。ツ区の東側隣接地には殿様生水という自噴井があり、現在も水が湧き出ている。これが『ボケ生水』を指すのか定かではないが、周辺(第1図参照)には他にも中納言様清水(殿様生水と混同か)・めくら生水・足洗い生水などの湧水を示す字名がみられることから、付近は地下水位が高い湧水地帯と考えられる。

3. 遺構・遺物

前述したとおり耕地整理による削平は地山まで及んでおり、失われた遺構もあると考えられるが、確認できたものは調査区の北部と南部にまとまっている。北部では、ホ区以北の弥生時代終末期から古墳時代中期頃の土坑4基、溝5条、奈良時代の小穴1基、平安時代の土坑1基、鎌倉時代の掘立柱建物7棟、井戸1基、竪穴状遺構1基などを検出した。南部では、ヌ・ツ区以南で検出した近世以降とみられる溝5条を検出した。中央部は遺構が少ない。他に遺構ではないが風倒木痕を十数箇所で検出した。いずれも遺物の出土がないため時期は不明である。

遺物は調査面積に比べて少なく、LⅡ型パンケースで第1次調査3箱、第2次調査1箱であった。

第2節　検出遺構・遺物

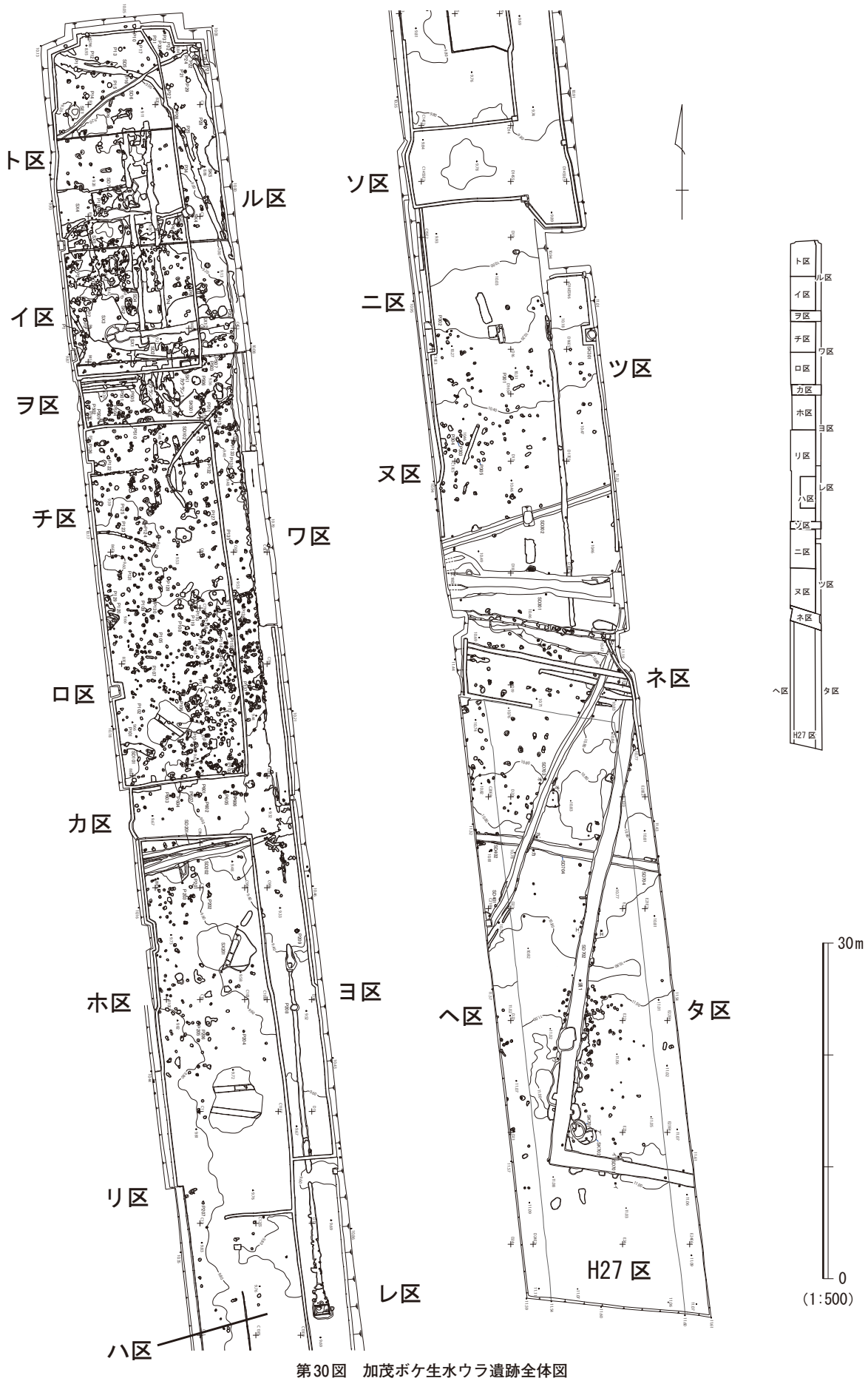
1. 掘立柱建物

SB1(第36図)　ト区B2グリッド付近で検出した。調査区北端に位置し、南西から北東に向けて低くなる地点にある。掘立柱建物は2間四方の総柱であるが、北側にのびる可能性が高い。北西－南東方向3.3ｍ、北東－南西方向2.9ｍ、柱間は1.4～1.8ｍとなっており不揃いである。北西－南東方向を主軸とした場合は西へ23°振っている。柱穴は径25～40㎝ほどの円形を呈し、深さは15～40㎝である。地山の青灰色シルトは軟弱で、10㎝ほど掘り下げると水が染み出てくる状況であった。柱穴からの出土遺物はないが、東西辺の延長3ｍの位置にSE1があり同時期の遺構であろう。

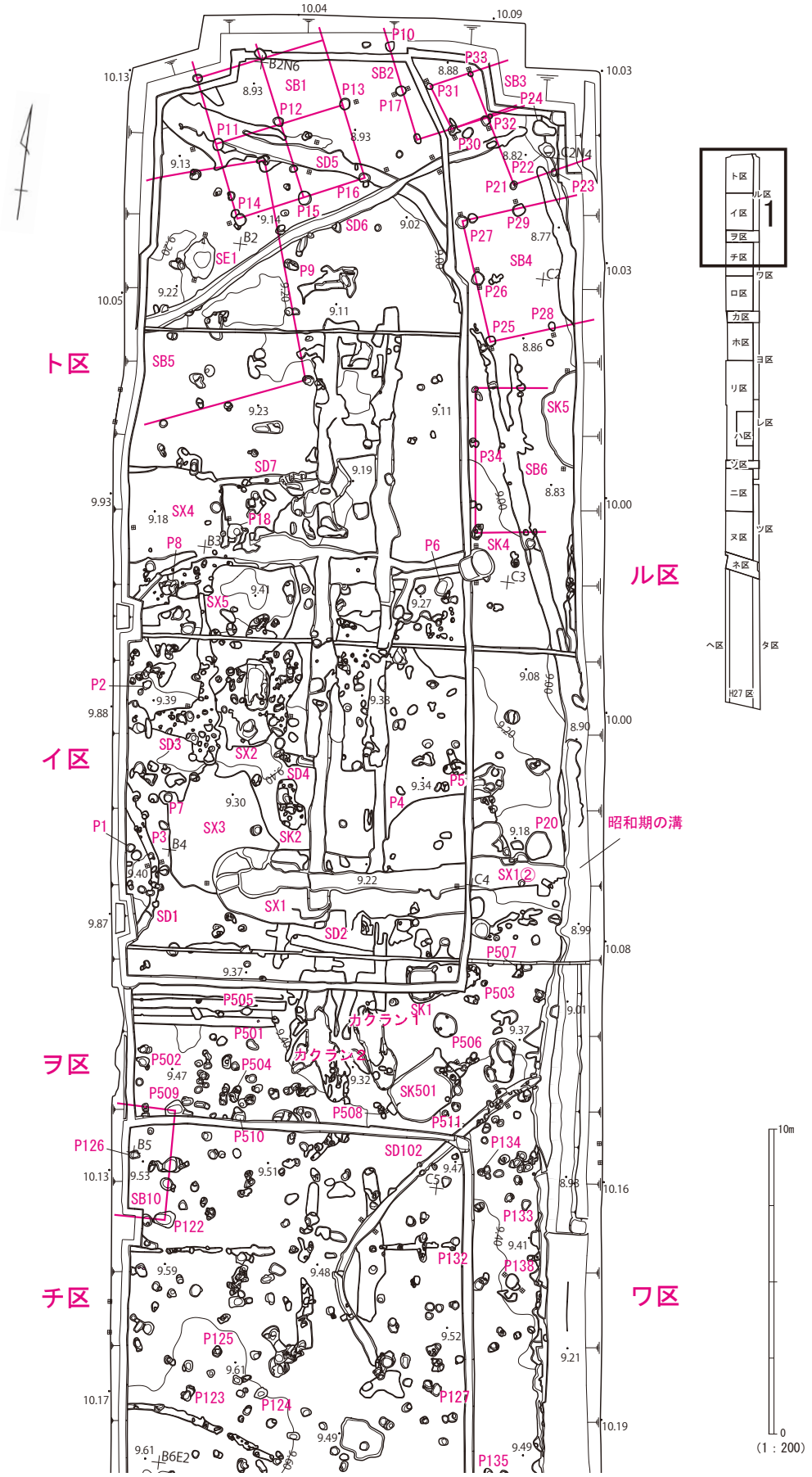
SB2(第37図)　ト・ル区B2グリッドで検出した。調査区北端の最も低い場所にある2間四方またはそれ以上の側柱建物とみられる。北東側が調査区外へのびる可能性があり、北東－南西方向3.2ｍ、北西－南東方向2.4ｍ、柱間は桁行方向1.6ｍ、梁行1.2ｍとなっている。柱穴は径30cmほどの円形または楕円形を呈し、深さは15～20cmである。

SB3(第37図)　ル区C2グリッド付近で検出した。SB2と部分的に重なる位置にあり、現場ではSB2の一部と考えていたが、測量図等で検討した結果、柱穴の配置が合わないことと柱穴の径が20㎝ほどでSB2のそれより一回り小さいことから別の建物と推定した。少し離れた位置にあるP21・23も同規模であり、建物の一部としての可能性がある。

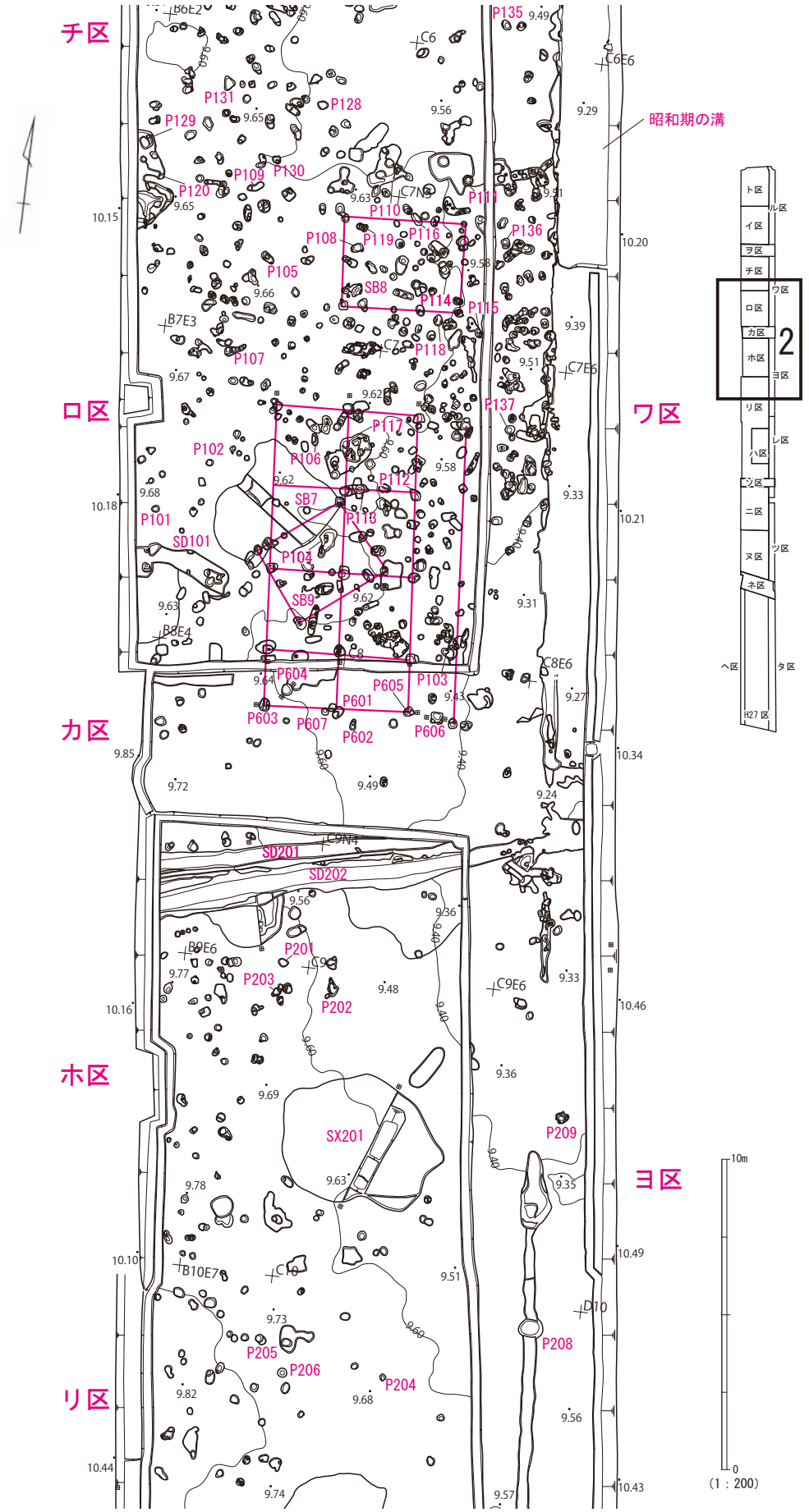
SB4(第37・48図)　ル区C2グリッド付近で検出した。調査区内では2×1間分を確認したが、東側が調査区外へのびる可能性がある。側柱建物とみられ南－北方向4ｍ、東－西方向2ｍ、柱間は2ｍとなっている。柱穴は北辺P27・29が径40㎝、他は30㎝ほどで円形を呈する。深さは北辺P27が32㎝、P29が18㎝、他は5～10㎝で南辺の2基が揃って浅くなっている。P29から12の弥生土器が出土しているが、建物軸はSB1などに近いことから混入とみられる。



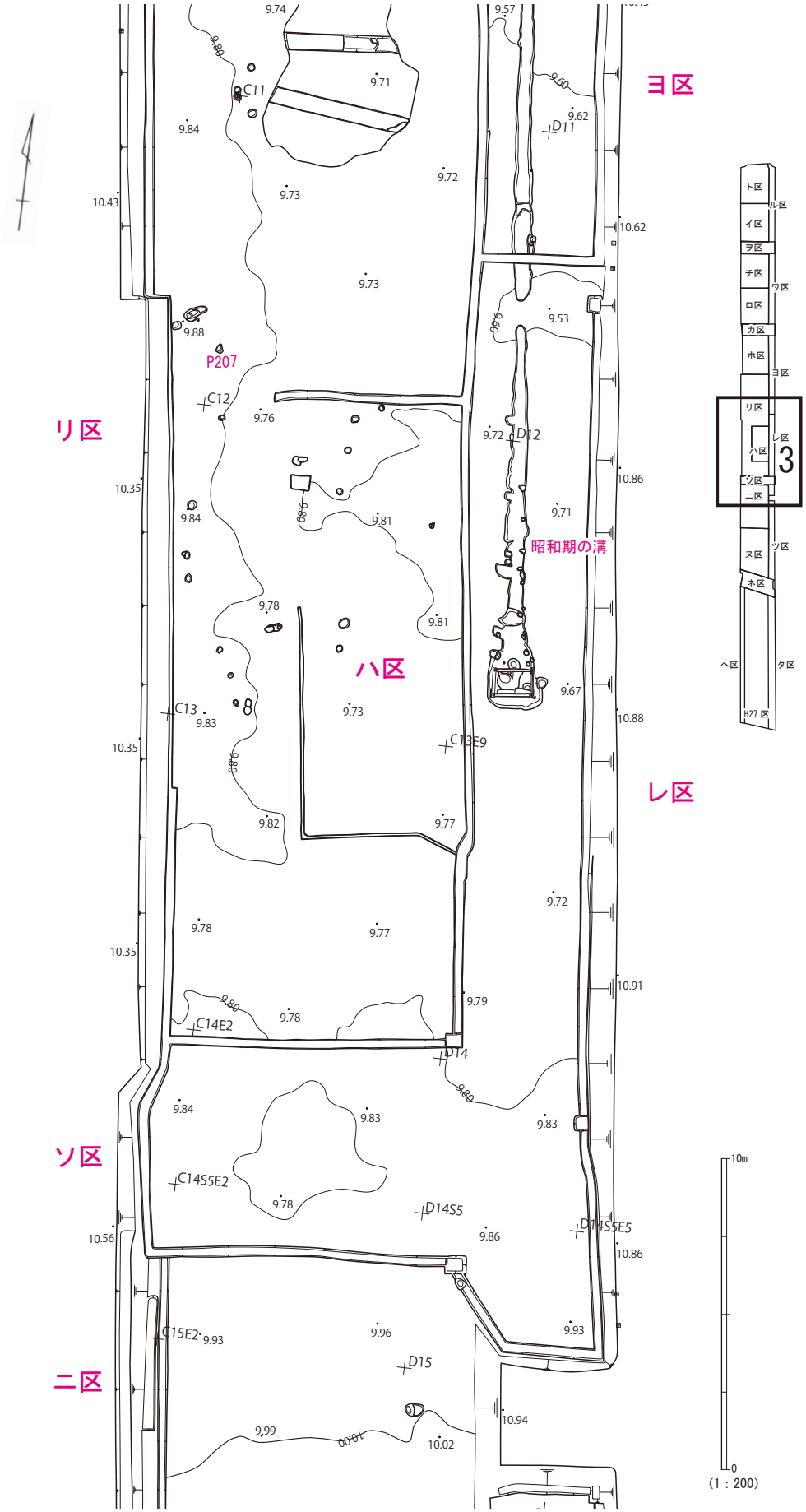
第30図　加茂ボケ生水ウラ遺跡全体図


ト区
ル区
イ区
ヲ区
チ区
ワ区
昭和期の溝
カクラン1
カクラン2
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
SB6
SB10
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD102
SE1
SX1
SX1②
SX2
SX3
SX4
SX5
SK1
SK2
SK4
SK5
SK501
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P123
P124
P125
P126
P132
P133
P134
P135
P138
P501
P502
P503
P504
P505
P506
P507
P508
P509
P510
P511
B2N6
C2N4
B2
C2
B3
C3
B4
C4
B5
C5
B6E2
10m
0
(1：200)

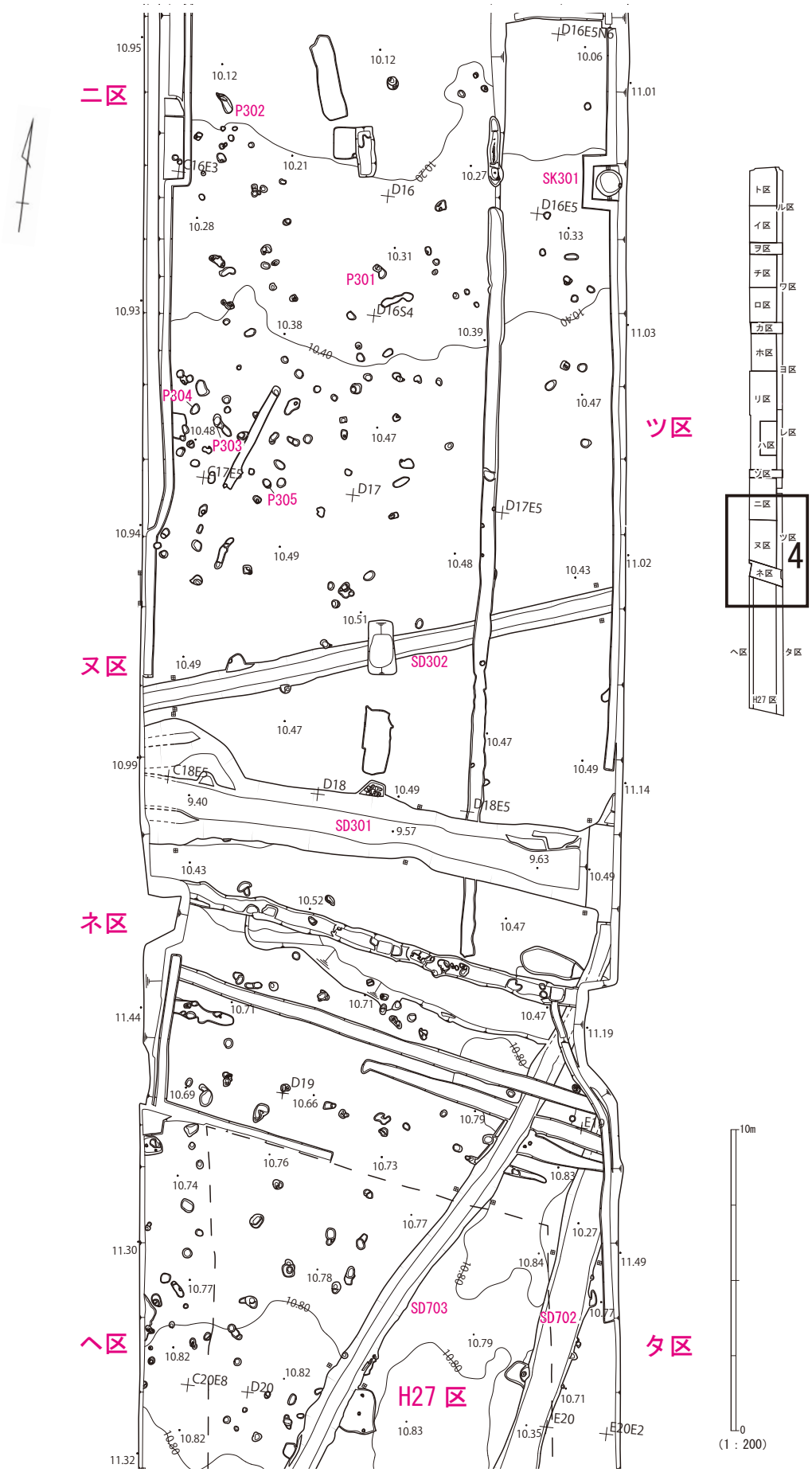
第31図　遺跡全体図1


チ区
ロ区
ワ区
カ区
ホ区
ヨ区
リ区
昭和期の溝
P135
P131
P129
P128
P130
P109
P120
P110
P111
P108
P119
P116
P136
P105
SB8
P114
P115
P107
P118
P137
P112
P102
P106
SB7
P101
SD101
P104
SB9
P604
P605
P103
P601
P603
P607
P602
P606
SD201
SD202
P201
P203
P202
SX201
P209
P205
P206
P204
P208
2
10m
0
(1：200)

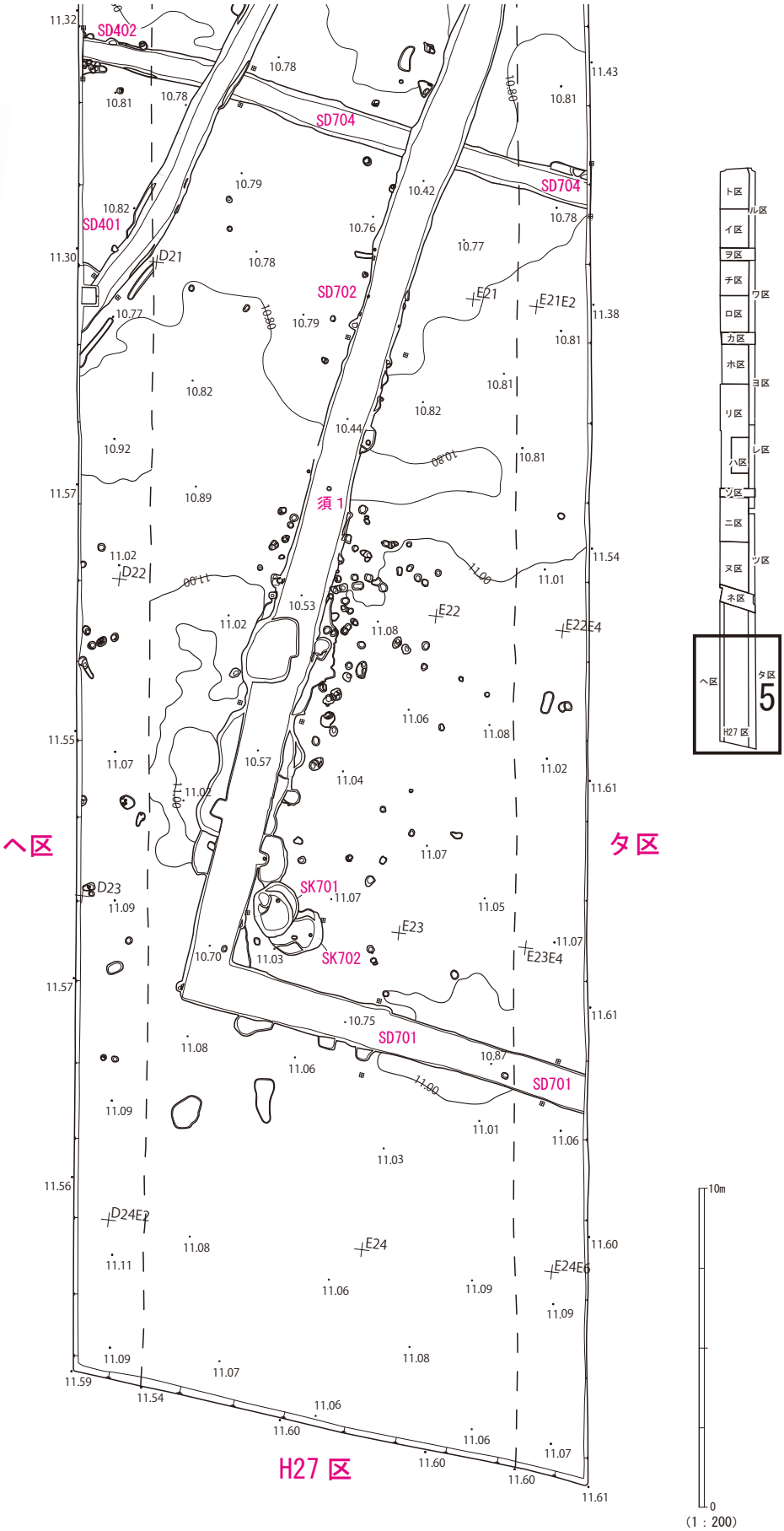
第32図　遺跡全体図２


ヨ区
リ区
ハ区
レ区
ソ区
二区
P207
昭和期の溝
C11
C12
C13
C13E9
C14E2
C14S5E2
C15E2
D11
D12
D14
D14S5
D14S5E5
D15
10m
0
(1：200)

第33図　遺跡全体図3


二区
ツ区
ヌ区
ネ区
へ区
タ区
H27 区
P302
P301
P304
P303
P305
SK301
SD302
SD301
SD703
SD702
D16
D16E5
D16S4
D17
D17E5
D18
D18E5
D19
C16E3
C17E5
C18E5
C20E8
D20
E20
E20E2
10m
0
(1：200)

第34図　遺跡全体図4


SD402
SD704
SD401
SD702
須１
SK701
SK702
SD701
D21
D22
D23
D24E2
E21
E21E2
E22
E22E4
E23
E23E4
E24
E24E6
へ区
タ区
H27 区
ト区
ル区
イ区
ヲ区
チ区
ウ区
ロ区
カ区
ホ区
ヨ区
リ区
レ区
ハ区
ヌ区
ツ区
ネ区
5
10m
0
（1：200）

第35図　遺跡全体図５

SB5（第38図）　ト区B2グリッド付近で検出した。２×３間の側柱建物とみられる。北西側が明確ではないが、北東－南西方向7.3ｍ、北西－南東方向５ｍ、桁行方向の柱間は北西から2.4ｍ、2.6ｍ、2.3ｍ、梁行は南辺で2.2ｍと2.8ｍになっている。北西－南東方向の主軸は、西へ16°振っている。柱穴は径26～36㎝ほどの円形または楕円形を呈し、深さは５～39㎝と不揃いである。

SB6（第38図）　ル区C3グリッド付近で検出した。１×３間分を確認した。北西－南東方向4.7ｍ、北西－南東方向1.6ｍ、柱穴は径20～34㎝ほどの円形または楕円形を呈し、深さは６～18㎝となっている。プラン東側は削平されているものとみられ定かではない。北西－南東方向を主軸とした場合は、西へ9°振っており、周辺の建物よりも離れた位置にあるSB7の軸に近い。

SB7（第39・40・49図）　ロ・カ区C8グリッド付近で検出した。２×４間の総柱建物である。南－北方向9.5ｍ、東－西方向4.5ｍ、北辺の梁行柱間は2.25ｍ、東辺の桁行柱間は北から2.5ｍ、2.6ｍ、2.6ｍ、1.8ｍとなっている。主軸は西へ5°振っている。柱穴は径26～36㎝ほどの円形または楕円形を呈し、深さは14～37㎝である。

東辺より1.5ｍほどの距離に明確ではないが柱列があり、庇または縁付きの建物だった可能性がある。P601から27の土師皿が出土しており、13世紀頃のものとみられる。

SB8（第41図）　ロ区C7グリッド付近で検出した。２×２間の側柱建物である。南－北方向2.8ｍ、東－西方向3.8ｍ。北辺の柱間は西から1.2ｍ、1.6ｍ、西辺で1.7ｍと2.1ｍになっている。柱穴は径30～42㎝ほどの円形または略円形を呈し、深さは８～24㎝である。

SB9（第41図）　ロ区C8グリッド付近で検出した。１×２間の側柱建物で、北東－南西方向3.15ｍ、北西－南東方向2.7ｍ、柱間1.35ｍとなっている。柱穴は径25～45㎝ほどの円形を呈し、深さは15～45㎝である。

SB10（第41・48図）　ヲ・ワ区B5グリッド付近で検出した。調査区西端に位置し、建物の大部分は調査区外にあるものと想定している。東辺とみられる２間分の柱穴は南－北方向3.7ｍ、柱間1.85ｍ、柱穴平面は60～70㎝ほどの略方形を呈し、深さは40～50㎝である。P122から15の弥生時代終末期頃の甕口縁部が出土している。

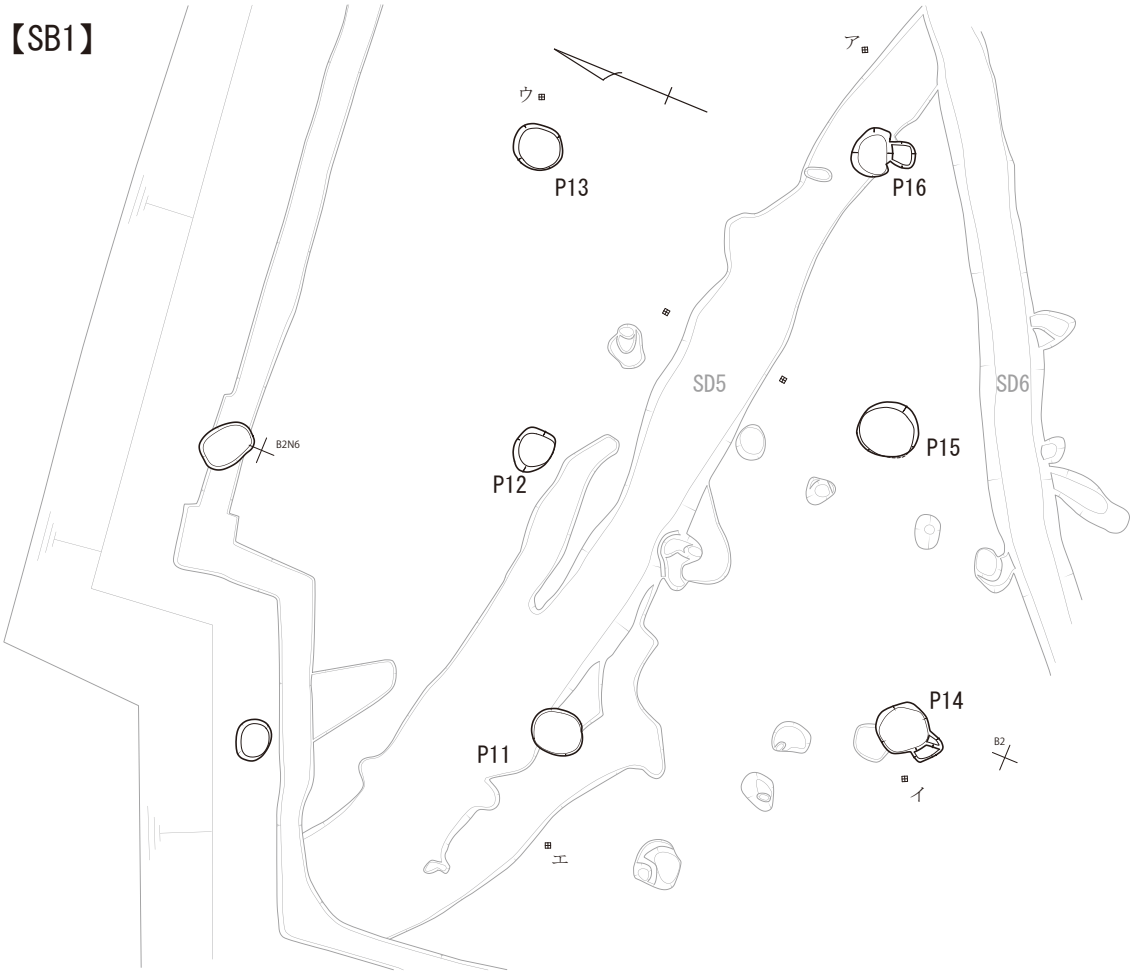
2. 井戸、土坑、小穴

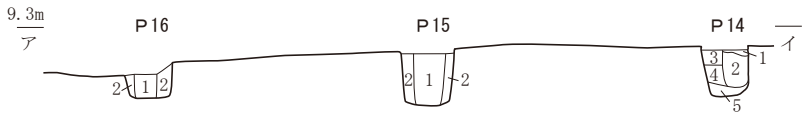
SE1（第42・48図）　ト区A3グリッドで検出した。平面は楕円形を呈し長さ1.3ｍ、最大幅１ｍを測る。深さは１ｍで地山の青灰色粘土を掘り抜き、その下の礫層にまで達している。水は穴底から湧くというよりも礫層全体から染み出てくる状態である。礫層部分の掘り込みは粘土層よりも狭くなっているが丸く掘られており、おそらく井戸枠として曲げ物などが据えられていたものとみられる。壁はほぼ直に立ち上がる。

最下位の層４にはヨシのような植物遺体が残存していた。９は非ロクロの土師皿で外面に漆とみられる塗膜があり、内面は指オサエ痕とナデが確認できる。13世紀代と考えられる。10は曲物の底板であり、９・11と共に層４から出土した。

SK1（第42図）　主にイ区B5グリッドで検出した。平面は少し偏った長楕円形を呈し長さ2.4ｍ、最大幅1.2ｍ、東側は少し狭くなっており幅0.7ｍを測る。西側は一辺１ｍほどの隅丸方形状に一段深くなっている。深さは隅丸方形状の部分でも16㎝ほどしかない。実測した遺物はないが弥生時代終末期から古墳時代初頭とみられる土器小片が出土している。

SK2（第42・48図）　イ区B4グリッドで検出した。平面は崩れた楕円形を呈し最大長1.7ｍ、最大幅0.86ｍ、全体的な深さは10㎝ほどしかないが、底面には小さな凹みが多くみられた。１の土師器皿は底面

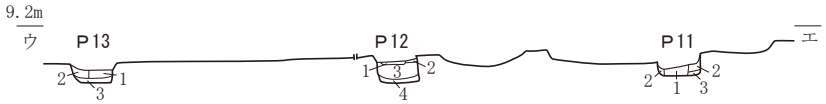




1 黒褐色粘質土（柱痕跡）
2 黒褐色粘質土（焼土粒極微量混）

1 黒褐色粘質土（柱根跡）
2 黒褐色粘質土

1 黒褐色粘質土
（灰白色土ブロック混）
2 黒褐色粘質土（柱痕跡か）
3 黒褐色粘質土
（灰白色土ブロック混）
4 黒褐色粘質土
（灰白色土ブロック混　軟質）
5 黒褐色粘質土
（灰白色土ブロック多量混　軟質）



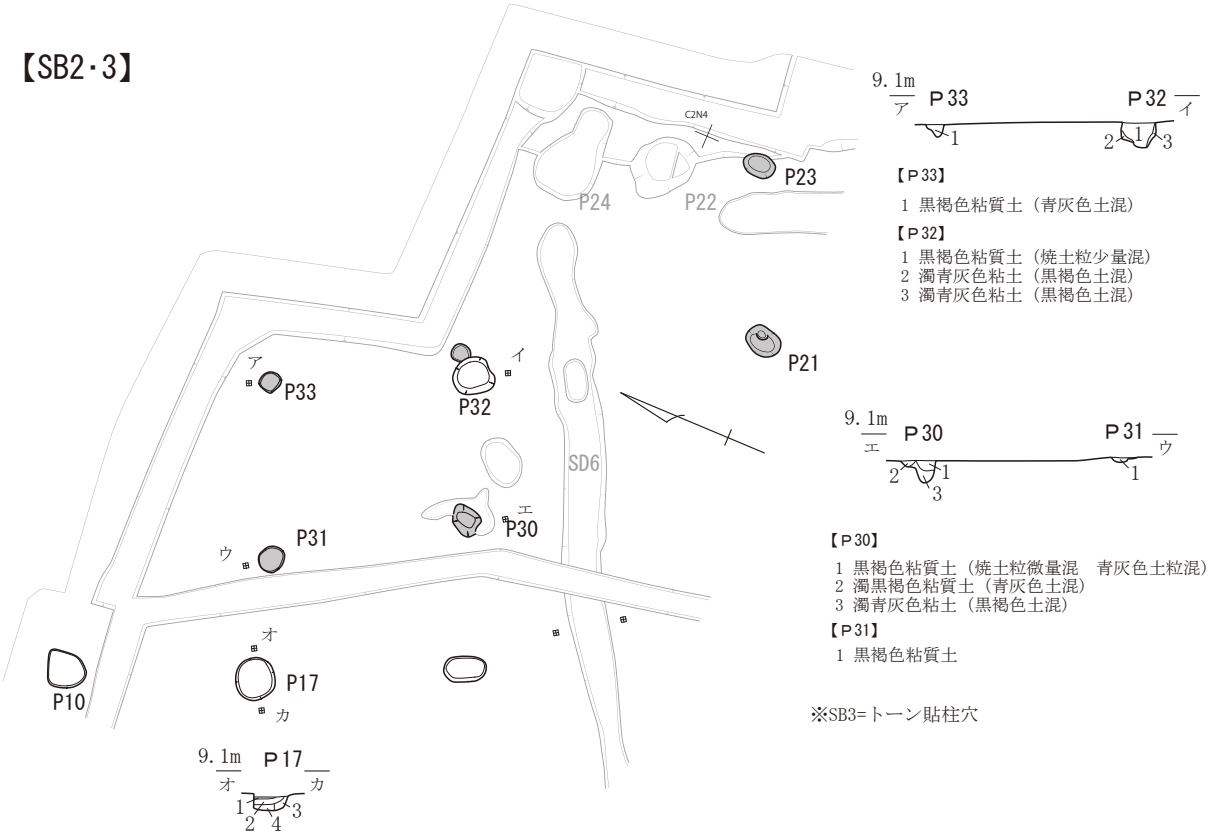
1 黒褐色粘質土
（灰白色土粒少量混）
2 黒褐色粘質土
（灰白色土粒多量混）
3 濁灰白色粘質土
（黒褐色土まばらに混）

1 黒褐色粘質土（柱痕跡か）
2 濁黒褐色粘質土
（灰白色土ブロック混）
3 濁灰白色粘質土
（褐色土　黒褐色土多量混　炭粒少量含む）
4 濁黒褐色粘質土
（灰白色土混）

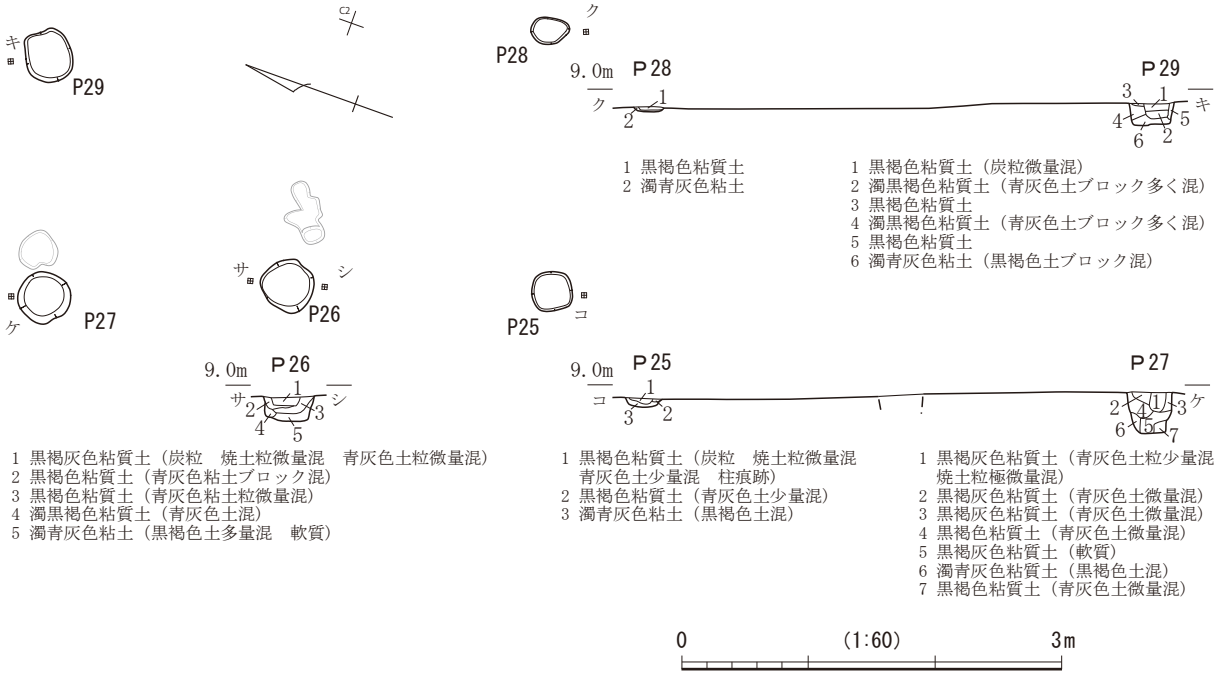
1 黒褐色粘質土（柱痕跡）
2 黒褐色粘質土
（灰白色土粒微量混）
3 黒褐色粘質土
（軟質　層1,2より褐色強い）

第36図　遺構図1(SB1)

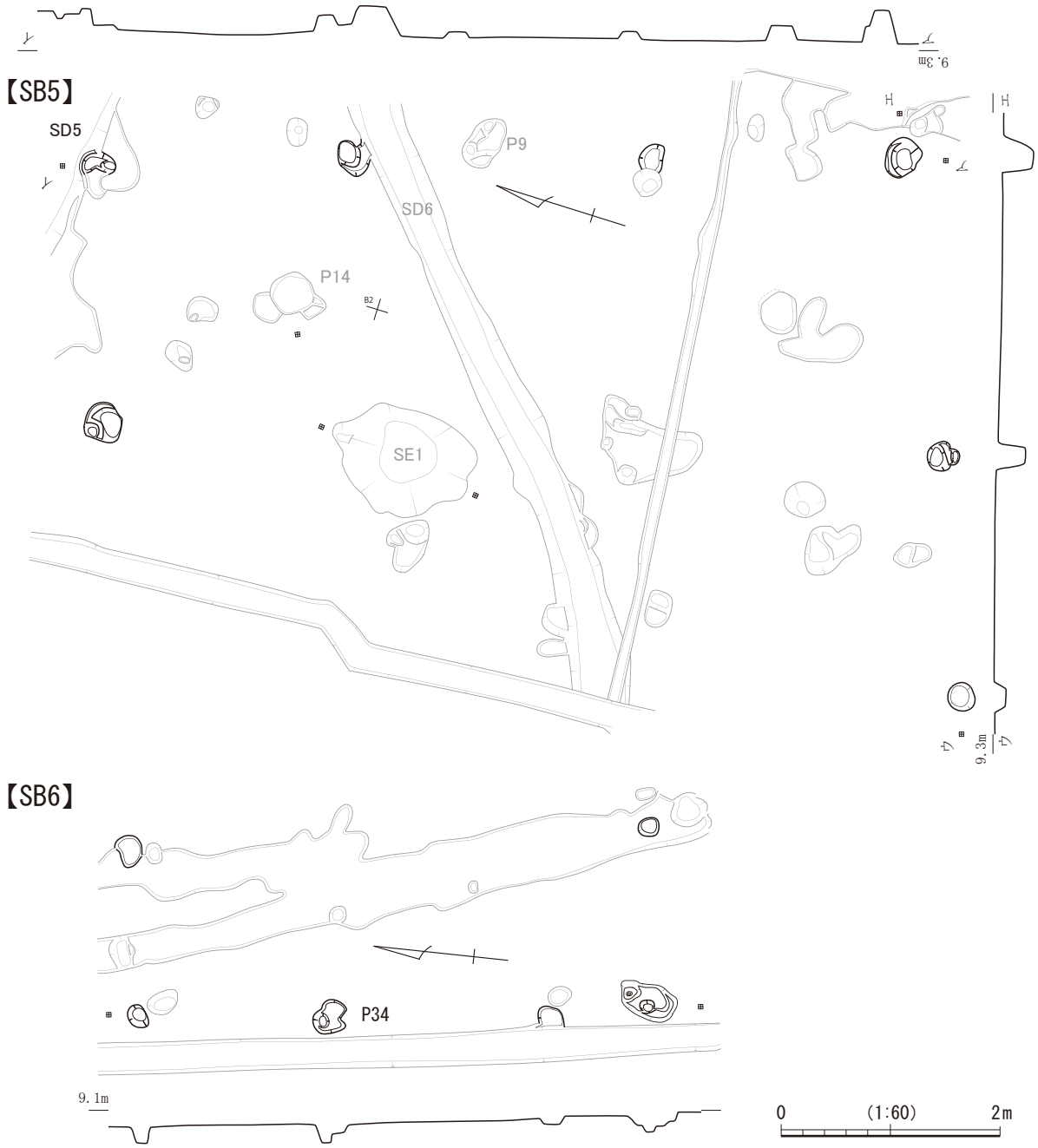
【SB2・3】



【SB4】



第37図　遺構図2(SB2・3・4)

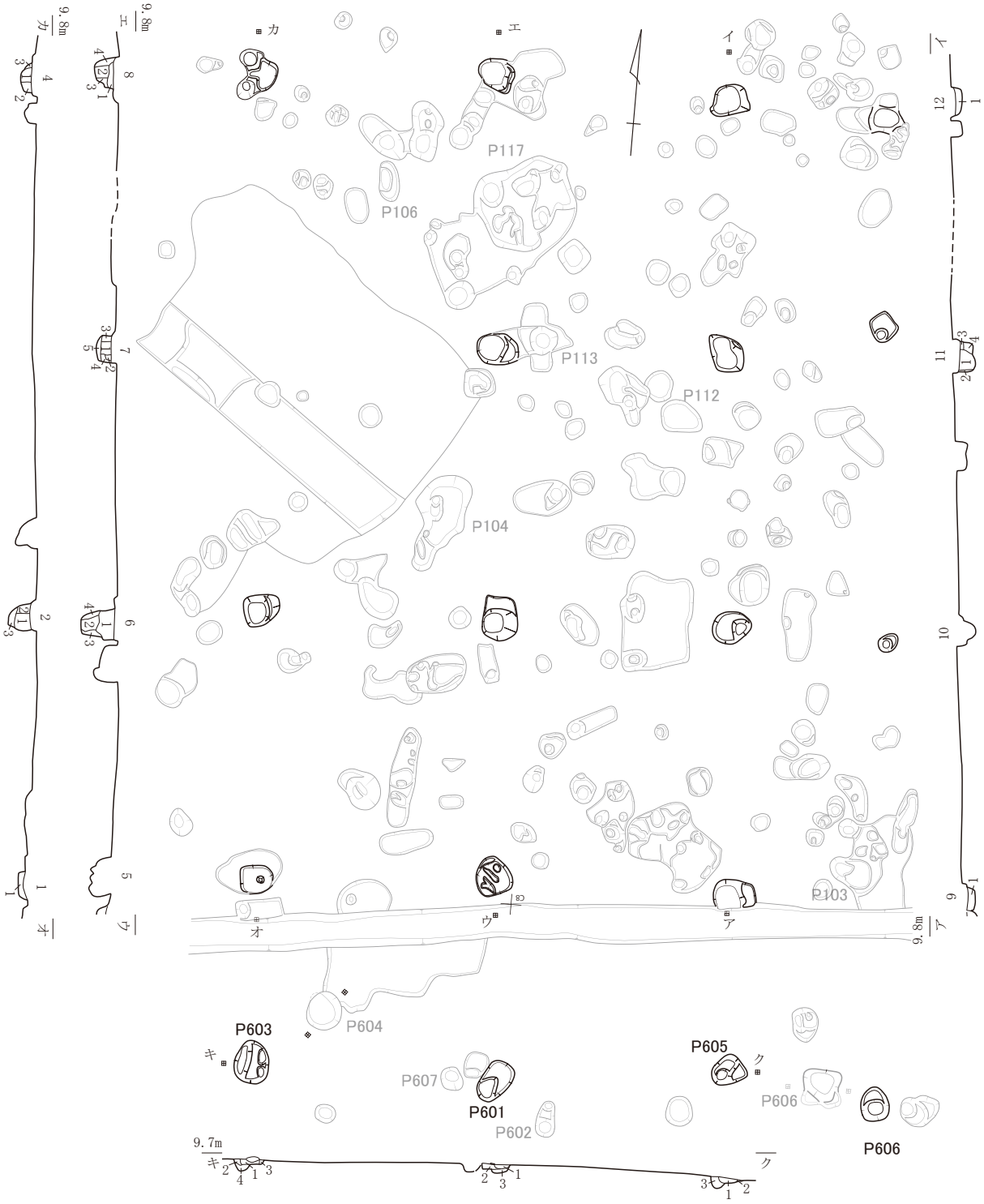


第38図　遺構図3(SB5・6)

に糸切痕が残る。11世紀代とみられる。

SK4(第42・48図)　ル区B3グリッドで検出した。平面は楕円形を呈し長さ1.15ｍ、最大幅1ｍ、深さは南西側が36㎝、北東側は一段低く45㎝を測る。土層断面では明確な切り合いなどを確認できなかったので、底は当初から段違いになっていたものとみられる。覆土は上から下まで大きな違いがみられず青灰色土ブロックが混じる黒褐色土が堆積する。2は装飾器台の盃部である。

【SB7】



【P603】

1 暗褐色粘質土
（炭粒　焼土粒
黄褐色土粒微量混）
2 暗褐色粘質土
（黄褐色土粒少量混）
3 暗褐色粘質土
4 濁黄褐色粘質土
（黒褐色土混）

【P601】

1 暗褐色粘質土
2 暗褐色粘質土
（層1より暗い色調　黄褐色土ブロック少量混）
3 濁黄褐色粘質土（暗褐色土混）

【P605】

1 黒褐色粘質土（炭粒微量混）
2 黒褐色粘質土
（炭粒微量混　青灰色土ブロック少量混）
3 黒褐色粘質土（青灰色土ブロック少量混）

0　(1:60)　3m

第39図　遺構図4(SB7)

【SB7-1】
1 黒褐色土（黄褐色土ブロック微量混）

【SB7-2】
1 黒褐色土（炭粒混）
2 濁暗褐色土（黄褐色土混）
3 濁黄褐色土（黒褐色土混）

【SB7-4】
1 黒褐色土（黄褐色土ブロック微量混　軟質）
2 暗褐色土（黄褐色土ブロック微量混）
3 黒褐色土（黄褐色土ブロック微量混）

【SB7-6】
1 黒褐色土（黄褐色土粒少量混）
2 暗褐色土（黄褐色土粒微量混　軟質）
3 濁暗褐色土（黄褐色土ブロック混）
4 濁暗褐色土（黄褐色土ブロック混）

【SB7-7】
1 暗褐色土（黄褐色土粒微量混　軟質）
2 暗褐色土（黄褐色土粒微量混）
3 暗褐色土（黄褐色土粒微量混）
4 褐色土（黄褐色土粒微量混）
5 濁黄褐色土（暗褐色土混）

【SB7-8】
1 黒褐色土（黄褐色土粒微量混）
2 暗褐色土（軟質）
3 暗褐色土（黄褐色土粒微量混）
4 暗褐色土（黄褐色土粒微量混）

【SB7-9】
1 黒褐色土

【SB7-11】
1 暗褐色土（黄褐色土粒微量混）
2 暗褐色粘質土
3 暗褐色土
4 濁黄褐色土（暗褐色土混）

【SB7-12】
1 暗褐色土

第40図　遺構図5(SB7)

SK5(第42図)　ル区C3グリッドで検出した。東側が調査区外にあるが、検出できた範囲では長さ3.2ｍ、深さ34㎝を測る。基盤の礫層を底面としている。覆土の下半は青灰色土で埋め戻され、上半は青灰色土のブロックが混じる黒褐色土が堆積する。時期は遺物が出土していないため定かではないが、上半の堆積土はSK4のそれと青灰土ブロックの混じり方などが似ている。

SK501(第42・48図)　ヲ区B5グリッドで検出した。平面は隅丸方形を呈し長さ2.28ｍ、幅1.66ｍを測る。北東辺に小段がある。深さは18㎝を測る。遺物は3～8までの土器が出土しており、弥生時代終末期頃のものとみられる。

SK301(第42図)　ツ区D16グリッドで検出した。平面は円形を呈し径0.86ｍ測る。壁はほぼ直に立ち上がり、底は平らである。底面までの深さは48㎝を測り、形状から井戸ともみられたが水が染みてくることはなかった。出土遺物がなく、周辺に遺構もないため時期や性格を決めかねる。

SK701(第43図)　H27区D23・D24グリッドで検出した。平面は楕円形を呈し長さ1.7ｍ、幅1.4ｍ、深さ38㎝を測る。断面は緩やかな椀形をしている。SK702を切って構築している。51は須恵器の双耳瓶であり9世紀頃とみられる。

SK702(第43図)　H27区D23・D24グリッドで検出した。平面は楕円形を呈し長さ1.7ｍ、幅1.3ｍ、深さ26㎝を測る。SK701に北西部を切られる。

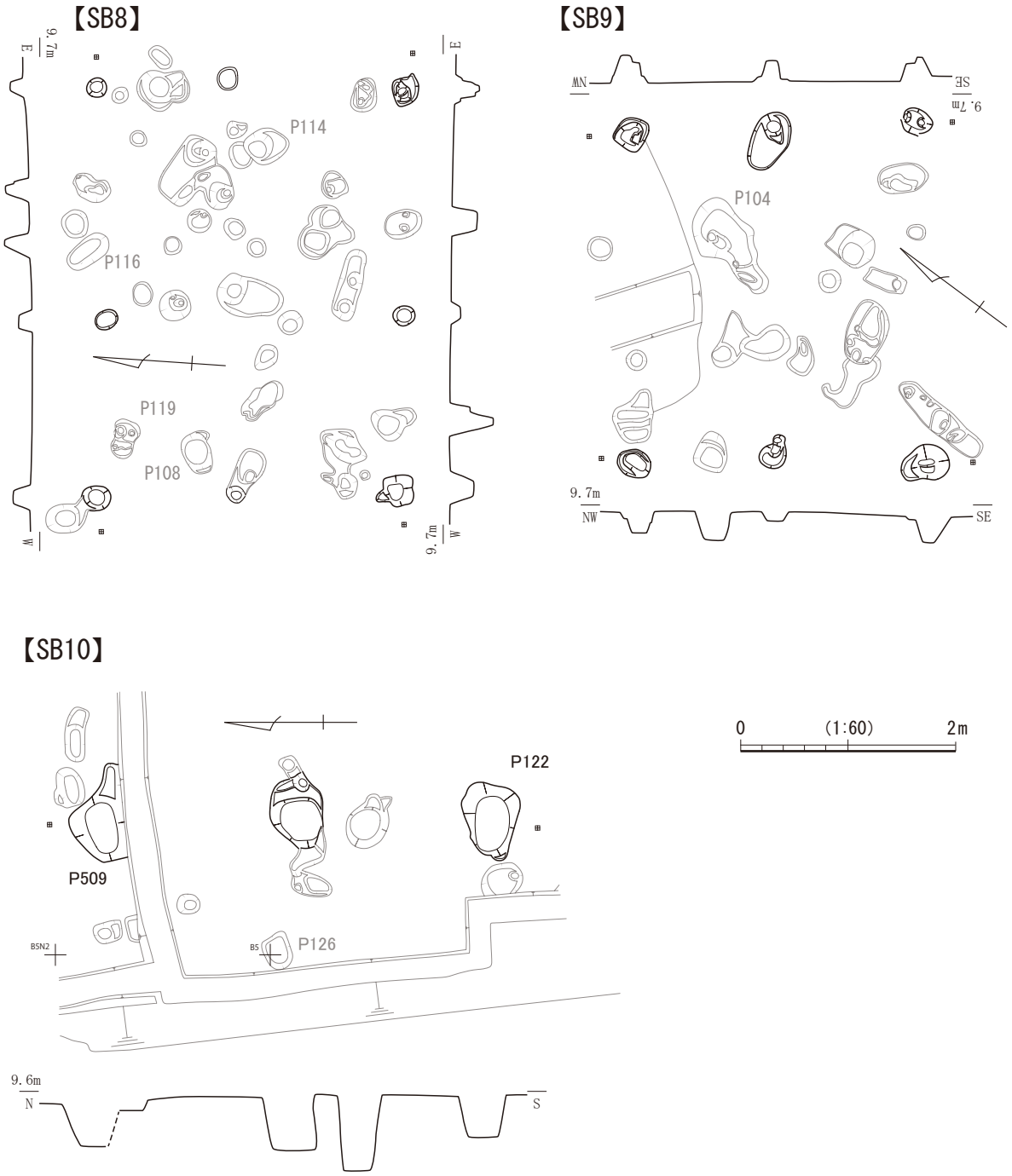
P124(第43・48図)　チ区B6グリッドで検出した。平面は崩れた楕円形を呈し径0.46ｍ、深さ39㎝を測る。16の平瓦は灰白色で厚さ3.1㎝。凹面に布目、凸面に格子の叩きがみられる。焼成不良で摩耗している。17の須恵器杯は8世紀後半頃とみられる。18は土師器甕。19の砂岩の砥石は、下部が膨らんだバチ状で上端と下端隅部が欠損している。四面とも使いこまれており滑らかである。

P138(第43図)　ワ区C6グリッドで検出した。平面は少し崩れているが円形を呈し径0.46ｍ、深さ40㎝を測る。柱痕跡を確認したが、周辺では同規模の柱穴を確認できなかった。

P208(第43・50図)　ヨ区C11グリッドで検出した。平面は楕円形を呈し径0.88ｍ、深さ18㎝を測る。底に玉砂利が敷かれており、59の寛永通宝が玉砂利下の穴底中央に1枚だけ置かれていた。上部は溝と重複する。溝の開削時期は判断できなかったが、最終的に埋められた時期は昭和である。

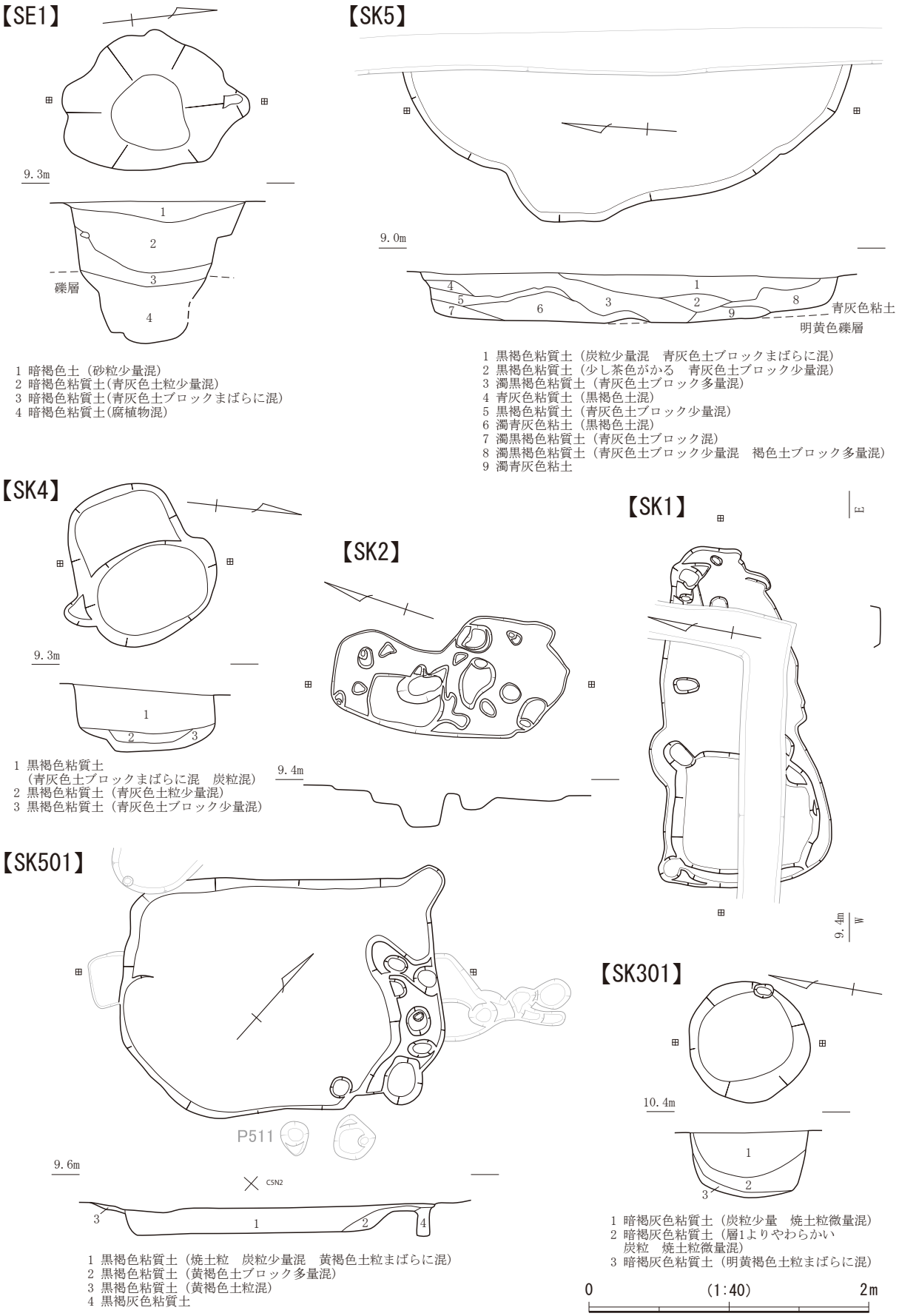
P506(第43・49図)　ヲ区B5グリッドで検出した。平面は楕円形を呈し長径0.86ｍ、短径0.64ｍ、深さ10㎝を測る。25・26の高坏脚部は古墳時代中期頃とみられる。

P604(第43図)　カ区B9グリッドで検出した。平面は円形を呈し径0.38ｍ、深さ18㎝を測る。SB7に近いことから建物柱穴の可能性を考えたがプランを復元できなかった。

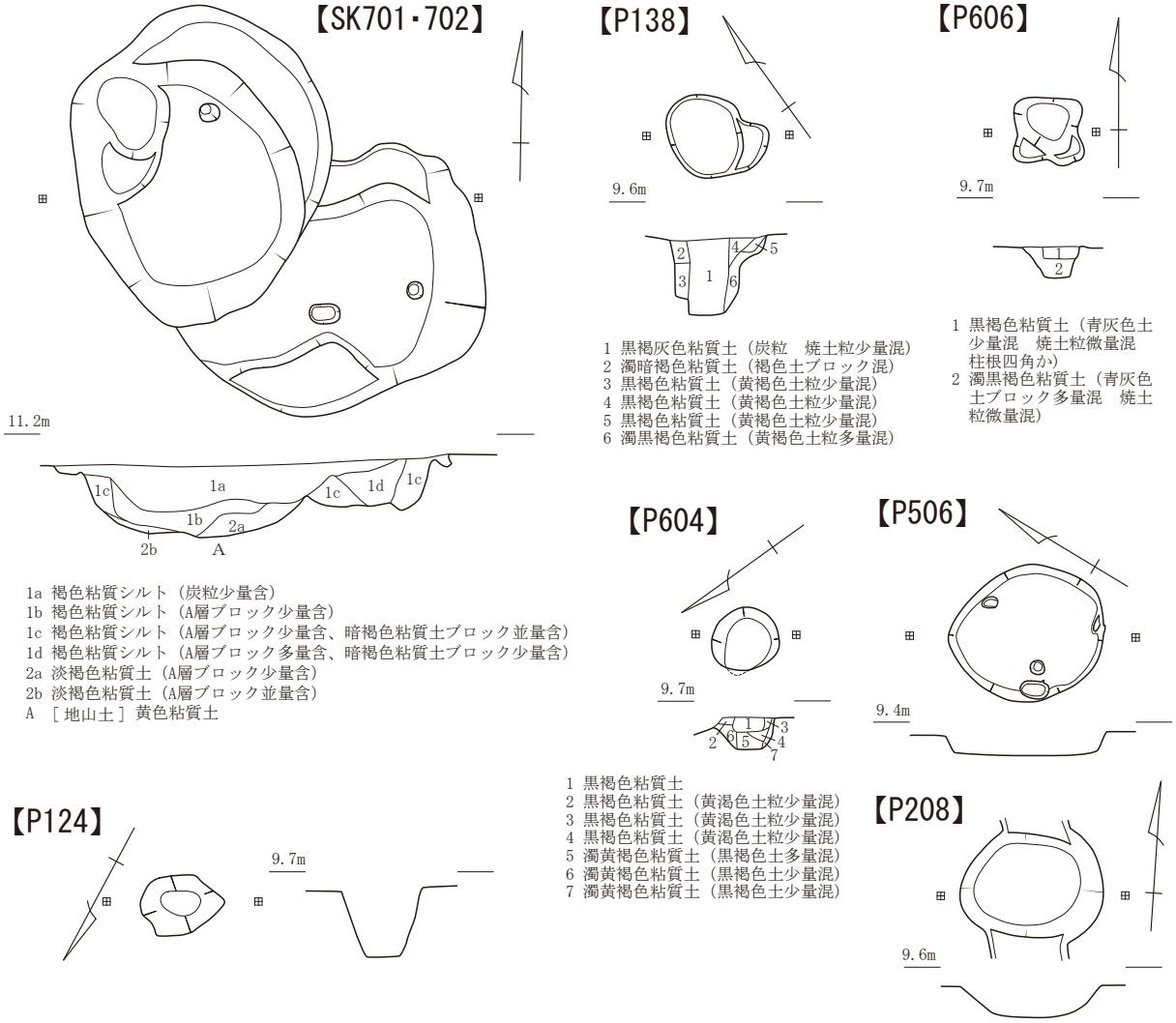


第41図　遺構図6(SB8・9)

P606(第43図)　カ区C9グリッドで検出した。平面は略方形を呈し長さ0.36ｍ、深さ18㎝を測る。SB7に近いことから建物柱穴の可能性を考えたがプランを復元できなかった。



第42図　遺構図7(SE・SK)



第43図　遺構図8(SK・P・SD)

3. 溝

SD1(第43図)　イ区A4・A5グリッドで検出した。イ区の西側にあり、弧状にのびて両端は調査区外へと続いている。幅0.25ｍ前後、深さ10㎝を測る。

SD5(第43図)　ト区B2グリッドで検出した。ル区の昭和期の溝から分岐して北西方向にのびる。1.2～２ｍほど、深さ10㎝前後である。

SD6(第43・49図)　ト区B2グリッド付近で検出した。南西－北東方向に緩く蛇行しながらのびており、西側は調査区外に続くが、東側は浅くなって終わっている。幅0.3ｍほど、深さは最も深い地点で30㎝を測る。30は高坏の脚部、31は甕の底部で弥生時代終末期から古墳時代初頭頃のものとみられる。

SD102(第43・49図)　チ・ヲ区B6グリッド付近で検出した。「し」字状を呈し、北東－南西方向に9ｍほどのびてから南西端で緩やかに北西－南東方向に向きを変えている。溝幅0.4ｍ、深さ20㎝を測る。本遺構の南西側に逆向きにのびるとみられる溝がある。33は甕の口縁部で古墳時代初頭頃のものとみられる。

SD201(第43図)　ホ区B9・C9グリッドで検出した。東西方向より15°北に振っている。幅0.6ｍ、最も深い地点で深さ16㎝である。東に行くにしたがって浅くなり、カ区では検出できなかった。

SD202(第43・49図)　ホ・カ区B9・C9グリッドで検出した。ホ区の西端からカ区の東まで調査区を横断しており、27ｍほどを検出した。SD201と近接しており同方向にのびる。西側は残りがよく、上幅1.35ｍ、下幅0.5ｍ。断面は逆台形を呈し、最も深い地点で深さ50㎝あるが、東に行くにしたがって浅くなりカ区では深さ10㎝ほどとなり、最終的には昭和期の溝に切られる。遺物は34の珠洲焼擂鉢と図示していないが近世頃の遺物も出土している。

SD301(第44図)　ヌ・ツ区C19・D19グリッドで検出した。東西方向より3°南に振っている。調査区内で延長16ｍを確認した。幅２～2.4ｍ、深さは東端86㎝、西端100㎝で、東から西に流水していたとみられる。東端でSD703とぶつかるが、湧水が多く壁が崩落する可能性が高かったことから東端部の掘削は断念した。遺構検出の状況では明確な切り合いを確認できなかった。

西端部は北側に大きく膨らんでいる。断面では一度埋まったあとに掘りなおされた形跡がうかがえる。覆土は下位に腐植物を多く含み、上位は砂と粘土の互層堆積となっている。

中央部の北岸で握り拳から赤子頭大の石7個が溝に接して置かれていたが関係は不明である。

SD302(第44図)　ヌ・ツ区C18・D18グリッドで検出した。東西方向より15°北に振っている。調査区内で延長16ｍを確認したが、両端は調査区外へと続いている。幅0.8～１ｍ、最も深い地点で深さ120㎝である。底面は平らで幅0.3～0.4ｍ、レベルに顕著な違いはみられない。地山は検出面より１ｍまで黄褐色粘質土で、その下は砂礫層となっている。この境付近から水が染み出てきたことにより、掘削後すぐに下部壁面の大部分が崩落した。

SD402・704(第45・49・50図)　ヘ区SD402とタ・H27区SD704は一連の溝であり、C21・D21・E21グリッドで検出した。東西方向より9°南に振っている。調査区内で延長16.5ｍを確認したが、両端は調査区外へと続いている。上幅0.7～１ｍ、下幅0.6ｍ。断面は箱型でしっかりと掘られている。深さは変化に乏しいが、東端80㎝、西端88㎝で西に向けて標高が下がっている。

地山は検出面より80㎝まで黄褐色粘質土で、その下は砂礫層となっている。この境付近からは水が染み出てきた。覆土は上位に暗褐～黒褐色系の土壌が堆積しており、下位の褐色系土と違いがあることから掘り直しが行われたとみられる。

本遺構はSD702と703に切られており、近辺の溝の中では最も古い時期のものとみられる。遺物は第1次調査で36と37、第2次調査で58の土師器が出土しているが混入とみられる。

SD701・702(第45・46・50図)　第１次調査では方向と深さ等の違いから別々の溝と見ていたが、第２次調査で直角に折れてつながることを確認した。そのため東西方向部分はSD701、南北方向部分をSD702としている。SD701はH27区D24・E24グリッド、SD702はタ区E20グリッドからH27区D24グリッドにかけて検出した。

SD701は東西方向より10°南に振っている。調査区内で延長13ｍを確認しており、西端はSD702の南端につながり、東端は調査区外へと続いている。上幅1.2 ～ 1.55ｍ、下幅1 ～ 1.35ｍを測る。SD702は調査区内で延長44ｍを確認しており、南端はSD701の西端につながり、北端は調査区外へと続いている。上幅1.35 ～ 1.45ｍ、下幅1.1 ～ 1.4ｍを測る。深さはSD701の東端が最も浅く8㎝、屈曲部で28㎝、SD702の北端が48㎝となっており、北に向けて段々と深くなっている。基本的に断面は箱掘りでしっかりと掘られている。

遺物は第１次調査では出土せず、第２次調査で52 ～ 56が出土しており、52は坏の転用硯で内底と外底に墨痕が残る。古代の遺物を出土したが、溝の軸は近隣の田畠の区画と似ており近世以降の所産と考えた方がよいだろう。

SD401・703(第46・49・50図)　ヘ区SD401とネ・H27区SD703は一連の溝であり、D19グリッドからC22グリッドにかけて検出した。僅かに蛇行しつつ、北東－南西方向にのびる。南北方向より24°南に振っており、調査区内で延長30ｍを確認した。北端はSD301に合流するとみられ、南端は調査区外へと続いている。上幅0.6 ～ 1ｍ、下幅0.4 ～ 0.5ｍ。断面は箱掘りでしっかりと掘られている。深さは南端45㎝、北側60㎝で北に向けて標高が下がっている。

遺物はSD401の中ほどの深さから35の砂目積の唐津皿、H27区SD703から57の越前焼とみられる擂鉢が出土している。この２点以外に出土遺物はないため、遺構の時期を決めかねるが近世以降の所産と考えた方がよいだろう。

4. その他

SX1(第47図)　イ区B5グリッド付近で検出した。大型の土坑が連結したようなものと見ていたが、掘り下げると中央やや北寄りの部分が東西方向にのびる溝となっていることがわかった。イ区の調査終了後、ル区の調査時点で東端の昭和期の溝につながることが判明した。

SX2(第47・49図)　イ区B4グリッドで検出した。土坑のようなものと見ていたが、掘り下げると風倒木痕上の凹みであることがわかった。遺物は38・39の古墳時代中期頃とみられる高坏脚部や未実測の細片が出土している。風倒木痕自体からの出土遺物はない。

SX4(第47・49図)　ト区A3グリッドで検出した。南北方向３ｍ、東西方向は調査区にのびるため３ｍ以上、深さ18㎝の竪穴状遺構である。底面はほぼ平らで、壁は緩やかな立ち上がりである。

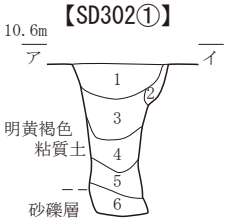
42は器壁が薄く胎土は瓦質のような土器である。小片のため定かではないが、土師皿と推定した。他に40・41の弥生時代終末期の土器も出土しているが、遺構の形状から中世のものと考えられる。

SX201(第47図)　ホ区C10グリッドで検出した。長さ５ｍ、幅4.5ｍの風倒木痕である。平面は円環状に黒色土が巡り、その中央部に地山の黄褐色土が堆積する。

SX201といくつかの風倒木痕を断ち割ってみたが、遺物の出土は皆無であった。風倒木痕の多くは円環または三日月状に黒色土があり、中央部に地山の黄褐色土が堆積する特徴がみられた。

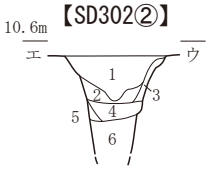
【SD301・302】

【SD302①】



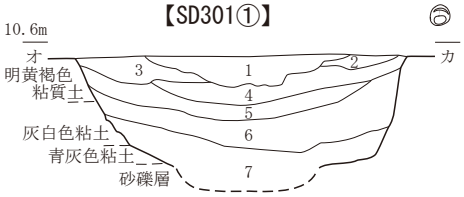
1 黒褐灰色土（炭粒少量混）
2 濁黒褐灰色土（黄褐色土多量混）
3 黒褐灰色粘質土（黄褐色土粒混）
4 暗褐灰色粘質土（軟質）
5 暗褐灰色粘質土（黄褐色土ブロック多量混）
6 濁褐色粘質土（暗褐色土混）

【SD302②】



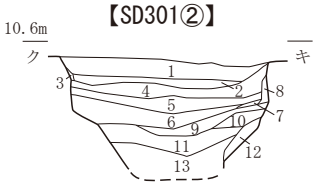
1 黒褐灰色土（炭粒微量　黄褐色土粒まばらに混
小石少量混）
2 暗褐灰色土
3 暗褐灰色土（層2より明るい　黄色土粒少量混）
4 暗褐灰色土（軟質　水気多）
5 暗褐灰色土（黄色土粒少量混）
6 暗褐灰色粘質土（非常にやわらかい）

【SD301①】



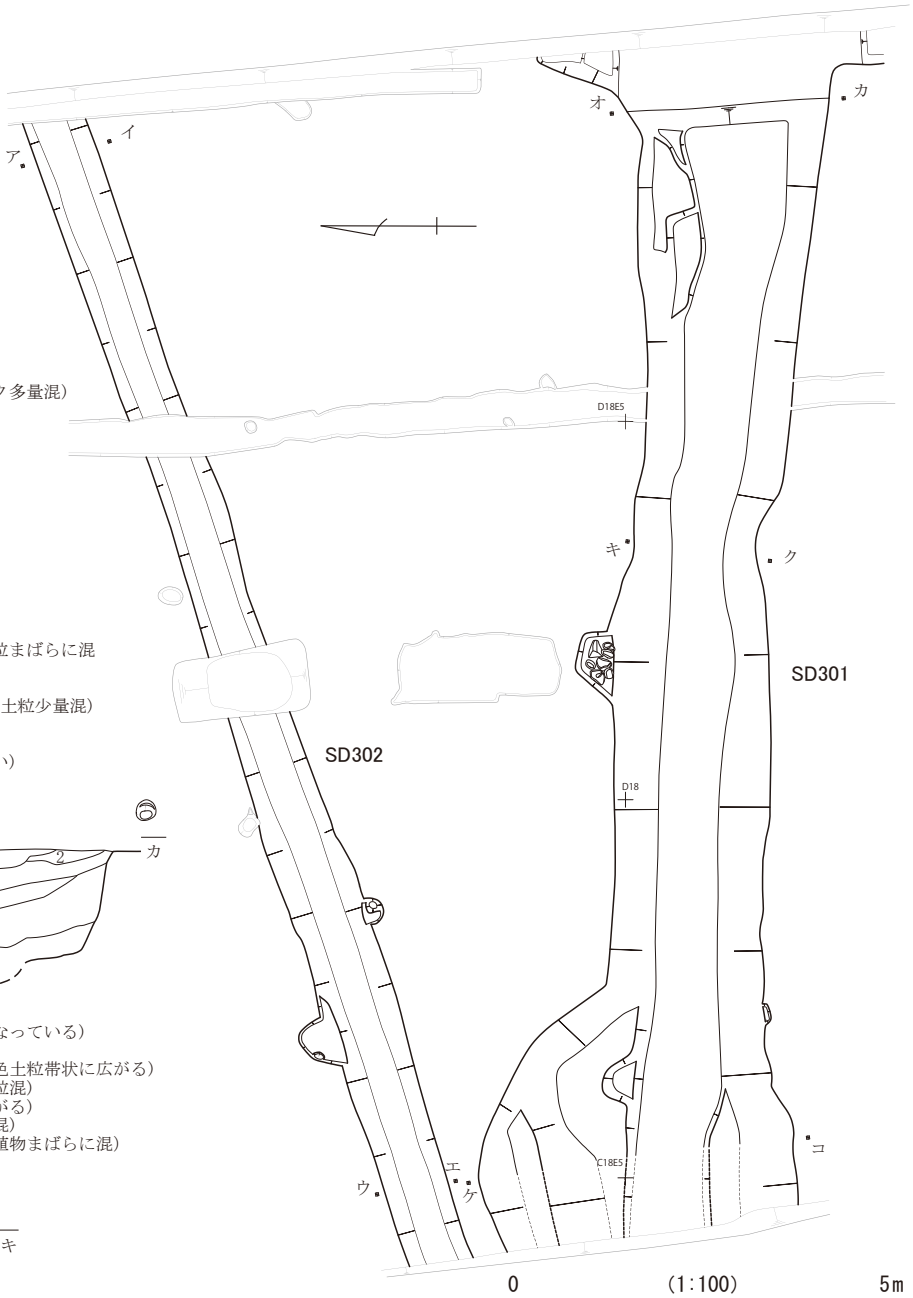
1 褐色砂質土（暗褐灰色土と互層になっている）
2 暗褐灰色土（褐色砂混）
3 暗褐灰色土（褐色砂少量混　黄褐色土粒帯状に広がる）
4 暗褐灰色土（黄色土粒　灰白色土粒混）
5 暗褐灰色土（灰白色土粒帯状に広がる）
6 黒褐灰色粘質土（灰白色土粒少量混）
7 黒褐灰色粘質土（水分多く含　腐植物まばらに混）

【SD301②】

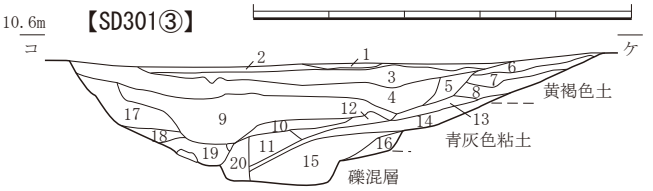


1 暗褐灰色土（炭粒微量混　帯状の砂が不規則に入る）
2 暗褐色土（層下部に帯状の砂層(黄褐土粒混)入る）
3 濁黄褐色土
4 黒褐灰色粘質土（一部帯状の砂入る）
5 黒褐灰色粘質土（黄褐色土粒混　層より少し明るい色調）
6 黒褐灰色粘質土
7 黒褐灰色粘質土（軟質）
8 濁黒褐灰色粘質土（黄色土混）
9 暗褐灰色粘質土（黄褐色土粒多量混）
10 暗褐灰色粘質土
11 暗褐灰色粘質土（黄褐色土ブロック径1～2cm大と
黄褐色土粒多量混）
12 濁オリーブ灰色粘質土(暗褐色土混)
13 暗褐色粘土(炭粒微量混)

0　(1:60)　3m

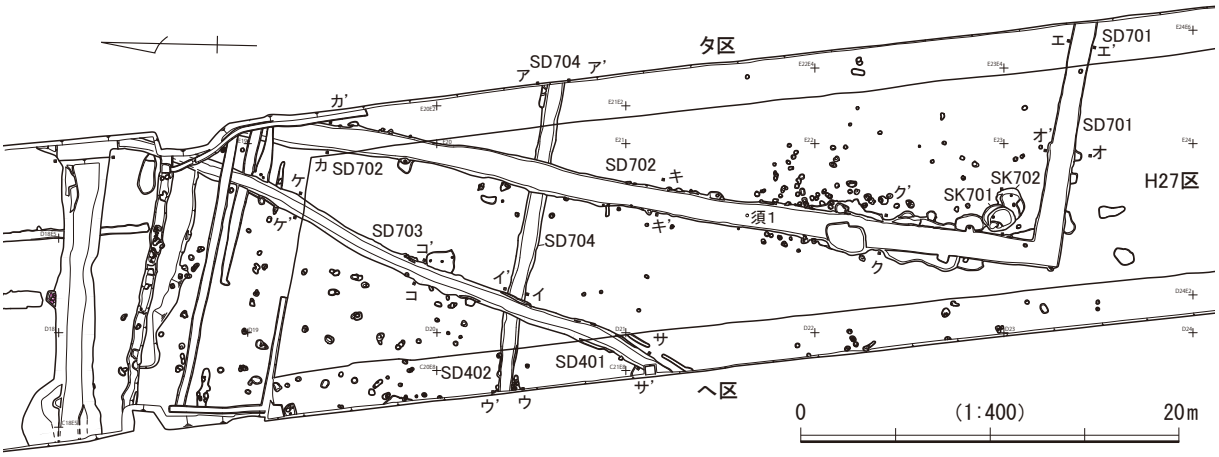


【SD301③】

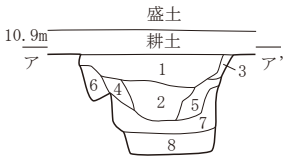


1 濁黄褐色土（暗褐色土多量混）
2 暗褐灰色土
3 暗褐色土（帯状の砂層入る）
4 黒褐灰色粘質土
5 暗褐色粘質土（黄褐色土粒混）
6 濁暗褐色土（黒褐色土ブロック
黄褐色土粒多量混）
7 濁暗褐色土（黄褐色土多量混）
8 暗褐灰色土（黄褐色土少量混）
9 暗褐灰色粘質土（焼土粒極微量混）
10 褐灰色粘質土（黄褐色土ブロック少量混）
11 褐灰色粘質土（黄褐色土ブロック少量混
やわやかい　層の下部に腐植物溜る）
12 濁褐灰色粘質土（黄褐色土多量混）
13 濁褐灰色粘質土（黄褐色土多量混
黒褐灰色土混）
14 褐灰色粘質土（黄褐色土ブロック混
層の下部に腐植物溜る）
15 褐灰色粘質土（黄褐色土混　腐植物多く混
礫多く混）
16 濁黄褐色粘質土（褐灰色土混　礫混）
17 黒褐灰色粘質土（腐植物　礫握り拳大多く混
青灰色土ブロック混）
18 濁青灰色粘土（黒褐色土混）
19 褐灰色粘土（礫握り拳大多く混）
20 暗褐灰色粘質土（砂混　腐植物混）

第44図　遺構図9(SD301・302)

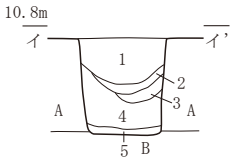


【タ区 SD704】



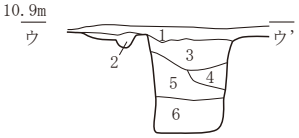
1 暗褐色粘質土（炭粒微量　黒ボク粒微量　黄褐色土粒少量混）
2 暗褐色粘質土（黄褐色土粒微量混）
3 濁褐色粘質土（黄褐色土混）
4 暗褐色粘質土（黄褐色土粒多量混）
5 暗褐色粘質土（黄褐色意土粒少量混）
6 暗褐色粘質土（黄褐色土粒多量混　木根痕か）
7 褐色粘質土（黄褐色土粒多量混）
8 褐色粘質土（水分多量含　黄褐色土少量混）

【H27 区 SD704】



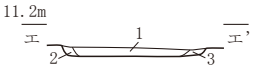
1 褐色粘質土（A層2～3mm大ブロック少量含）
2 茶褐色粘質土（A層2～3mm大ブロック多量含）
3 暗褐色粘質土（A層10mm大ブロック少量含）
4 灰褐色粘質土（A層2～3mm大ブロック少量含、しまり甘い）
5 淡褐色粘質土（砂粒含）
A ［地山土］黄色粘質土
B ［地山土］砂礫層（5～50mm円礫混）

【へ区 SD402】



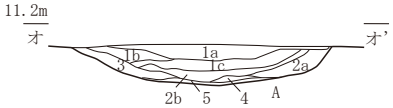
1 暗褐灰色土
2 濁暗褐色土
3 黒褐色土（黄褐色土混）
4 黒褐色土（黄褐色土混　層3より淡い）
5 暗褐色土
6 暗褐色土（黄褐色土粒(粗)多く混）

【タ区 SD701】



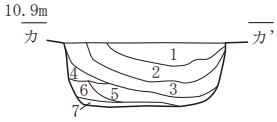
1 暗褐色粘質土
（黄褐色土粒多量黒ボク土粒混）
2 黒褐色粘質土
3 黒褐色粘質土

【H27 区 SD701】



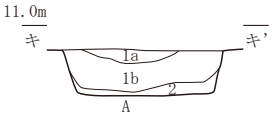
1a 灰色粘質土（A層ブロック少量含）
1b 灰色粘質土（A層ブロック多量含、褐色粘質土ブロック少量含）
1c 灰色粘質土（A層ブロック少量含、褐色粘質土ブロック少量含）
2a 灰褐色粘質土（A層ブロック少量含）
2b 灰褐色粘質土（A層ブロック多量含）
3 褐色粘質土（A層ブロック少量含）
4 黄色粘質土（地山土に同じ）
5 灰色粘質土
A ［地山土］黄色粘質土

【タ・ネ区 SD702】



1 暗褐色粘質土（黄褐色土粒多量　黒ボク粒(黒褐色土粒)まばらに混）
2 暗褐色粘質土（黄褐色土粒多量　黒ボク粒(黒褐色土粒)まばらに混
黒ボクブロック混）
3 暗褐色粘質土（黄褐色土粒多量　黒ボク粒(黒褐色土粒)まばらに混）
4 濁暗褐色粘質土（黄褐色土粒多量　黒ボクブロック多量混）
5 濁暗褐色粘質土（黄褐色土ブロック混　黒ボク土混）
6 濁黄褐色粘質土（黒褐色土多量混）
7 濁黄褐色粘質土（黒褐色土混）

【H27 区 SD702①】

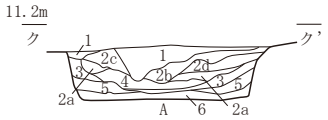


1a 褐色粘質土（A層5～10mm大ブロック多量含）
1b 褐色粘質土（A層5～10mm大ブロック多量含
暗褐色粘質土ブロック多量含）
2 淡褐色粘質土（A層10mm大ブロック並量含）
A ［地山土］黄色粘質土

0　(1:60)　3m

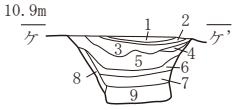
第45図　遺構図10(SD)

【H27 区 SD702②】



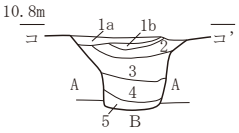
1　淡褐色粘質土
2a 淡褐色粘質土（A層1～5mm大ブロック少量含）
2b 淡褐色粘質土（A層5～10mm大ブロック少量含、暗褐色粘質土層ブロック並量含）
2c 淡褐色粘質土（A層5～10mm大ブロック少量含、暗褐色粘質土層ブロック少量含）
2d 淡褐色粘質土（A層10～30mm大ブロック多量含、暗褐色粘質土層ブロック多量含）
3　褐色粘質土（A層5mm大ブロック少量含）
4　暗褐色粘質土（A層5～10mm大ブロック多く混）
5　黄色粘質土（褐色粘質土ブロック並量含）
6　濁灰黄色粘土（しまり有、均質）
A　［地山土］黄色粘質土

【ネ区 SD703】



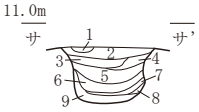
1 暗褐灰色粘質土（炭粒混　黄褐色土粒混）
2 暗褐灰色粘質土（炭粒混　砂粒多量混）
3 暗褐灰色粘質土（黄褐色土粒まばらに混）
4 暗褐灰色粘質土（層3より暗い色調　黄褐色土ブロック混）
5 暗褐灰色粘質土（砂粒多量混）
6 暗褐灰色粘質土
7 暗褐灰色粘質土（砂粒多量混）
8 濁暗褐灰色粘質土（黄褐色土混）
9 暗褐灰色粘土（黒色強い　水分多く含黄褐色土粒まばらに混）

【H27 区 SD703】



1a 暗褐色粘質土（A層5～10mm大ブロック少量含）
1b 暗褐色粘質土（A層10mm大ブロック多量含）
2　暗灰色粘質土（下に褐色粘質土層1cm厚で堆積）
3　褐色粘質土
4　暗褐色粘質土
5　黒褐色粘質土（しまり甘い）
A ［地山土］明黄褐色粘質土
B ［地山土］黄色粘土

【ヘ区 SD401】



1 褐灰色土
2 暗褐灰色土（黄色土ブロック混）
3 暗褐灰色土
4 暗褐灰色土（層3よりやわらかい）
5 暗褐色土
6 暗褐色粘質土
7 暗褐色粘質土
8 濁暗褐色粘質土（明黄シルト混）
9 暗褐色粘質土（水気有　軟質）

第46図　遺構図11(SD)

第3節　小　　結

調査の結果、大きく3時期の遺構・遺物を確認した。まず弥生時代終末期から古墳時代中期頃には、調査区の北部において集落が営まれおり、土坑や溝を確認した。明確な建物は検出できなかったが、SB10は掘立柱建物の可能性がある。これらの遺構はSD6とSD102の間に展開する。

古代は、調査区北部のP104から7世紀頃の須恵器杯、P124から8世紀頃の土器等、SK2から11世紀代の土師器皿、南部ではSK701から9世紀頃の須恵器双耳瓶が出土している。その他に包含層などからも少量の遺物がみられるが、時期や検出位置にまとまりがみられない。

中世は、調査区北側で掘立柱建物等からなる集落を確認した。建物は総柱と側柱がみられ、SB1・7は総柱、SB2・4・8は側柱である。配置状況からSB1とSB2またはSB4、SB7とSB8という組み合わせが推定され、主屋の総柱と納屋的な側柱という関係にあるのではないだろうか。これらは建物の軸からSB1近辺の建物グループとSB7・8の建物グループに分かれる。井戸は1基のみで位置的にみてSB1に伴うものと考えられる。井戸の土師皿9とSB7柱穴の土師皿27はともに13世紀代とみられるが、井戸はそれ以前の使用が考えられることから、SB1近辺の建物グループが先行していた可能性がある。竪穴状遺構SX4も中世に属するだろう。

3時期の集落は、地形から判断して高所である西側の田畠下に広がるものとみられる。第51図で中代町の水田中に大聖寺川の氾濫原を確認できる。調査区の反対にも低地の痕跡がみられることから、居住域はこの間の微高地上にあり、低地部分は水田等として利用されていたものと推定される。

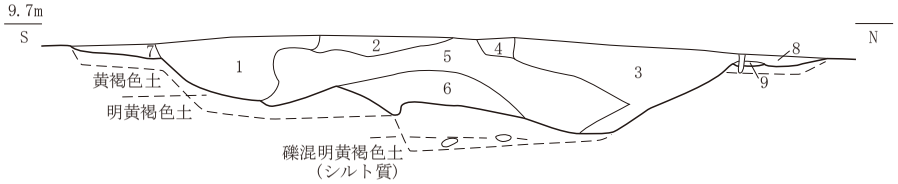
【イ区 SX1】

1 黒褐灰色土（焼土粒微量混）
2 暗褐灰色土（弱粘質）
3 濁黄褐色土（黒褐色土混　風倒木埋土）
4 黒褐色土（風倒木埋土）

【イ区 SX2】

1 暗褐色土
2 濁暗褐灰色土
3 黒褐色土（少し砂気有　炭粒　焼土粒　土器片混）
4 黒褐色土（炭粒少量混　黄褐土ブロック混）
5 黒褐色土（炭粒少量混）
6 濁黄褐色土
7 黒褐色土（黄褐色土粒まばらに混）

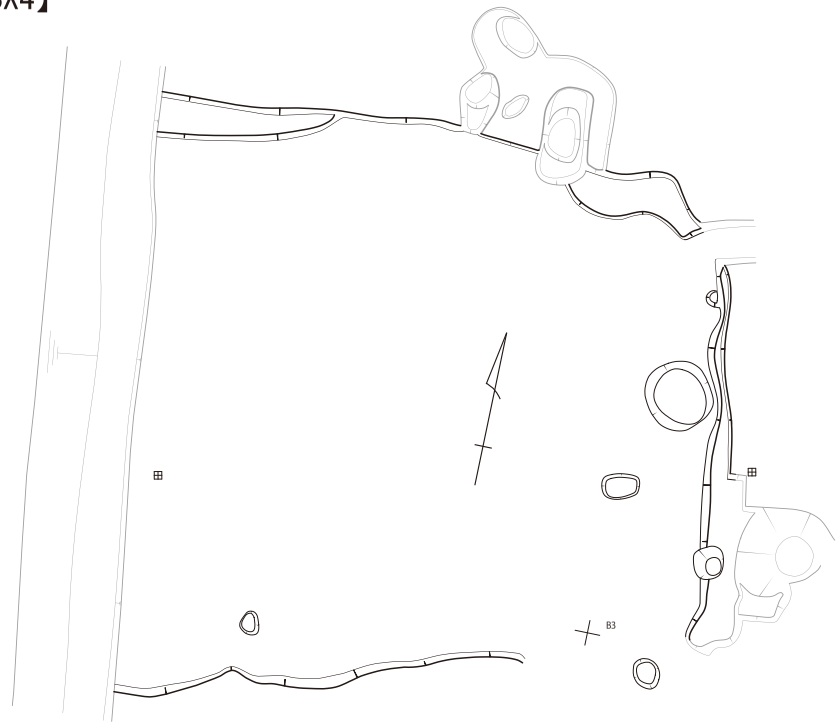
【ホ区 SX201】

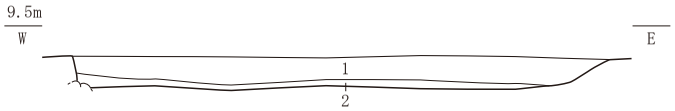


1 黒褐色土（黒ボク混）
2 濁黄褐色土
3 黒褐色土（黒ボク混）
4 濁黄褐色土
5 黄褐色土
6 明黄褐色土
（地山との境に褐色土帯状に広がる）
7 褐色土
8 暗褐色土
9 褐灰色土

0　(1:40)　2m

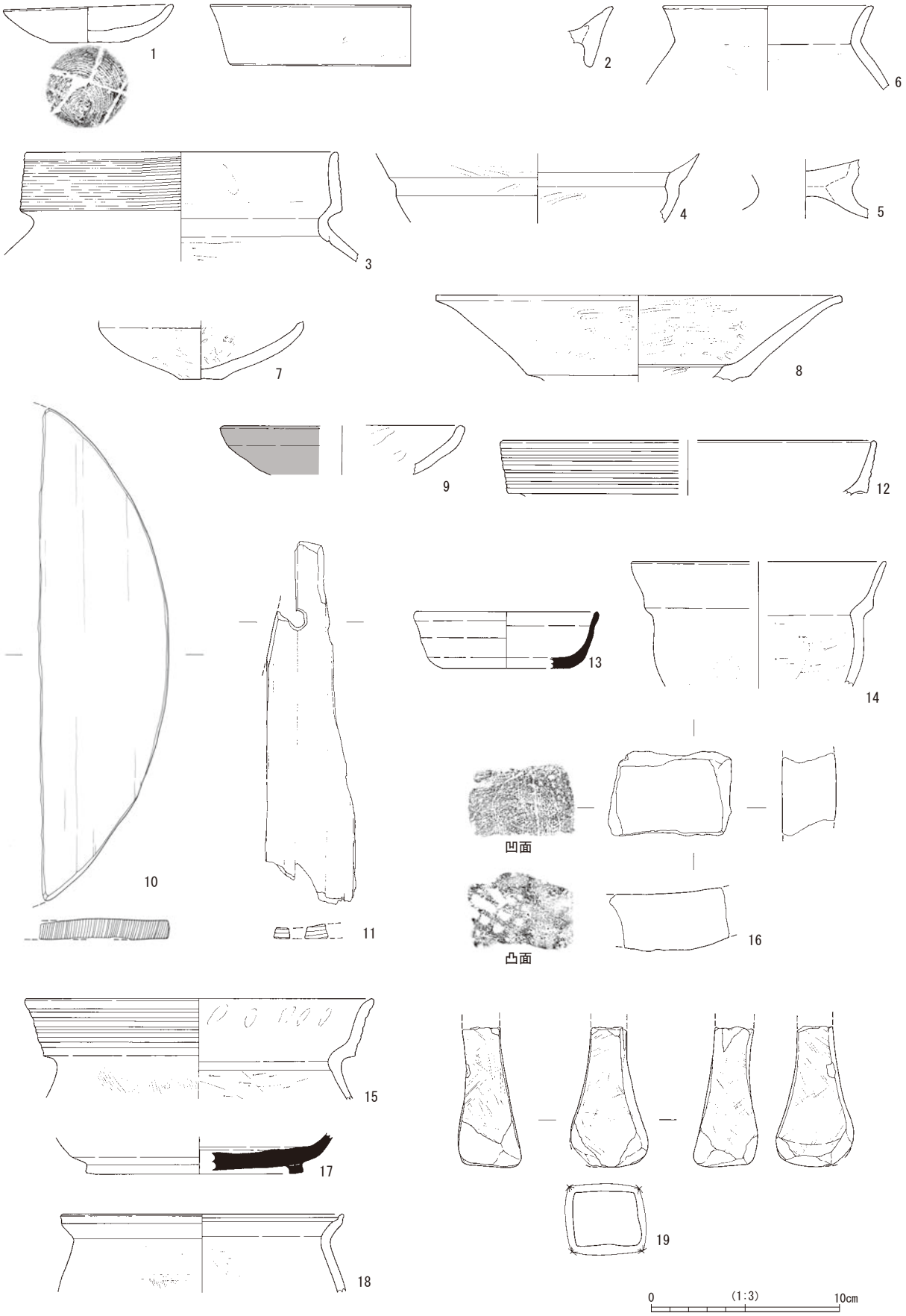
【SX4】



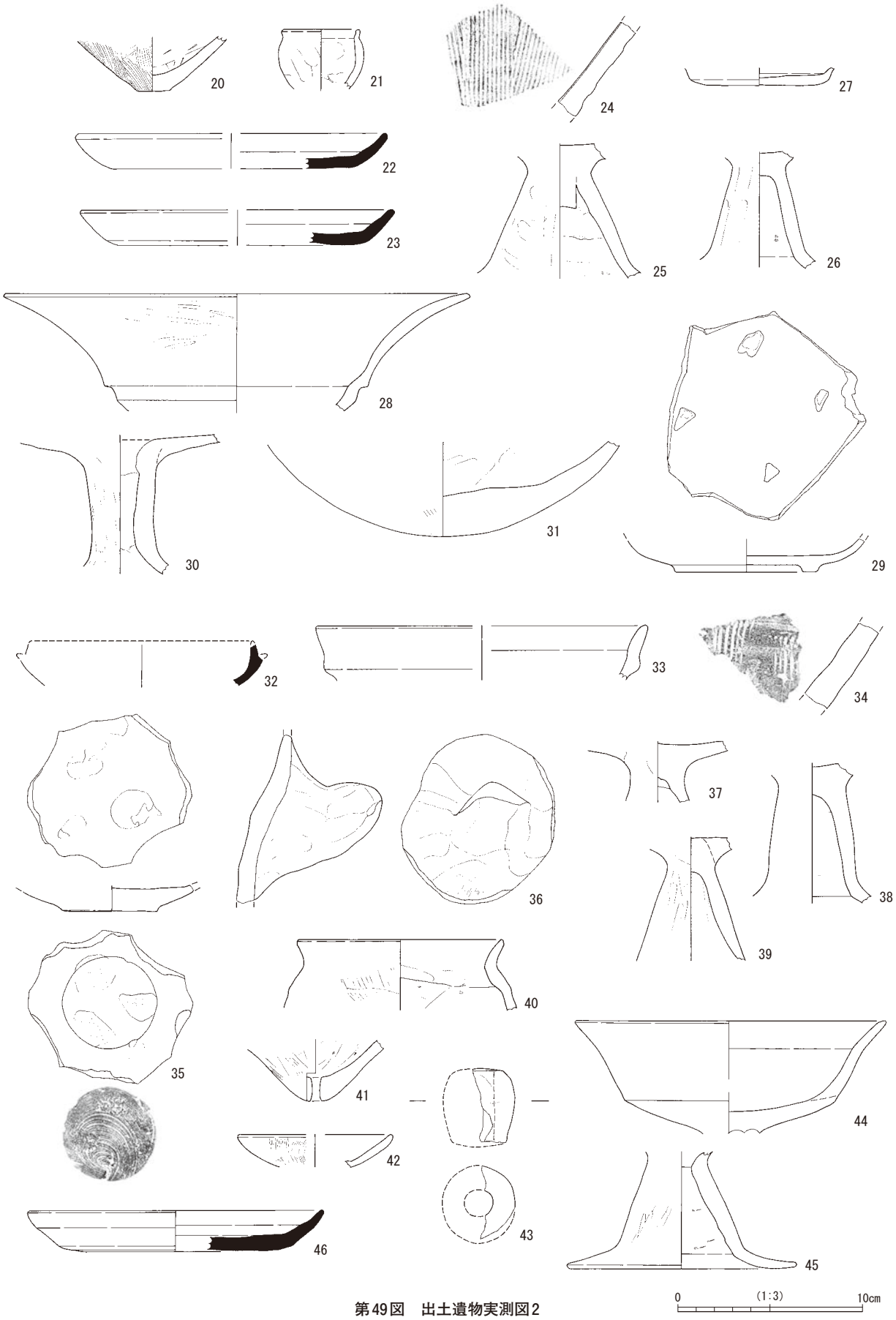


1 暗褐灰色土（砂粒　炭粒まばらに混）
2 暗褐灰色粘質土（黄褐色土ブロックまばらに混）

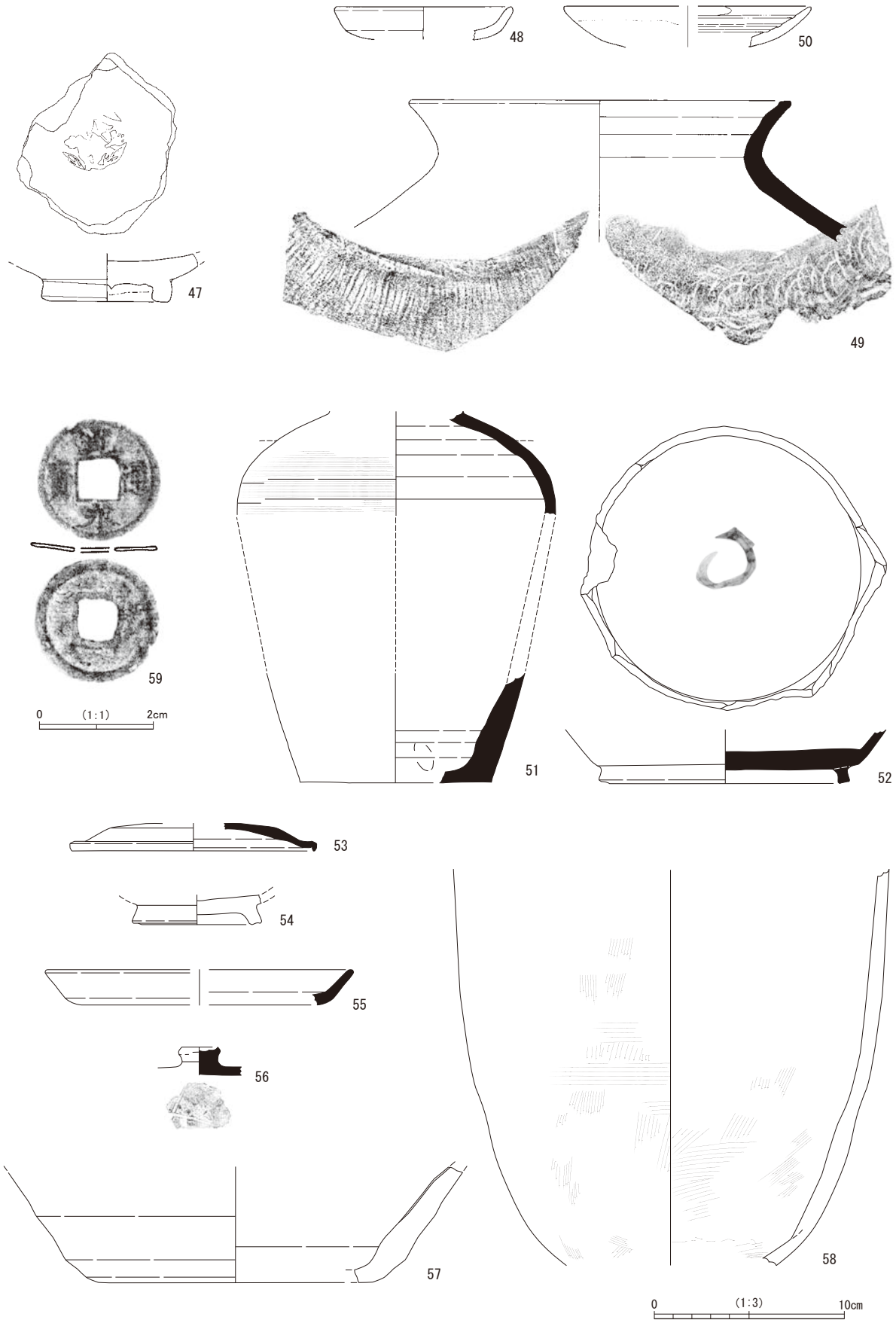
第47図　遺構図12（SX）



第48図　出土遺物実測図1



第49図　出土遺物実測図2



第50図　出土遺物実測図3

報告番号	調査年次	遺構 区　層位	種類 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm) 重量(g)	口縁残 底部残	色調（内） 色調（外）	焼成	調整（内） 調整（外）	備考	図化番号
1	1次	イ区	土師器	8.8	2.05	1/12	橙	良	ロクロナデ		D1
		SK2	皿	4.2		12/12	黄橙		ロクロナデ、糸切り		
2	1次	ル区	弥生土器		(3.2)		橙	良	ヨコナデ		C16
		SK4	器台				橙		ミガキ		
3	1次	ヲ区	弥生土器	16.4	(5.8)	1/12	浅黄橙	良	擬凹線9条、ヨコナデ	外面煤付着	C18
		SK501	甕				にぶい黄橙		ナデ、ケズリ		
4	1次	ヲ区	弥生土器		(3.65)		黄橙	良	ミガキ	外面黒斑あり	C19
		SK501	鉢				浅黄橙		ミガキ		
5	1次	ヲ区	弥生土器		(3.1)		浅黄橙	並	磨耗のため調整不明		C20
		SK501	台付鉢か甕				浅黄橙		磨耗のため調整不明		
6	1次	ヲ区	弥生土器	11.1	(4.5)	1/12	赤黒	良	ヨコナデ、ナデ		C21
		SK501	甕				にぶい赤褐		ヨコナデ		
7	1次	ヲ区	弥生土器		(5.1)		灰褐	良			C22
		SK501	壷	2.2		3/13	灰黄褐		ミガキ		
8	1次	ヲ区	弥生土器	21.4	(4.55)	1/12	浅黄橙	良	ミガキ		C23
		SK501	高坏				橙		ミガキ		
9	1次	ト区	土師器	「13.0」	(2.6)	1/12	黄橙	良	ナデ	外面漆か	D5
		SE1	皿				黒		ナデ		
10	1次	ト区								最大長：26.1cm 最大幅：6.9cm 最大厚：1.1cm	木1
		SE1	曲物(底板)								
11	1次	ト区								最大長：19.2cm 最大幅：4.8cm 最大厚：0.8cm	木2
		SE1	板状木製品								
12	1次	チ区	弥生土器	「19.7」	(2.9)	1/12	浅黄、橙	良	ヨコナデ	外面煤付着　SB4	C13
		P29	甕				浅黄、橙		擬凹線6条、ヨコナデ		
13	1次	ロ区	須恵器	9.6	3.0	1/12	黄灰	良	ロクロナデ、ナデ		D2
		P104	無台坏	6.8		2/12	褐灰		ロクロナデ、ケズリ		
14	1次	ロ区	土師器	「13.4」	(6.5)	1/12以下	にぶい黄橙	良	ハケメ、ケズリ	内面磨耗	C6
		P118	鉢				にぶい黄橙		ハケメ		
15	1次	チ区	弥生土器	18.3	(5.3)	2/12	浅黄橙、褐灰	良	ヨコナデ、指頭痕、ケズリ	SB10	C12
		P122	甕				灰黄褐		擬凹線5条,ナデ、ハケメ		
16	1次	チ区	瓦				灰白	不良	凸面：格子タタキ	最大長：4.5cm 最大幅：6.55cm 最大厚：3.1cm	D6
		P124	平瓦				灰白		凹面：布目		
17	1次	チ区	須恵器		(2.1)		灰	良	ロクロナデ		D7
		P124	有台坏	11.0		3/12	灰		ロクロナデ、ナデ		
18	1次	チ区	土師器	14.8	(4.1)	1/12	にぶい黄橙	良	ヨコナデ、ハケメ		D8
		P124	甕				にぶい黄橙		ヨコナデ、ハケメ		
19	1次	チ区								最大長：7.45cm 最大幅：4.1cm 最大厚：3.3cm	石1
		P124	砥石(砂岩)		116.5g						
20	1次	チ区	弥生土器		(2.9)		浅黄	良	ケズリ		C14
		P132	甕	1.7		12/12	黄灰		ハケメ		
21	1次	ワ区	土師器	6.0	(3.2)	3/12	にぶい黄橙	良	ナデ		C26
		P136	手づくね				にぶい黄橙				
22	1次	ヌ区	須恵器	「16.6」	1.9	1/12以下	灰	良	ロクロナデ、ナデ		D9
		P303	無台坏	13.0		1/12以下	灰		ロクロナデ		
23	1次	ヌ区	須恵器	「16.8」	1.9	1/12以下	灰	良	ロクロナデ		D10
		P304	無台坏	13.0		1/12以下	灰		ロクロナデ		
24	1次	ト区	越前焼		(5.1)		暗灰黄	良		おろし目	D14
		P305	擂鉢				灰黄		ロクロナデ		
25	1次	ヲ区	土師器		(17.2)		橙	良	ケズリ、ナデ		C24
		P506	高坏				橙		ナデ		
26	1次	ヲ区	土師器		(6.2)		橙	良	ケズリ、ナデ		C27
		P506	高坏				橙		ナデ		
27	1次	カ区	土師器		1.05		橙	不良	磨耗のため調整不明	SB7	D11
		P601	皿	7.4		6/12	橙		磨耗のため調整不明		
28	1次	イ区	弥生土器	25.0	(6.3)	1/12	浅黄橙	並	ミガキ	内面赤彩	C1
		SD3	高坏				浅黄橙		ミガキ		
29	1次	ト区	陶器		(1.8)			良		釉調：透明な黄褐色、気泡少ない、貫入なし 胎土色調：灰黄褐	D13
		SD5	皿	7.1		11/12					
30	1次	ト区	弥生土器		(7.5)		浅黄橙	良	ミガキ		C9
		SD6	高坏				浅黄橙		ハケメのちミガキ		
31	1次	ル区	土師器		(5.1)		暗灰	並	ナデ		C17
		SD6	甕				浅黄橙		ハケメかすかに残る		
32	1次	ト区	須恵器		(2.2)		灰	並	ロクロナデ		D15
		SD7	坏身				灰		ロクロナデ		

第8表　加茂ボケ生水ウラ遺跡出土遺物観察表1

報告番号	調査年次	遺構 区	遺構 層位	種類 器種	口径(cm) 底径(cm)	器高(cm) 重量(g)	口縁残 底部残	色調（内） 色調（外）	焼成	調整（内） 調整（外）	備考	図化番号
33	1次	チ区	SD102	土師器 甕	「17.8」	(2.9)	1/12	にぶい黄橙 灰黄褐	良	ヨコナデ ヨコナデ		C11
34	1次	ホ区	SD202	珠洲焼 擂鉢		(4.6)		灰 灰	良	ロクロナデ ロクロナデ	おろし目	D12
35	1次	ヘ区	SD401	陶器 皿	5.15	(1.9)	12/12				唐津砂目 釉薬：鉄釉	D4
36	1次	ヘ区	SD402	土師器 甑か甕		(9.1)		浅黄橙 橙	並	剥離、一部ハケメ残る ナデ、一部ハケメ残る		C7
37	1次	ヘ区	SD402	土師器 高坏		(3.2)		黄橙 橙	良	ナデ		C8
38	1次	イ区	SX2	土師器 高坏		(7.5)		橙 橙	並	ナデ		C2
39	1次	イ区	SX2	土師器 高坏		(6.7)		橙 橙	良	しぼり目 ナデ、ミガキ		C3
40	1次	イ区	SX4	弥生土器 甕	10.9	(3.8)	1/12	橙 明赤褐	良	ヨコナデ、ケズリ ヨコナデ		C4
41	1次	イ区	SX4	弥生土器 有孔鉢		(3.3)		にぶい黄橙 浅黄橙	良	ケズリ ハケメ	外面一部黒斑あり 穿孔焼成前	C5
42	1次	ト区	SX4北	土師器 皿？	「8.0」	(1.7)	1/12	黒 黒	良	ハケ？		D16
43	1次	ト区	カクラン	土製品 土錘				浅黄橙 浅黄橙	良	ナデ	最大長：5.0cm	C10
44	1次	リ区	包含層	土師器 高坏	18.7	(6.1)	1/12	浅黄橙 浅黄橙	不良	磨耗のため調整不明 磨耗のため調整不明		C15
45	1次	ヲ区	カクラン1	土師器 高坏	12.1	(6.3)	12/12	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良	ナデ、ケズリ ミガキ		C25
46	1次	ホ区	表土除去	須恵器 皿	15.8 11.0	2.2	2/12 4/12	灰白 灰白	良	ロクロナデ ロクロナデ、ナデ	内面全体に降灰あり	D3
47	1次	ル区	カクラン溝	磁器 碗	6.78	(2.55)	12/12				青磁　文様あり　釉薬：青磁釉(オリーブ灰、透明感あり、内面貫入わずかにあり) 胎土色調：灰白	D17
48	1次	ヨ区	包含層	土師器 皿	9.15 8.1	(1.7)	1/12 2/12	橙 橙	良	ヨコナデ ナデ	内面かすかに油痕か、灯明痕か	D18
49	1次	ヲ、ワ区	カクラン溝	須恵器 甕	20.0	(7.4)	3/12	灰 灰、灰白	良	ロクロナデ、タタキ ロクロナデ、当て具痕		D19
50	1次	ヨ区	包含層	土師器 灯明皿	「12.8」	(2.1)	1/12以下	浅黄橙 浅黄橙	良	ロクロナデ ナデ	釉薬色調：にぶい黄褐	D20
51	2次	D23区	SK701	須恵器 双耳瓶	10.1	(5.5)(5.8)	2/12	灰 灰	良	ロクロナデ、指頭痕 ロクロナデ、カキ目、ナデ	耳痕あり	H27 D2
52	2次	D22区	SD702	須恵器 坏(転用硯)	13.2	(2.9)	12/12	灰 灰	良	ロクロナデ ロクロナデ、ロクロケズリ	底部外面に墨痕　内面墨痕　打ち欠きか？	H27 D1
53	2次	D23区	SD702	須恵器 蓋	12.8	(1.5)	1/12	にぶい褐 にぶい褐褐	やや甘	ロクロナデ ロクロケズリ、ロクロナデ	重ね焼痕あり	H27 D4
54	2次	D23区	SD702	土師器 有台埦	6.8	(1.6)	4/12	浅黄橙 浅黄橙	良	ロクロナデ、ナデ ロクロナデ	底部糸切り	H27 D5
55	2次	D23区	SD702	須恵器 盤	「16.1」	1.9	小片	青灰 青灰	良	ロクロナデ ロクロナデ	重ね焼痕あり	H27 D7
56	2次	D23区	SD702	須恵器 蓋		(1.5)		灰 灰	良	ロクロナデ ロクロナデ、ロクロケズリ	内面ヘラ記号あり つまみ径：2.2cm	H27 D8
57	2次	D22区	SD703	越前焼？ 擂鉢	14.4	(6.1)	1/12	にぶい黄橙 にぶい黄橙	良	ロクロナデ？	中世末15～16C おろし目	H27 D3
58	2次	D21区	SD704	土師器 長胴甕		(20.8)		浅黄橙 浅黄橙	良	ハケ、ナデ ハケ		H27 D6
59	1次	ヨ区	P208	寛永通宝		1.46g					最大長：2.2cm 最大幅：2.2cm 最大厚：0.5cm	金1

第9表　加茂ボケ生水ウラ遺跡出土遺物観察表2

第6章　総　　括

一般県道片山津山代線の工事に伴う加茂キツネ塚遺跡、加茂新高遺跡、加茂ボケ生水ウラ遺跡の発掘調査は、3年度にわたり延べ面積7,200㎡を実施した。3遺跡で検出した遺構・遺物は調査面積に比べて希薄であったが、これは過去の耕地整理による削平が影響している。加茂キツネ塚遺跡は土層観察からその影響は軽微であったとみられるが、残り2遺跡は、ほぼ調査区全域に削平が及んでいる。このため遺構の形状や覆土の色、質、位置関係などから時期や性格などを推定したものが多くあり、そのための誤認もあるかと思われる。このような状況ではあるが遺跡の内容をまとめたい。

加茂キツネ塚遺跡は、調査地北部で弥生時代後期後葉の自然河道と水路等を検出した。自然河道のそばでは貯蔵穴の可能性がある土坑を検出した。削平分を考慮しても全般的に遺構・遺物は希薄であり、集落縁辺の状況を呈する。

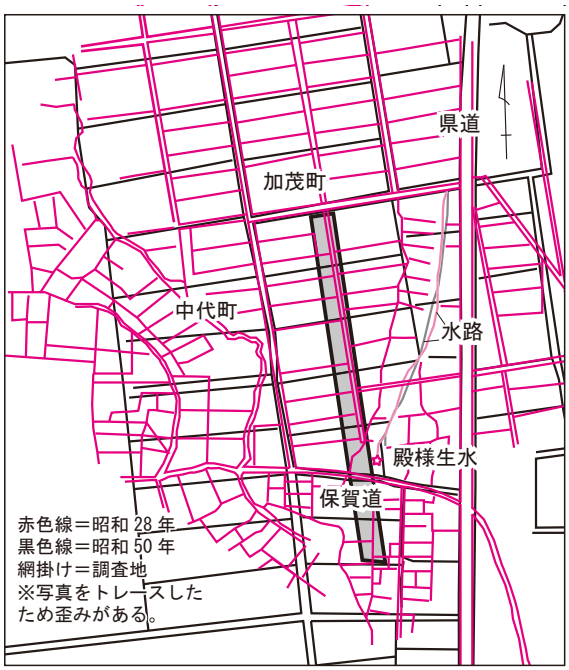
加茂新高遺跡は、中世の井戸2基と中世以降とみられる溝2条を検出した。遺物では、古墳時代中期または後期の埴輪片が2点出土しており、周辺に古墳の存在が示唆される。

加茂ボケ生水ウラ遺跡は3遺跡の中で最も多く遺構が検出され、調査地北部で弥生時代終末期から古墳時代中期、古代、鎌倉時代の集落を確認し、南部で近世以降とみられる溝を検出した。

以上の成果をまとめると、まず弥生時代後期後葉に加茂キツネ塚遺跡で集落(中心は現加茂集落付近)が現れるけれども、長くは続かなかったようである。この集落が移動したかは定かでないが、次の弥生時代終末期になると加茂ボケ生水ウラ遺跡で古墳時代中期頃まで継続する集落がみられる。

古代は各遺跡で少量の遺物を出土するが、遺構は加茂ボケ生水ウラ遺跡で数基の土坑等が確認されたのみで実態は不明である。

中世は、加茂新高遺跡で井戸2基、加茂ボケ生水ウラ遺跡で13世紀代の掘立建物数棟と井戸1基、竪穴状遺構1基が検出された。掘立柱建物は総柱と側柱があり、主屋と副屋の組み合わせが推定される。この時期の加茂町は山代庄に属しており、これを支えた集落の一角であったのだろう。



第51図　空中写真トレース図（約1/5,000）

近世以降と考えられる遺構では、加茂ボケ生水ウラ遺跡調査地南部の溝5条がある。

昭和28年の加茂町近辺の空中写真では、川の氾濫原に沿う田と耕地整理された田区画の違いが明瞭に確認される。ネ区の位置にあった農道は保賀道という字名が残されており、用水路が附属していた。農道下には同方向の土管も埋設されており、これとほぼ同方向にのびるSD301はこれらの前身にあたるものと考えられる。SD702・703は農道が敷設される以前の遺構であり、氾濫原沿いの田と軸方向が似ているから、その境を流れていた水路ではなかろうか。いずれも時期を確定し得るだけの出土遺物がないため、周辺の状況から近世以降と推定した。

調査地から北方を望む（第1次調査区南半部調査終了時）

調査地から南東方を望む（第2次調査終了時）

調査区全景（俯瞰、合成写真）

調査地遠景（第1次調査区北半部完掘時　北西から）

調査地遠景（第1次調査南半部完掘時　北東から）

調査地遠景（第2次調査時　東から）

調査地遠景（第2次調査時　北東から）

第2次調査区完掘状況（南西から）

SK101完掘状況（南東から）

SK101土層断面オ（南東から）

SD101完掘状況（北西から）

SD101土層断面カ（南東から）

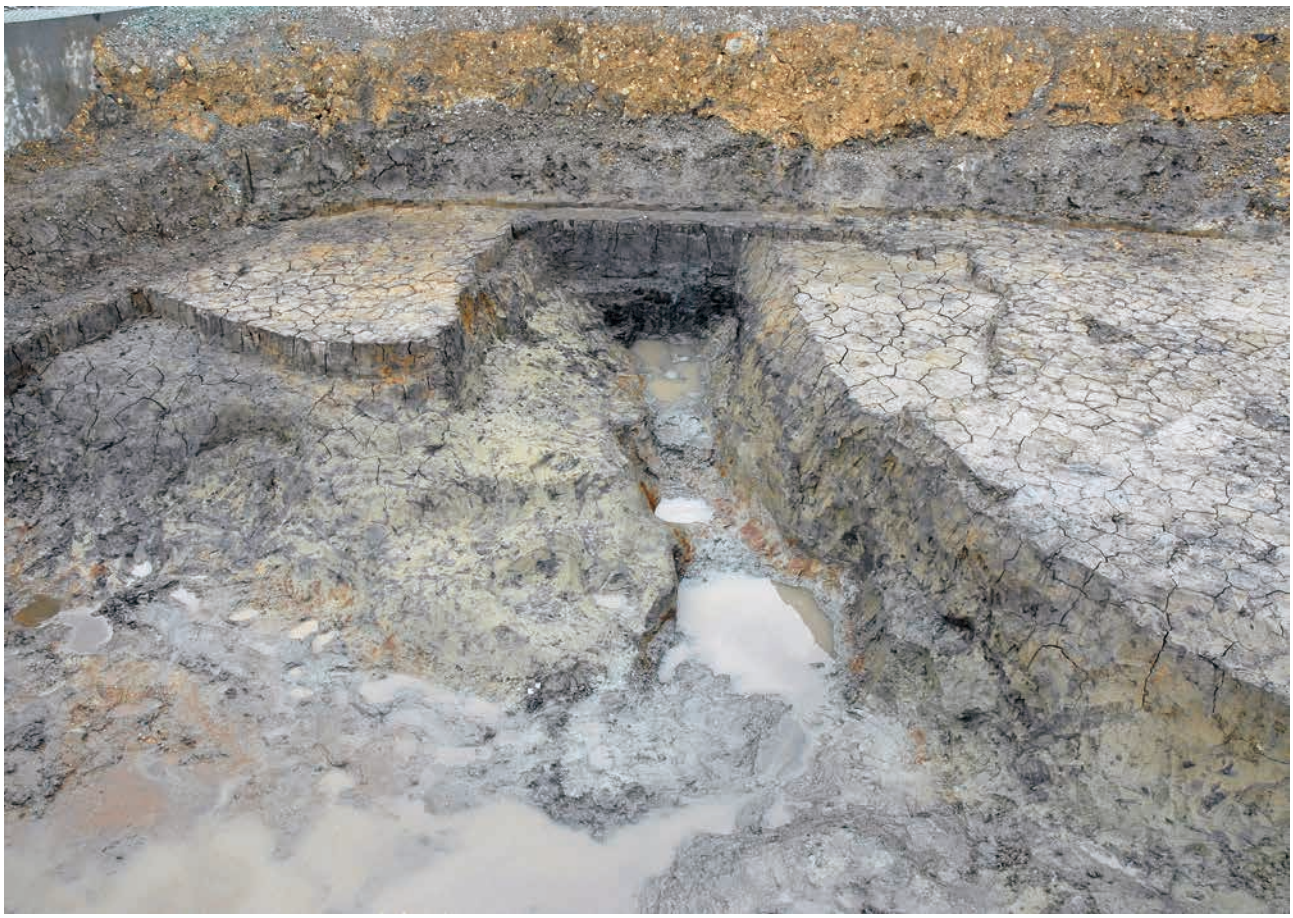
SD201完掘状況（南東から）

SD201完掘状況（北西から）

SD201土層断面エ（南から）

SD104完掘状況（南から）

SD104土層断面ケ（南から）



SD205完掘状況（北から）

SD205土層断面ウ（西から）

SD202 ～ 204完掘状況（南東から）

SD202 ～ 204完掘状況（南から）

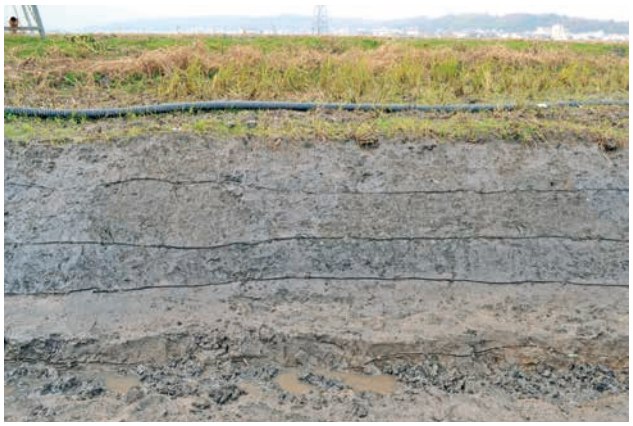
SD202土層断面ア（南西から）

SD203土層断面ア（南西から）

SD204土層断面イ（南から）

SX101土層断面コ（南西から）

調査区壁土層断面A（南東から）



調査区壁土層断面C（南東から）

調査区壁土層断面D（北西から）

発掘作業風景（第1次調査　南西から）

発掘作業風景（第2次調査　西から）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
16
17
18
19
20
22
23
24
25
26
27
28
30
32
33
34
35
36
37
38
39

40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
64

調査地上空から東方（加茂集落）を望む

調査地上空から西方を望む

完掘状況（俯瞰、合成写真）

調査地上空から南方を望む

調査地上空から北方を望む

発掘調査着手前の状況

A区　完掘状況（南から）

B区完掘状況（北から）

C区完掘状況（北東から）

1・2号井戸周辺完掘状況（南から）

1号井戸土層断面ア（南西から）

1号井戸完掘状況（西から）

2号井戸完掘状況（南西から）

調査区西壁土層断面A（東から）

1号溝完掘状況（南西から）

1号溝土層断面エ（西から）

2号溝完掘状況（南西から）

2号溝土層断面オ（南西から）

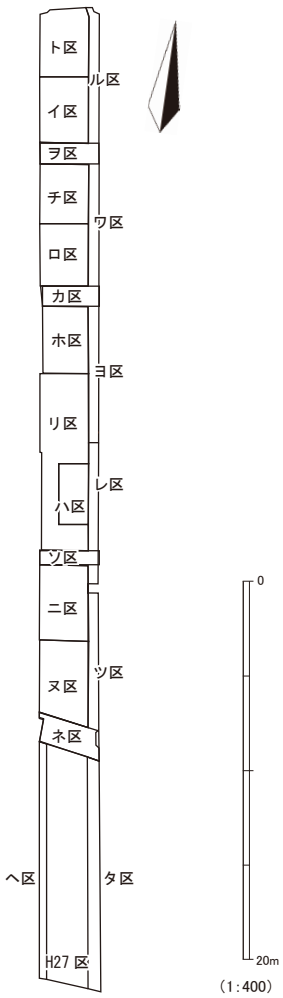
3号溝完掘状況（北東から）

3号溝土層断面キ（南西から）

加茂新高遺跡上空から北方に加茂キツネ塚遺跡を望む

H26調査区俯瞰（北から）

H27調査区俯瞰（南から）


ト区
ル区
イ区
ヲ区
チ区
ワ区
ロ区
カ区
ホ区
ヨ区
リ区
レ区
ハ区
ソ区
ニ区
ツ区
ヌ区
ネ区
ヘ区
タ区
H27 区
0
20m
（1：400）

全体合成写真

北部建物群

南部溝群

掘削終了ト区（南から）

掘削終了イ区（北から）

掘削終了ル区（北から）

掘削終了ヲ区（西から）

掘削終了チ区（南から）

掘削終了ロ区（北から）

掘削終了ワ区（北から）

掘削終了カ区（西から）

掘削終了ホ区（南から）

掘削終了リ区（北から）

掘削終了ハ区（南から）

掘削終了ヨ区（南から）

掘削終了レ区（南から）

掘削終了ソ区（西から）

掘削終了ニ区（南から）

掘削終了ヌ区（北から）

掘削終了ネ区（東から）

掘削終了ツ区（北から）

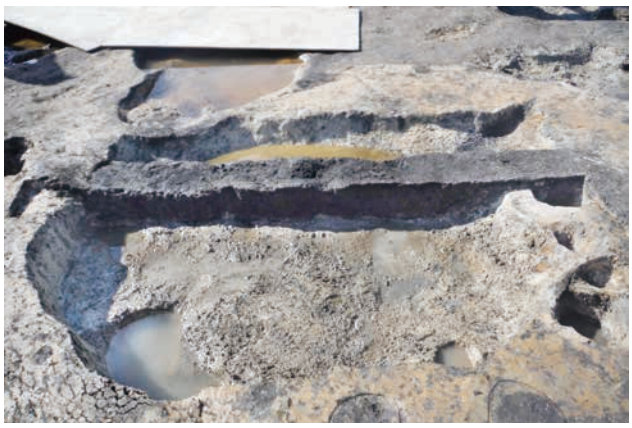
掘削終了ヘ区（北から）

掘削終了タ区（北から）

ヲ区SK1完掘状況（東から）

ル区SK4土層断面（東から）

ル区SK4完掘状況（北から）



ヲ区SK501土層断面（南東から）

ヲ区SK501完掘状況（北東から）

ル区SK5土層断面（西から）

ル区SK5完掘状況（南西から）

ツ区SK301土層断面（西から）

ツ区SK301完掘状況（西から）

ト区SE1土層断面（東から）

ト区SE1完掘状況（北から）

イ区SX1完掘状況（西から）

イ区SX2遺物出土状況

イ区SX2土層断面（南から）

イ区SX2完掘状況（南西から）

ト区SX4土層断面（南東から）

ト区SX4完掘状況（東から）

ホ区SX201土層断面（東から）

ト区SB1-P15土層断面（北から）

ト区SB1-P12土層断面（北から）

ト区SB1（東から）

ル区SB2・3（北から）

ル区SB4-P26土層断面（東から）

ル区SB4-P25土層断面（東から）

ロ区SB7（北から）

ロ区SB7-7土層断面（西から）

ロ区SB7-2土層断面（西から）

カ区SB7の南辺（西から）

カ区SB7-P601遺物出土状況（東から）

カ区SB7-P604土層断面（北西から）

ロ区SB8（北西から）

チ区SB10（北から）

チ区P124遺物出土状況（東から）

ヨ区P208完掘状況（北から）

イ区SD1土層断面（北から）

イ区SD1完掘状況（北から）

ト区SD5・6完掘状況（南東から）

チ区SD102土層断面（北東から）

ヲ区SD102土層断面（西から）

チ区SD102完掘状況（北東から）

ホ区SD201・202土層断面（東から）

ホ区SD201・202完掘状況（東から）

ツ区SD301①土層断面（西から）

ヌ区SD301②土層断面（西から）

ヌ区SD301③土層断面（東から）

ツ・ヌ区SD301（東から）

ヌ区SD302②土層断面（東から）

ヌ区SD302（北東から）

ツ区SD302①土層断面（西から）

ツ区SD302（北東から）

ヘ区SD401土層断面（北から）

ヘ区SD401(北東から)

ヘ区SD402土層断面（東から）

ヘ区SD402完掘状況（東から）

タ区SD702土層断面（南から）

タ区SD702完掘状況（南西から）

ネ区SD703土層断面（北から）

ネ区SD703完掘状況（南から）

タ区SD704土層断面（西から）

タ区SD704完掘状況（南東から）

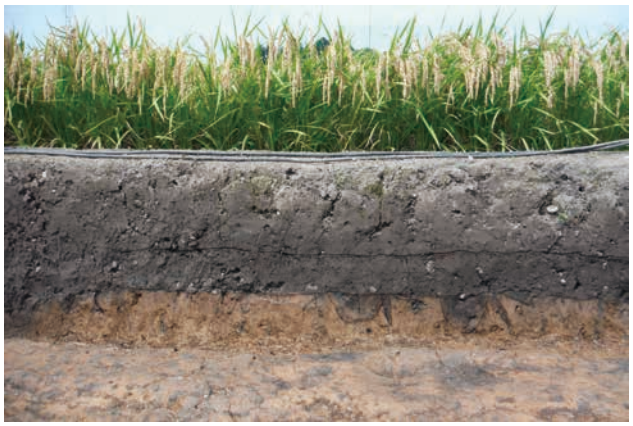
ネ区溝群（南から）

ソ区東壁土層断面（西から）

ヨ区東壁②土層断面（西から）

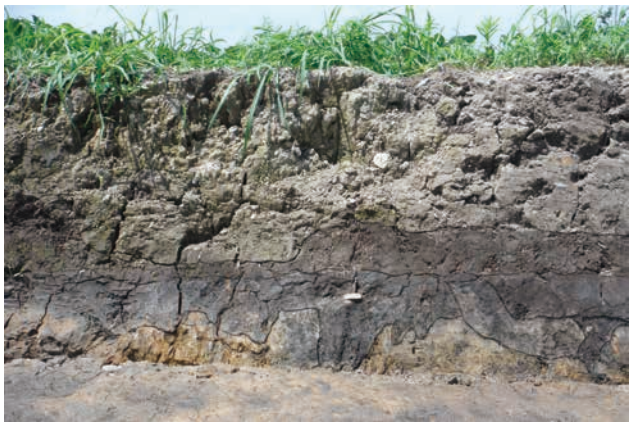
ワ区東壁土層断面（西から）

ル区東壁土層断面（西から）



ヌ区西壁土層断面（東から）

チ区西壁土層断面（東から）



ト区西壁土層断面（東から）

イ区遺構検出作業

空中写真測量委託2回目

調査区と殿様生水（南西から）

SK701・702完掘状況（南から）

SK701・702土層断面（南から）

SD701完掘状況（西から）

SD701土層断面イ（東から）

SD701・702完掘状況（南西から）

SD702・703完掘状況（北東から）

SD702土層断面ク（南から）

SD703完掘状況（南西から）

SD703土層断面コ（南西から）

SD704完掘状況（東から）

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
カもボケ'14
トSE1 0819
13
カもボケ'14
チP29 0825
14
15
16
17
カもボケ'14
チP124 0804
18
19
20

21
23
24
22
25
27
26
28
29
31
30
32
33
34
38
37
36
39
35
40
41
42

43
44
45
48
46
47
49
50
※51～58は平成27年度調査
の出土遺物
51
53
52
55
56
54
59
57
58

報告書抄録

ふりがな	かがし　かもきつねづかいせき　かもしんたかいせき　かもぼけしょうずうらいせき
書名	加賀市　加茂キツネ塚遺跡　加茂新高遺跡　加茂ボケ生水ウラ遺跡
副書名	地方道改築事業（一）片山津山代線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	立原秀明、澤辺利明、矢部史朗
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
所在地	〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1　TEL(076)229-4477　FAX(076)229-3731
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
発行年月日	2016年3月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (新)	東経 (新)	発掘期間	発掘面積	発掘原因
加茂キツネ塚遺跡	石川県 加賀市 加茂町地内	17206	642700	36度 18分 42秒	136度 21分 30秒	20130920 ～ 20131210	1,750㎡	記録保存調査
						20140512 ～ 20140611	450㎡	
加茂新高遺跡	石川県 加賀市 加茂町地内	17206	642500	36度 18分 28秒	136度 21分 28秒	20131015 ～ 20131205	1,140㎡	記録保存調査
加茂ボケ生水ウラ遺跡	石川県 加賀市 加茂町地内	17206	642600	36度 18分 15秒	136度 21分 30秒	20140513 ～ 20141027	3,190㎡	記録保存調査
						20150507 ～ 20150610	670㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加茂キツネ塚遺跡	集落跡	弥生時代	土坑、溝、自然河道	弥生土器	
加茂新高遺跡	集落跡	中世	井戸、溝	須恵器、土師器	埴輪片出土
加茂ボケ生水ウラ遺跡	集落跡	弥生時代～中世	掘立柱建物、井戸、土坑	弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器	

要約

（加茂キツネ塚遺跡）調査区域は集落の縁辺にあたるとみられ、弥生時代後期後葉の自然河道や水路、時期不詳の土坑や耕作溝などを確認した。遺構・遺物の分布状況から弥生集落の中心は、調査地の南東方向、現加茂集落の北辺域に想定される。

（加茂新高遺跡）調査区域は集落の縁辺にあたるとみられ、中世の素掘り井戸2基、中世以降の溝2条のほか小穴数個を確認した。中世集落の主体は、調査地東側の加茂集落域にあると推定される。また、古墳時代中期あるいは後期の埴輪片2点や古墳時代終末～古代の土師器、須恵器が出土しており、周辺に古墳や古代の集落が存在する可能性がある。

（加茂ボケ生水ウラ遺跡）調査地北部では、弥生時代終末期～古墳時代中期と中世の集落を確認した。中世は鎌倉時代の掘立柱建物や井戸などの遺構を検出した。同南部では、近世以降とみられる田畠の区画溝と水路を検出した。

加賀市　加茂キツネ塚遺跡
加茂新高遺跡
加茂ボケ生水ウラ遺跡

発行日　平成28（2016）年3月25日

発行者　石川県教育委員会
〒920-8575　石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話　076-225-1842（文化財課）

(公財)石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
電話　076-229-4477
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　株式会社 ハクイ印刷